

福井市立郷土歴史博物館  
名品圖錄

保存



披書知昔

水くきのあとをしみればそのかみの人のこゝろも汲まれけるかな

(松平春嶽公「書をひらき昔を知る」の歌)

## はじめに

郷土福井は、千数百年余の宏遠な歴史を誇り、多くの先賢の余芳に包まれた由緒深い土地柄であります。そうした福井の歴史上の遺産と先人の遺功を正しく後世に伝え、健全な教育・文化・学術の発展に寄与することを目的として、当福井市立郷土歴史博物館が創設されたのは、昭和二十八年十一月のことでありました。

尔来三十年の間に、建物・施設の面は二次にわたる増改築を経たとは言え、近年新設の盛んな各地方博物館に比すれば、小規模・老朽化の感を免れぬものとなりました。しかし、博物館がその生命とする収蔵史料の面においては、旧福井藩主松平御両家から寄贈・寄託された「福井市春嶽公記念文庫」「越葵文庫」をはじめ、広く市民の皆様から御協力いただいた収蔵史料が、未整理のものも含め、実に二万五千点余を数えるに至り、その点では、質・量ともに、全国有数の規模を誇り光彩を放っております。当館が、このように立派な博物館に成長しましたのは、ひとえに皆様の御支援と御理解の賜物であり、厚く感謝申し上げる次第でございます。

この度創立三十周年を迎える、その記念事業として、「収蔵名品展」の開催と「福井市立郷土歴史博物館収蔵名品図録」の出版を企画致しました。当館創設以来の成果をお見せする意味で、皆様が御寄贈・御寄託下さった貴重な品を、出来るだけ数多く御紹介したいものと努力いたしましたが、実際にはほんの一部

のものしか展示・刊行することが出来ず、誠に申訳なく存じております。今回、御紹介し得なかつたものは、平常展示等の上で逐次公開し、御期待に添いたいと存じます。

創立三十周年を機会に、館員一同心を新たにして努力を重ね、諸般の活動を一層充実させると共に、親しみやすく御利用になりやすい歴史博物館を築き上げてゆきたいものと考えております。皆様にも、何とぞ従来に増しての御協力・御支援をたまわりますよう、衷心より願い上げる次第でございます。

昭和五十八年十月

福井市立郷土歴史博物館

解説	单色図版	原色図版	凡例	はじめに	目次
	一、絵画	二、書蹟	三、器類	四、什器・馬具	五、武具・馬具
	26	63	88	124	144
	9	7			4

## 凡例

一、本図録は、昭和五八年一〇月一日現在、福井市立郷土歴史博物館に収蔵する二万五千点余の諸資料の中から、一三三二件三四四点を選び編集したものである。

一、収録資料は、「絵画」「書蹟」「什器類（各種調度品・衣裳装身具類・その他の重器）」「武具・馬具」「記録・古文書」の五項目に分類し、解説してある。図版の部分には、いちいちその項目を標記していないが、この分類の順に掲載してある。

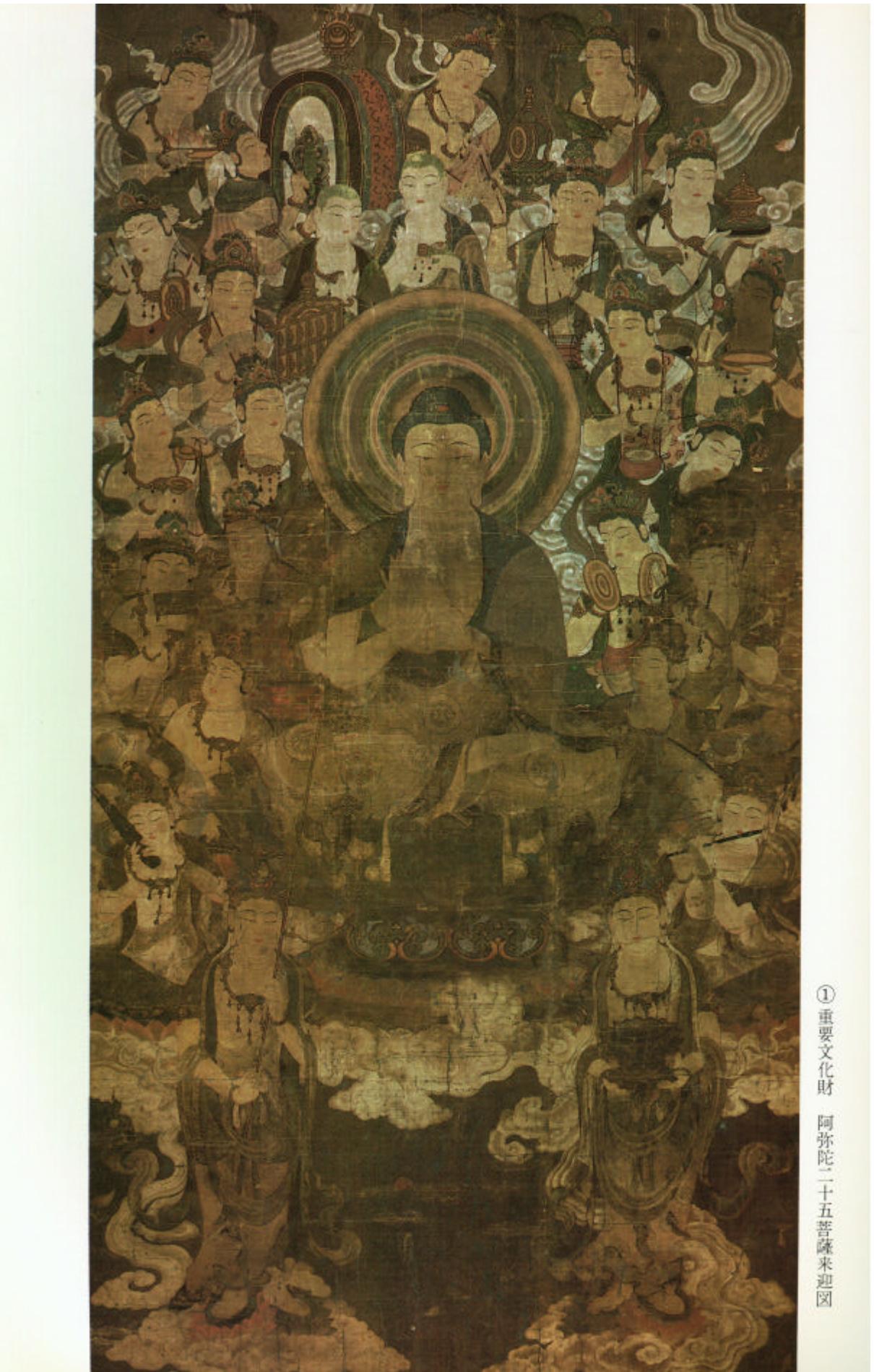
一、解説は、原則として資料名・材質・寸法・数量・所蔵者名・解説の順に記述してある。

寸法は、すべてセンチメートル、縦×横、縦（高）×横（巾）×奥行の順であるが、刃長・口径など特殊なものは、そのつど注記した。

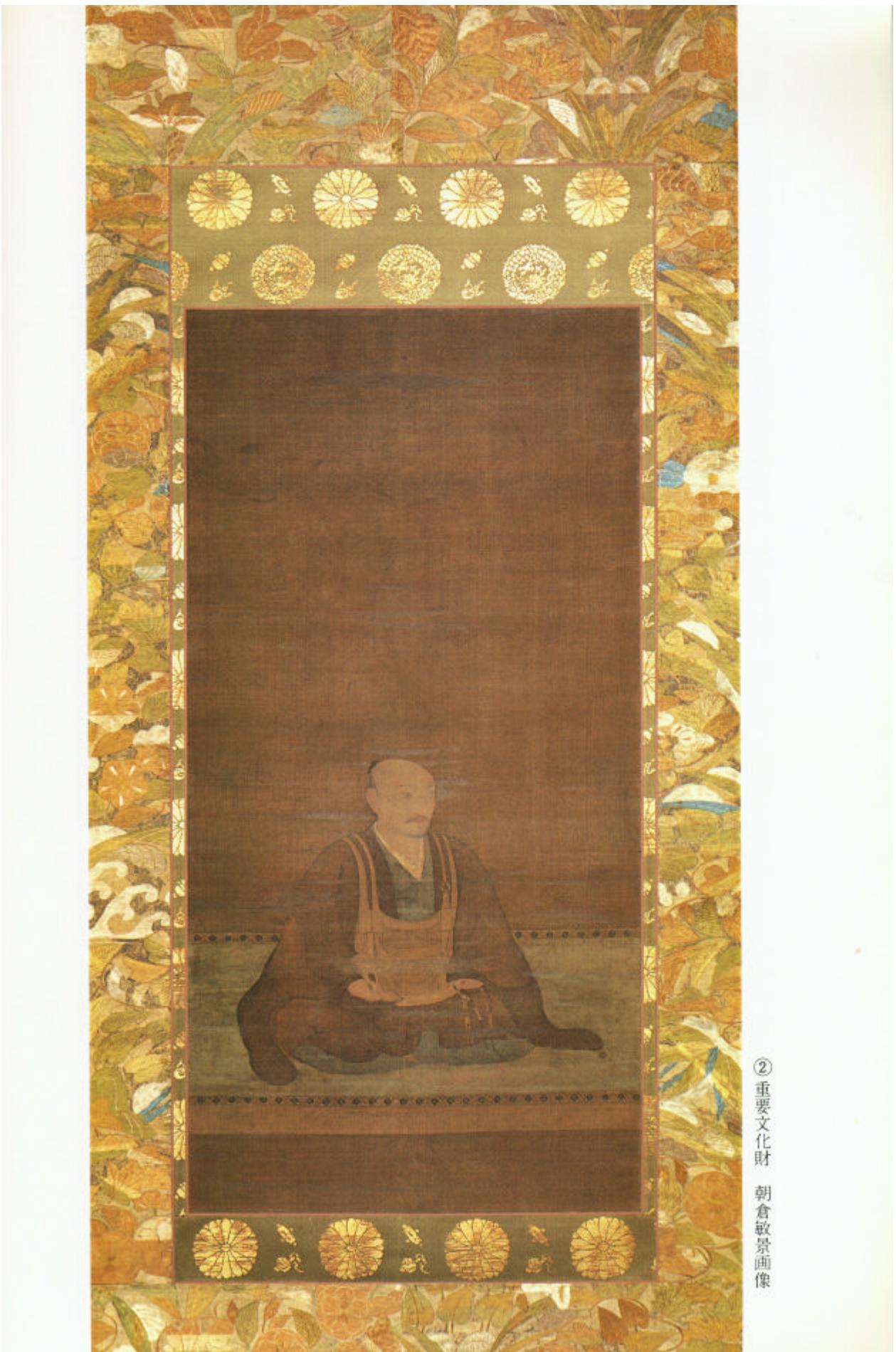
所蔵者名は、寄贈品の場合は「○○市 ○○○○氏寄贈」、寄託品の場合は「○○市 ○○○○氏寄託」として、その別を示した。また、当館の主力資料である「文庫について」は、「福井市春嶽公記念文庫蔵」「越葵文庫蔵」と表記した。

一、収載資料名に付した番号は、図版・解説に共通している。図版を鑑賞しながら、同一番号の解説を併読していただければ幸いである。

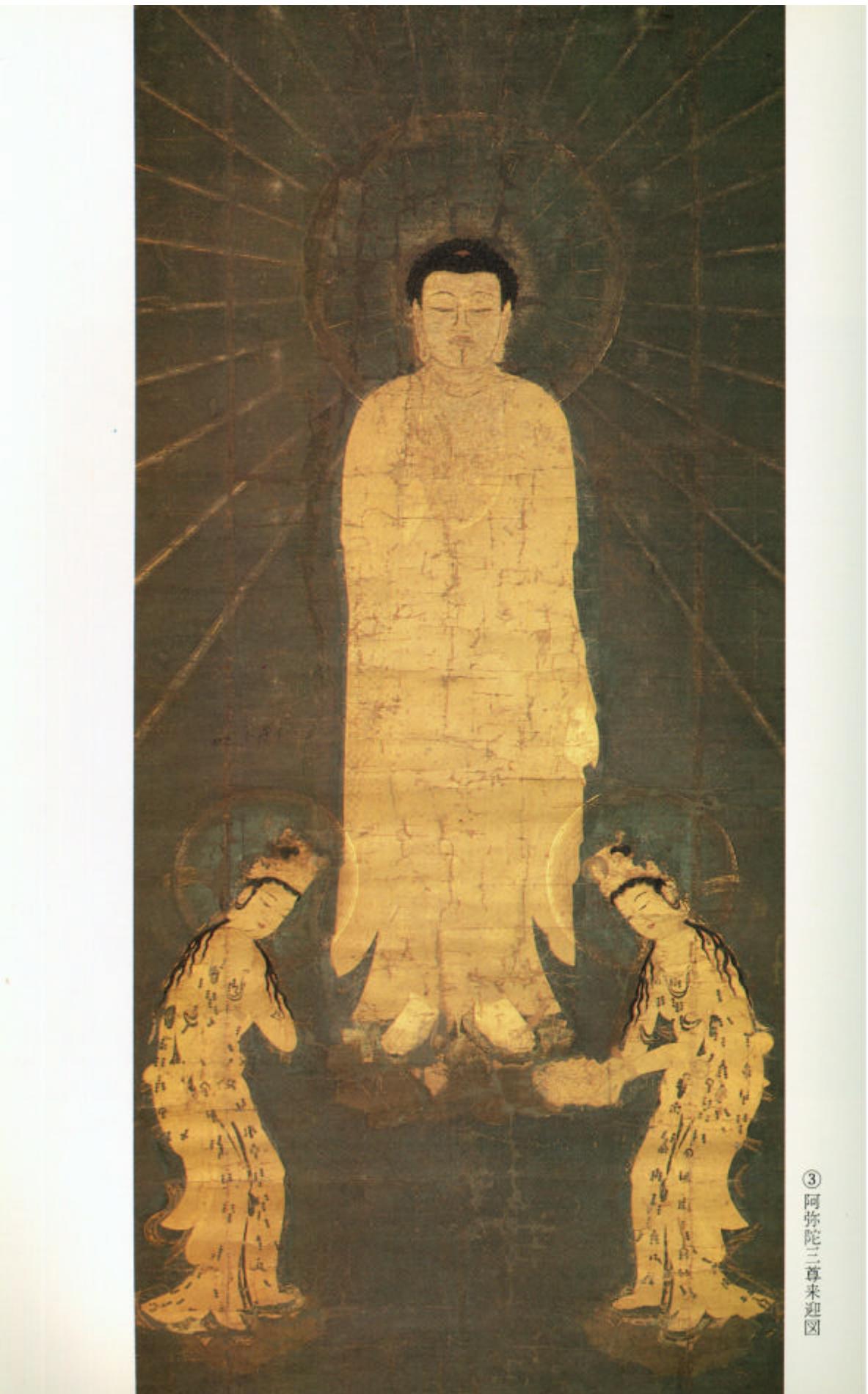
（表紙の題字は、山田誠一氏筆。また表・裏表紙のカラー図版は、越葵文庫蔵「明珍吉久作 鉄製龍の置物」である。）



① 重要文化財  
阿弥陀二十五菩薩來迎図



② 重要文化財 朝倉敏景画像



③ 阿弥陀三尊來迎圖



④ 文殊菩薩・普賢菩薩図像

⑥皆川淇園筆 孔雀の図



蘭花卓遠路不除  
朝清跡去駐雲車  
顧晴畫啟全煙草  
孔雀春雨玉洞花

右清君錦退休詩良光佑其  
名作圖金田書之  
丁酉夏五月  
平生成章



⑧ 谷文晁筆 青綠山水図



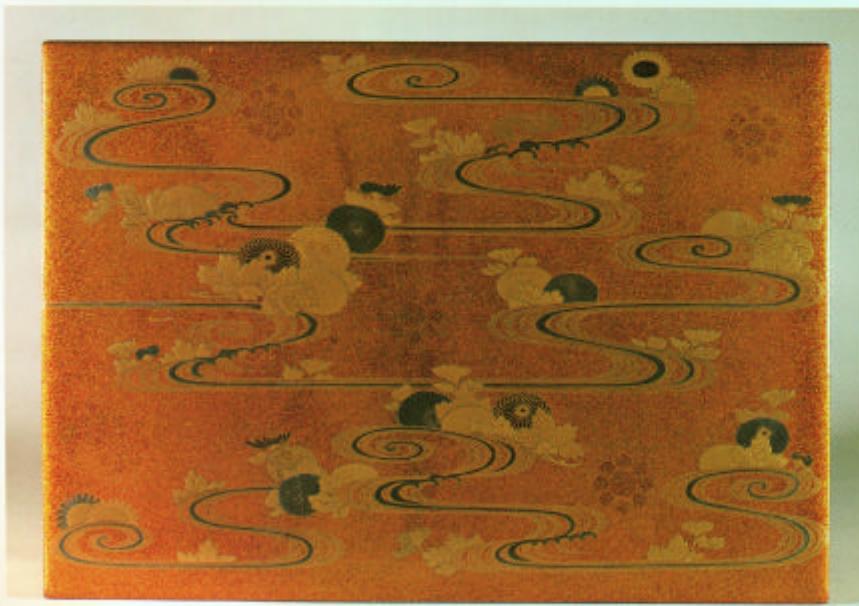
⑪ 有坂北馬筆 江戸浅草寺境内図屏風(部分)



②爆竹調馬の図(部分)



⑥7 梨子地菊水模様蒔絵「源氏物語」書箱



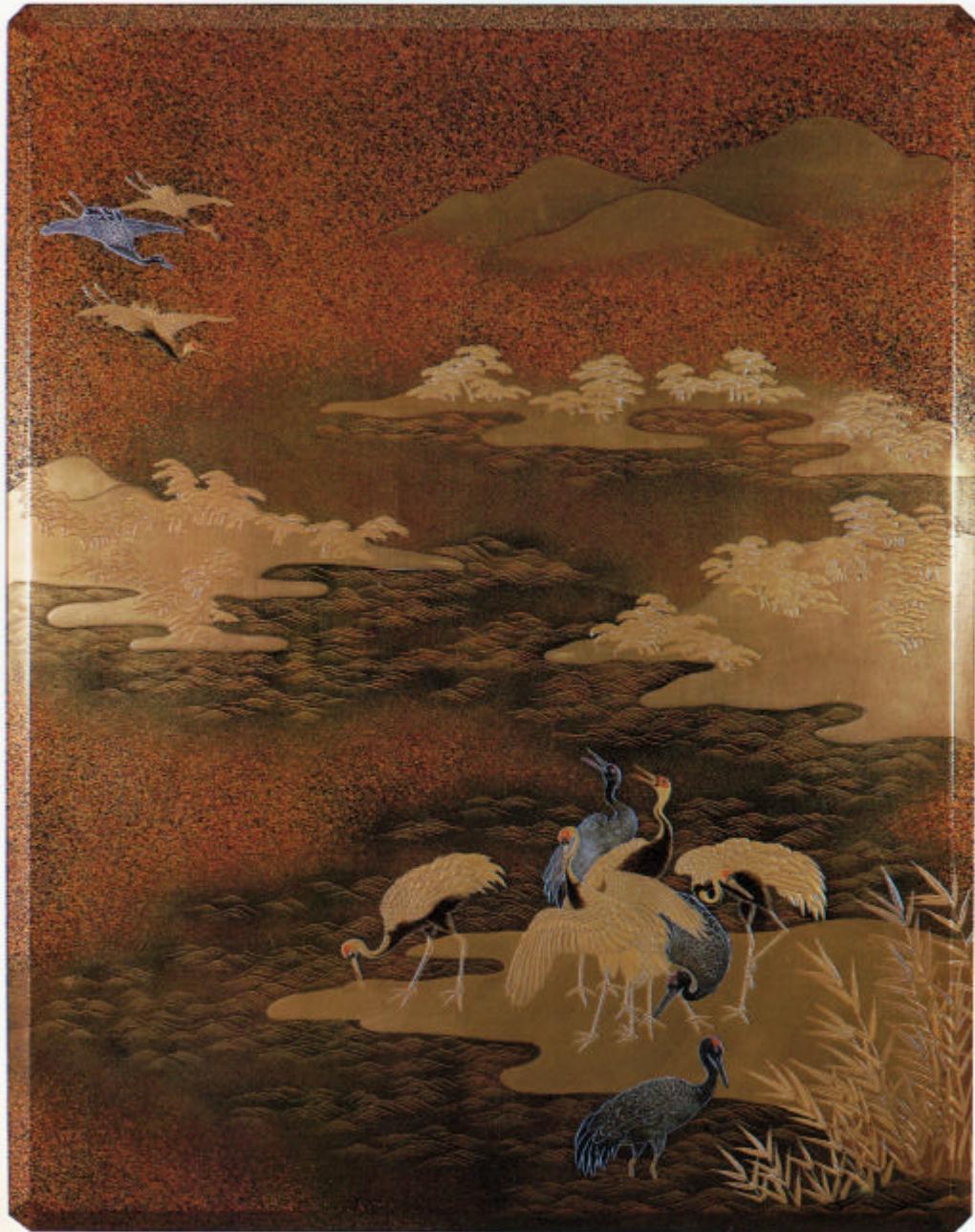
⑥7 梨子地菊水模様蒔絵「源氏物語」書箱(部分)



⑥0 梨子地和歌浦蒔繪硯箱



⑥0 梨子地和歌浦蒔繪文台



⑥0 梨子地和歌浦蒔繪料紙箱(部分)



77 鉄群青色平袖地花菱龟甲文飛鶴に松竹梅模様縫腰巻



⑧ 伝瀬戸二代藤次郎基通作 茶壺 銘「初花」



89 四老公肖像写真銅立



⑩ 鯉鱗包鞘大小摺

蛇皮包・石地塗青貝梵字入替鞘



⑩ 菊花蝴蝶文様蒔繪鞍



⑪ 菊花蝴蝶文様蒔繪鐙

② 重要文化財 朝倉義景画像

心月住僧觀音案拙書

于普天元龍集

癸卯秋念有日

集復得而欲圖僧

此乃乞下毛羅會

本末而目俗非傳

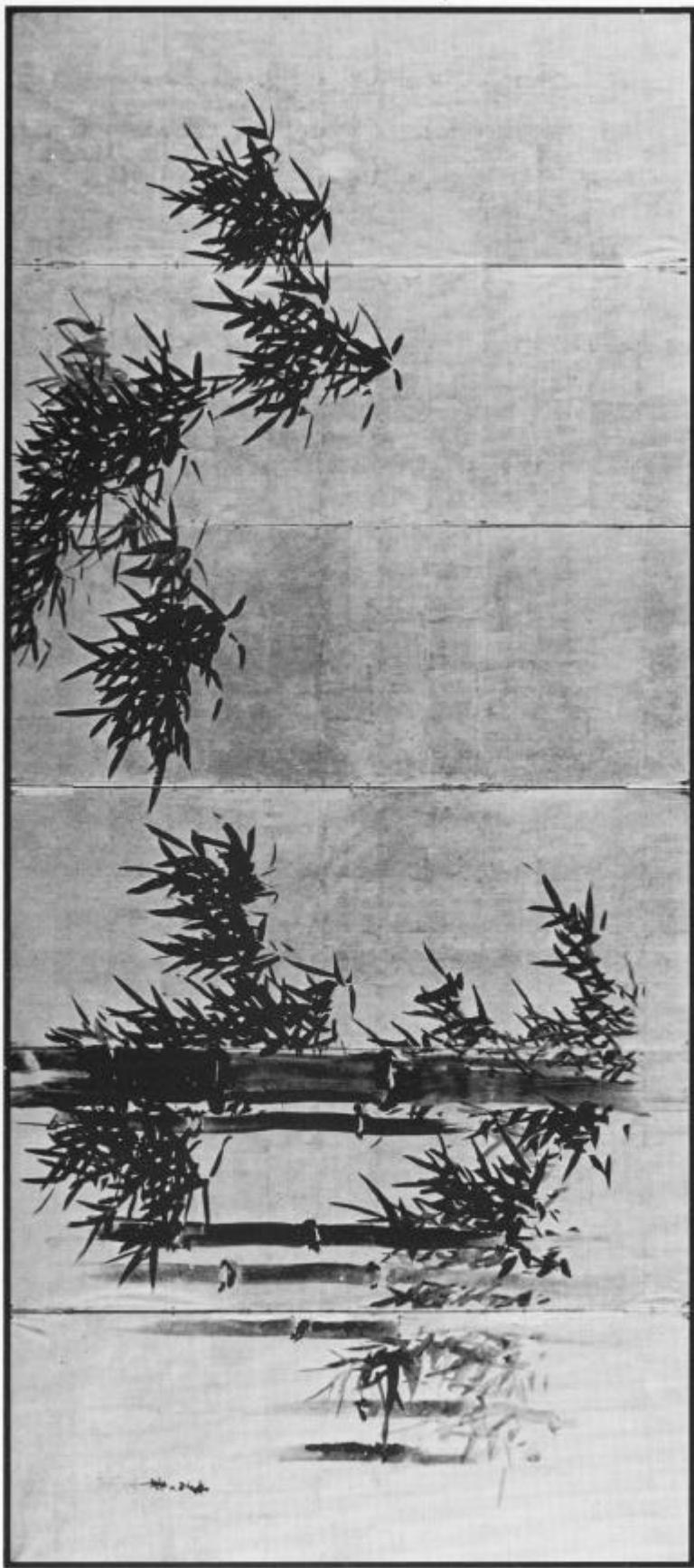
多變治号衣色像

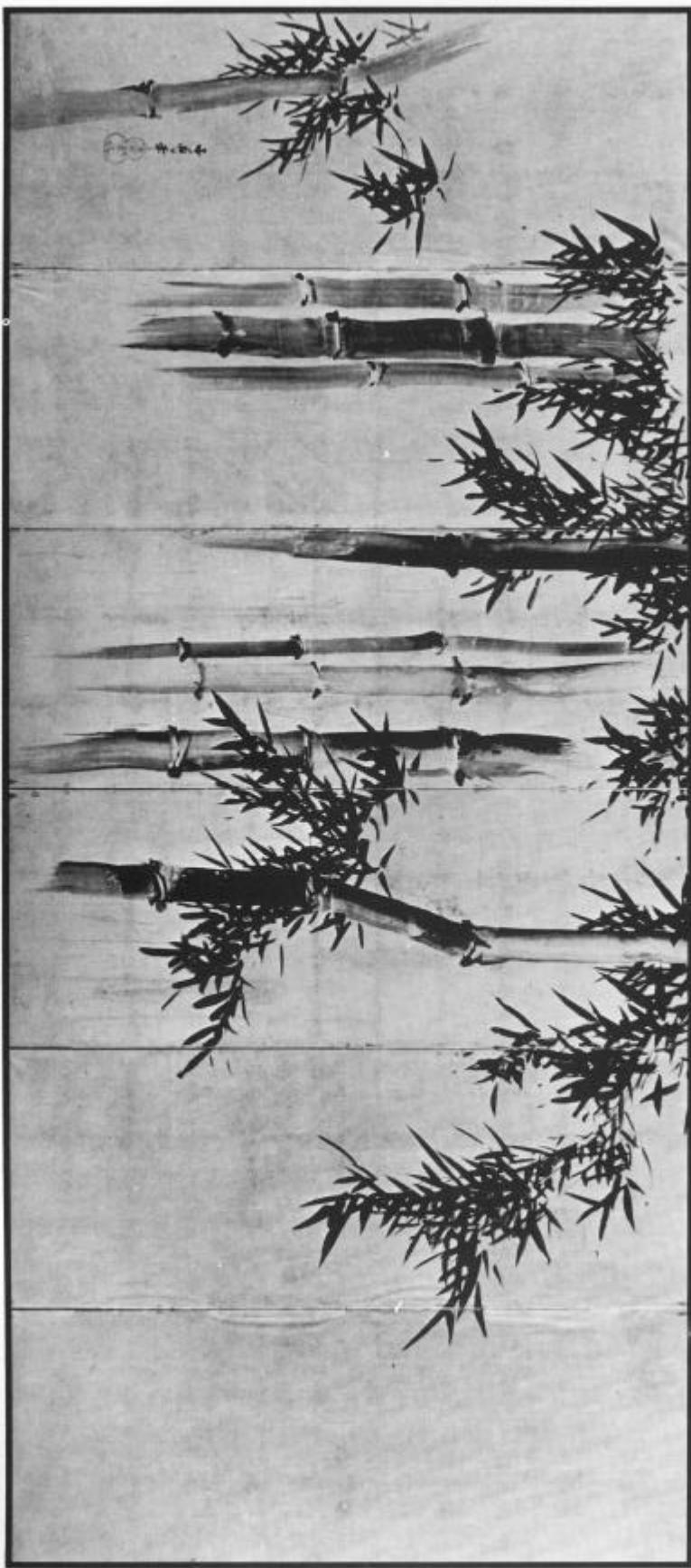
松雲院藏前尼金吾大珠宗光大師之肖像



⑤ 斋野探幽筆 寒江独釣図







⑦ 谷文晁筆  
叢竹の図屏風



⑨ 渡辺華山筆 墨竹の図

⑩ 有坂北馬筆 江戸浅草寺境内図屏風(部分)





⑩ 有坂北馬筆 江戸浅草寺境内図屏風(部分)



⑩ 有坂北馬筆 江戸浅草寺境内図屏風(部分)



⑩ 有坂北馬筆 江戸浅草寺境内図屏風(部分)



⑩ 有坂北馬筆 江戸浅草寺境内図屏風(部分)



⑪ 有坂北馬筆  
江戸浅草寺境内図屏風(部分)



⑩ 有坂北馬筆 江戸浅草寺境内図屏風（部分）



⑪ 有坂北馬筆 江戸浅草寺境内図屏風(部分)



⑪ 柴田是真筆 牧童の図



It is the picture, which Sir Kichi  
Ishidō Tenguda sent by picturing himself, at  
last spring of third year of Meiji.

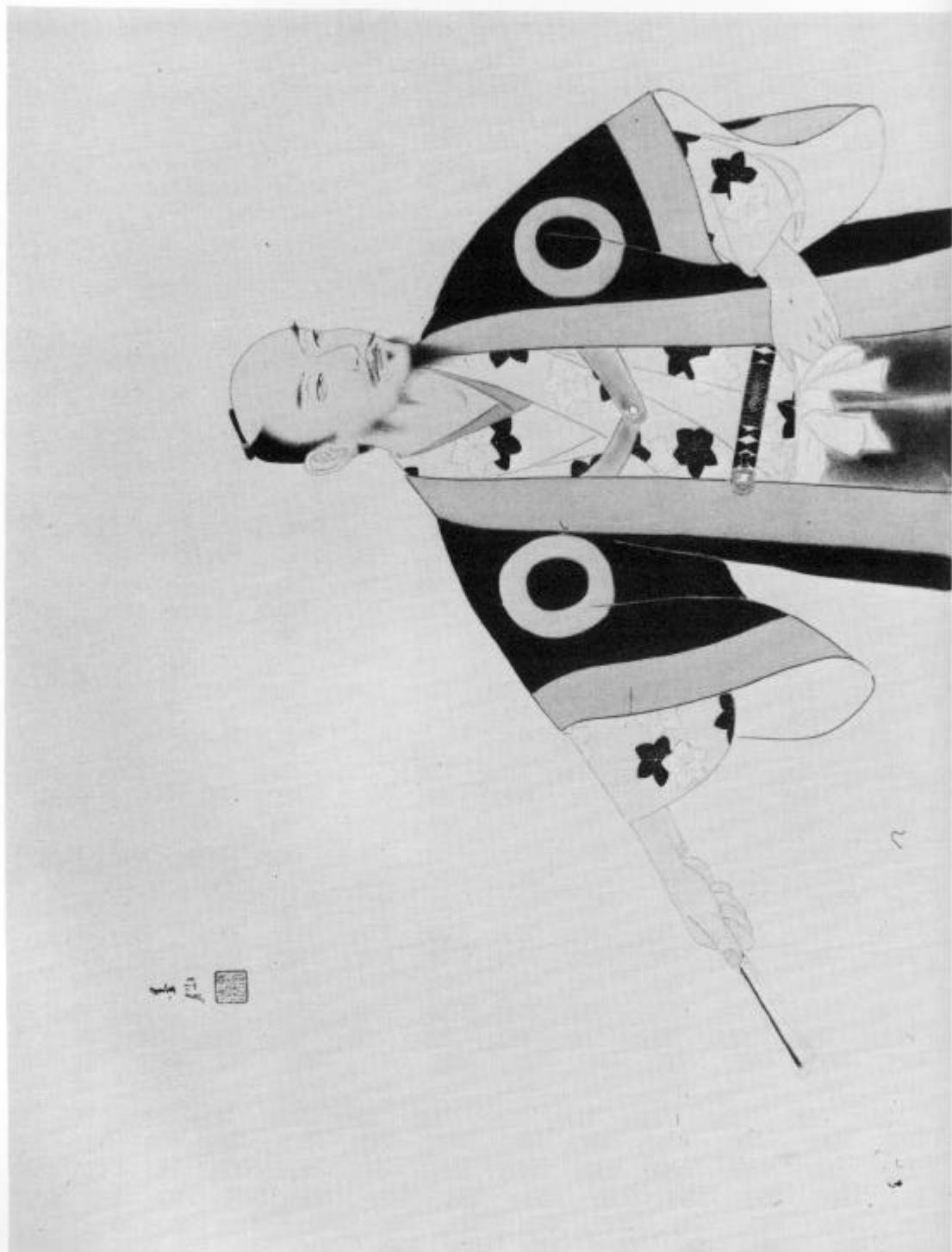
⑫ 德川慶喜筆 西洋風景画(油彩)



13 島田雪谷筆 桜花群禽図



⑯ 島田墨仙筆  
松樹下高士の図



⑯島田黒仙筆 加藤清正の図



⑯ 江川坦庵筆 岩竹の図

17 小室翠雲筆 花鳥画下絵





⑯ 馬来田愛岳筆 秋山の図

19 馬来田愛岳筆 月に芙蓉の図

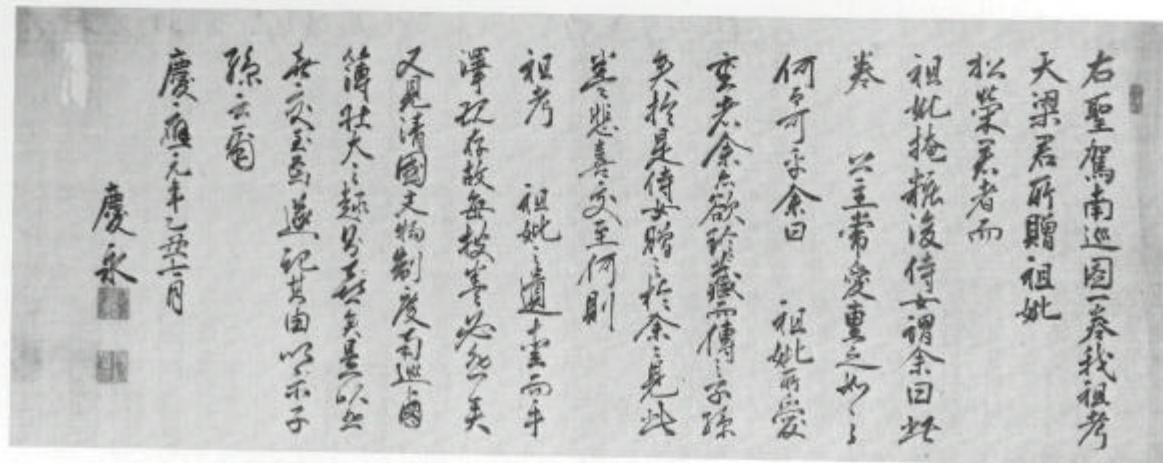
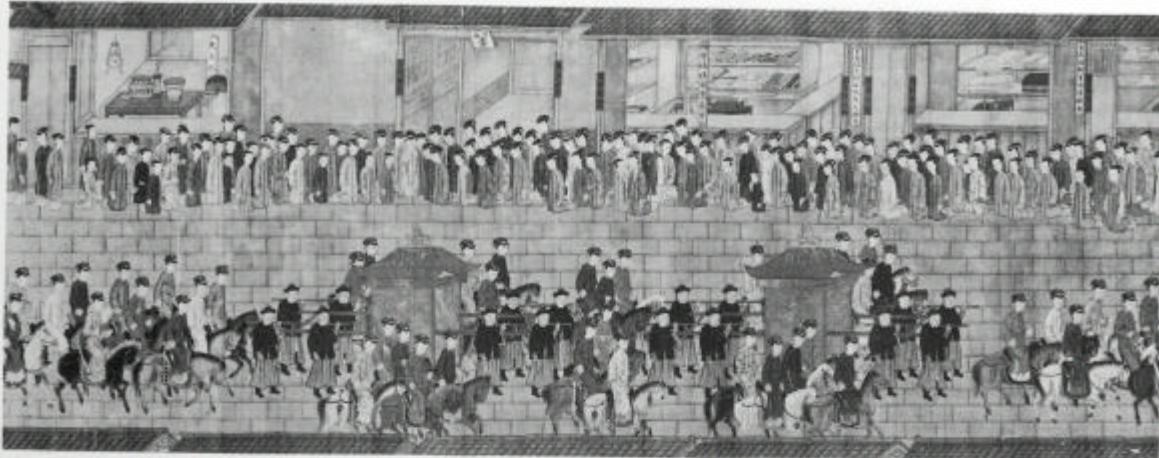




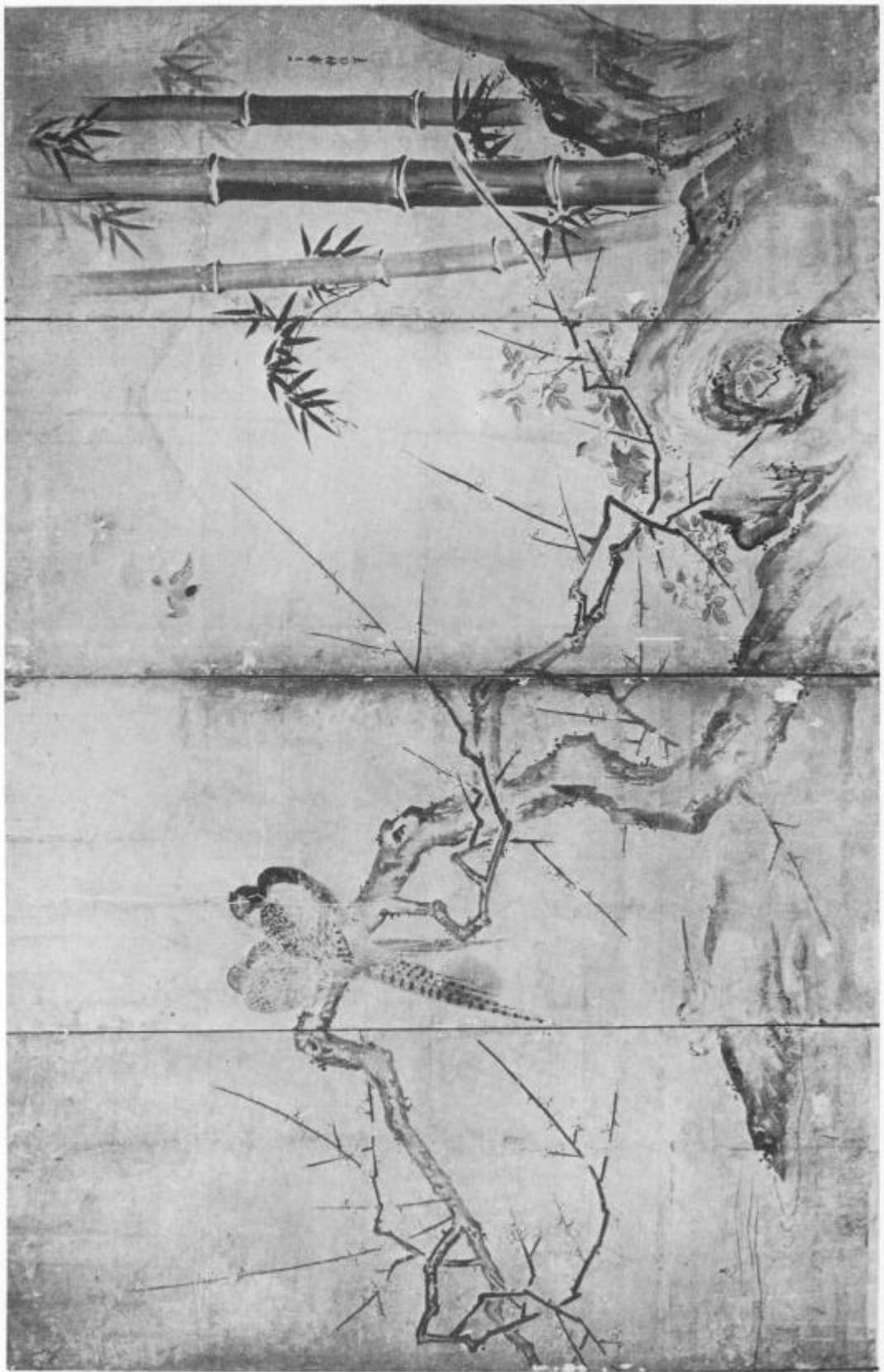
㉙ 道子 墨筆 柳に野馬の図

21 仇英筆 濑布眺望の図

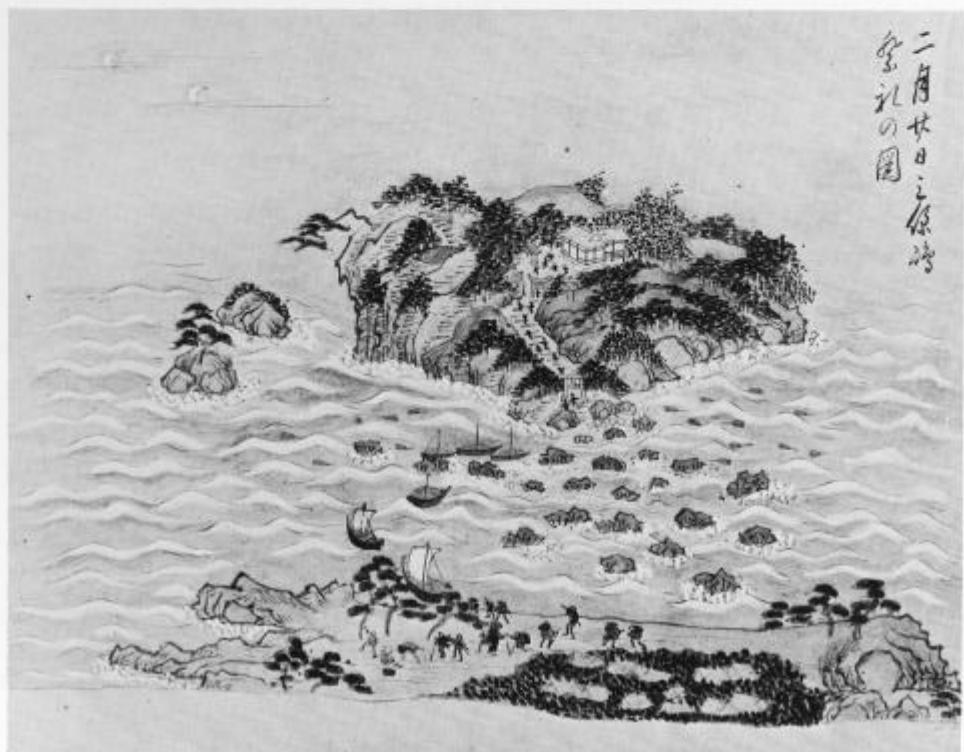




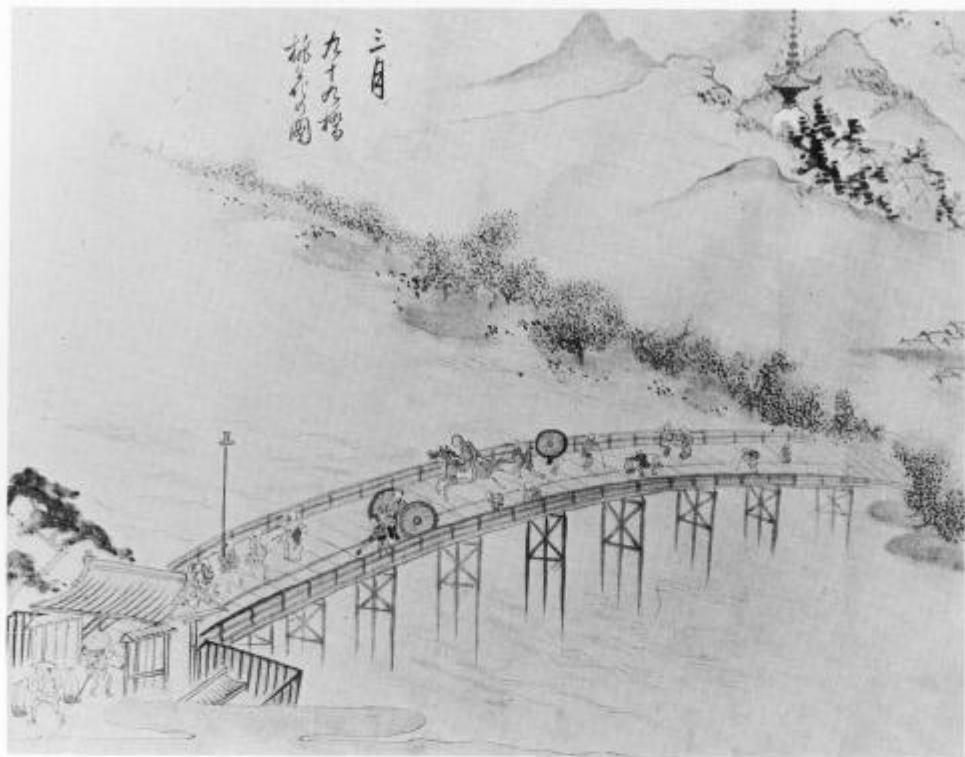
② 聖駕南巡圖 付松平春嶽跋文



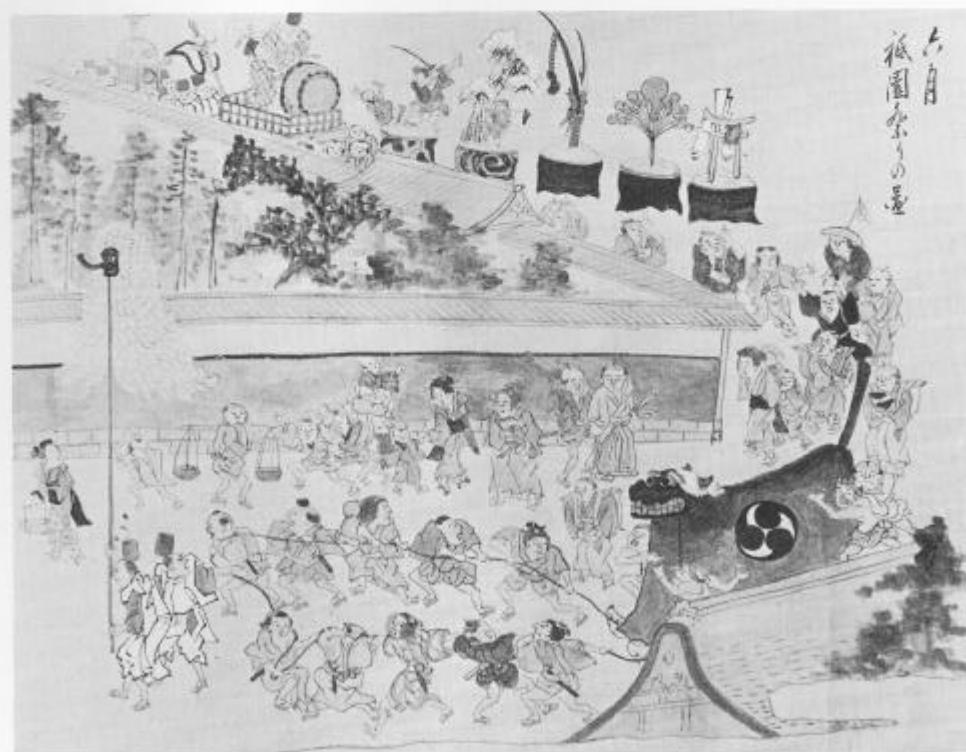
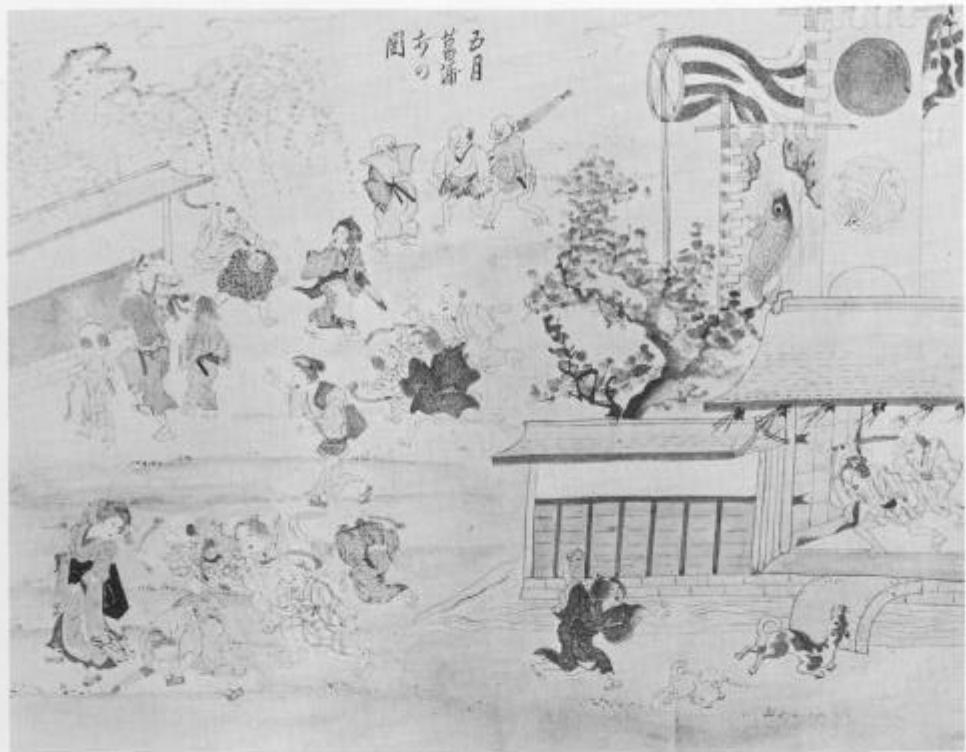
24 犬野了章筆 樹下群禽圖屏風(部分)



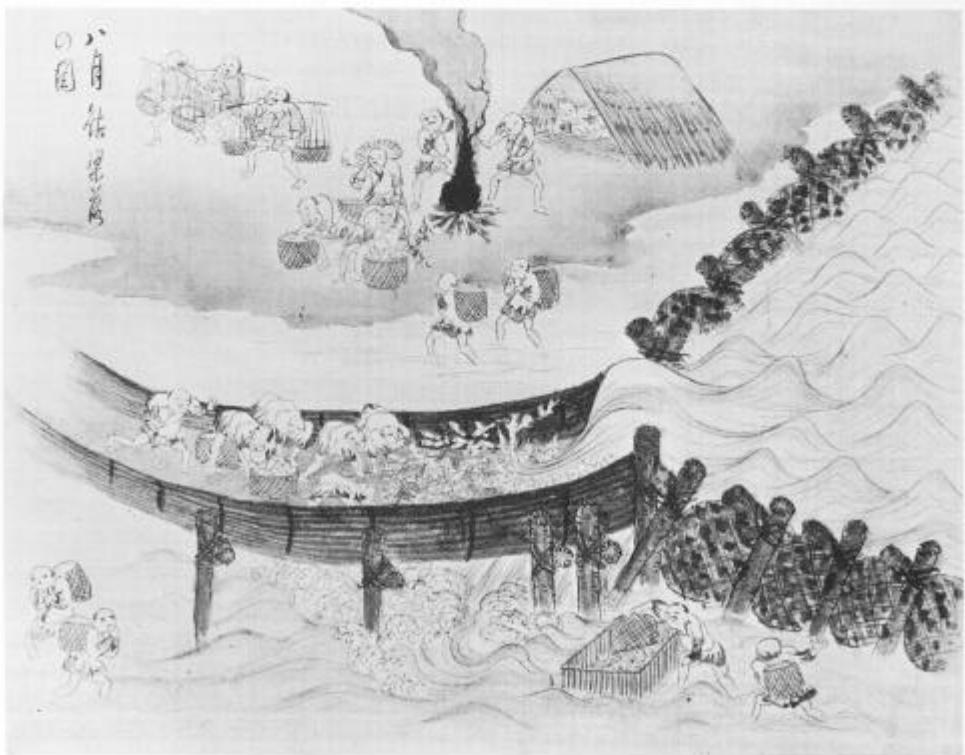
②5 福井藩十二ヶ月中行事絵巻



㉕福井藩十二ヶ月年中行事絵巻



㉕福井藩十二ヶ年行事絵巻



㉕ 福井藩十二ヶ月年中行事絵巻



②5 福井藩十二ヶ月年中行事絵巻



㉕ 福井藩十二ヶ月年中行事絵巻

## 橋本左内小傳

家臣橋本左内名綱記字伯綱號蓼園後取鈴屋翁風意自稱櫻花晴輝樣天保五年甲午三月十一日生於福井治下常磐街父名長綱稱舟也以醫為業母箕浦大行李寺僧某之女也綱記為人警敏非童少年從藩儒吉田仲載講習經史及長短流有大志器識過絕人而溫粹謙和未嘗與人相爭年甫十六慨然曰身蒙僻鄉未免缺憾之見不如就大都君家而朝食智識也嘉永二年己酉秋夏復游濟寧從緒方某學西洋醫術四年卒而聞父疾歸五年壬子十月父沒十一月綱記襲業列醫賓慶政元年甲寅二月至江戶入杉田成卿之門成卿皆洋書一部督讀裡記日夜研究致不怠僅以一月卒業成卿驚其才故試舉其書以問之辨論如流無有一譏誤乃嘆曰誠難我業者必此人癸二年乙卯七月歸國是冬再至江戶留學落第三年丙辰春歸國會詠新興文武學業時以綱記充幹事並譽先是橋井學派率傳崎門人皆設座理無益於世道個記臺之好論善導務刻除其弊學風大變四年七月召綱記於江戶命傳讀萬卷輜務焉自嘉永中亞國使節渡來要通信天下多事物情駭然而將軍家定公與嗣於是各藩有志之徒相與相議以一稿黃門有英才而中外屬望也欲立以為備兼以爲分國保約及金川商港等事宜令眾共謀之無算諸偶專對之理當是之時綱記與薩土諾舊一時贊豪及幕吏土岐承井岩瀬諸子結交盡力周旋翼成其議而水戸景山土佐容堂及余皆主張其說得大半并保詳部欲辦群議以立紀伊鄉五年戊午正月綱記入東師直參慶司近衛二公及播神家士有志之徒相議結條約開貿易二件皆里薩刺命以行之七月將軍家定公奏紀伊鄉入維職尾水土三候及余皆蒙嚴謹居各邸十月二日夜幕吏數名來搜細絕之宅收文稿及簡牘等至其翌綱記被召至市尹石谷因懼服命禁錮舊部甚泣訖同六年十月二日下獄七日處斬時年二十六後為道遠號於鄉里妻某所立綱記之在獄中賦詩曰苦寒難洗懷愁禁築則痛悲仰則吟吟夜城中霜始復誰知松柏後凋心又回二十年如夢返窮愁年昔感淚多天祥大奇嘗以折土室猶叫正氣歌蓋知其終不可免也綱記有兄某九人一姊某適續江藩木内氏二哥綱維繼常營醫不墮家聲餘皆夭折著蓼園遺草及詩稿存墓扶臺而立素盞於言表至使讀者想見其氣節矣頃日綱維使往木内長淳招綱記宵僵臥未余且請作小傳余哀觀之亟心微妙咄咄真矣嗚呼綱記多辛酸嘗因事謫官所以報之而時勢之不可逆止惟幸可勝痛惜矣今對此圖追憶往事不覺涕然涕下也墨書所記作之傳以對細維矣

明治八年五月二十一日

正二位源慶承撰并書





29 佐々木長淳筆 橋本景岳肖像画

横井小楠先生平四郎特存肖像

明治廿二年二月廿三日  
先生嫡男伊助時雄所  
刻七年



源慶永識

㉗ 横井小楠銅版肖像画



㉙ 越智通兄筆 橘曙覽肖像画

秋雨夜  
衣襟冷  
思加漏  
此竹對吾言

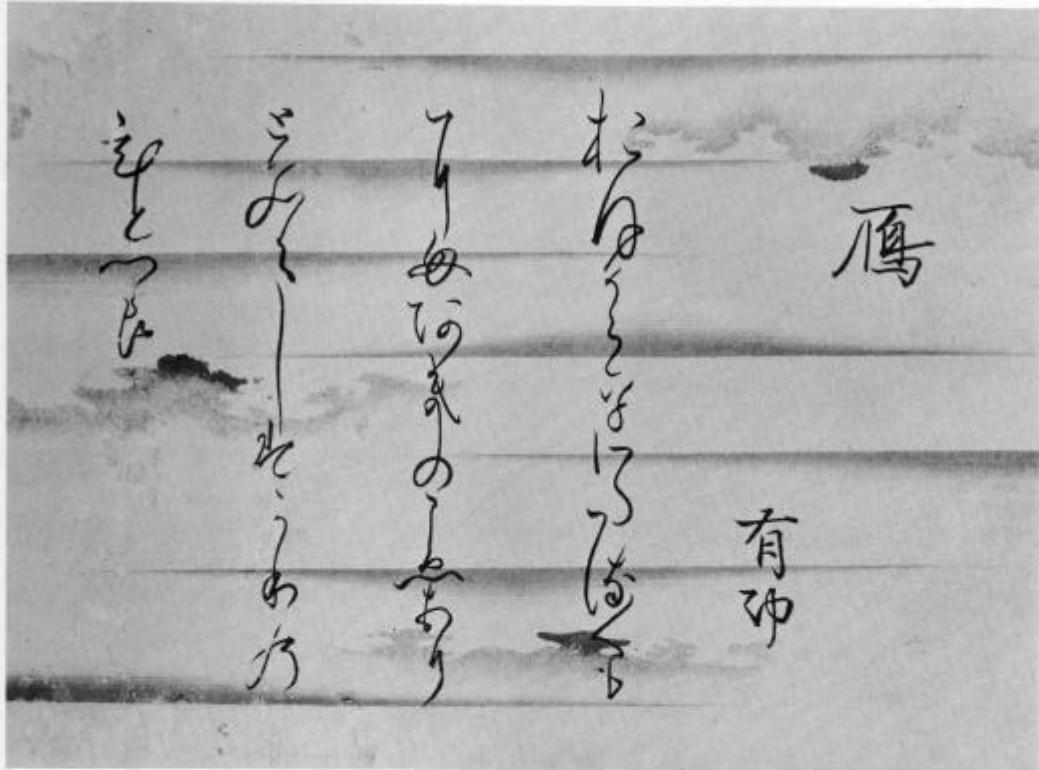
雲處



29 藤田雲處筆  
叢竹の図



◎ 有栖川宮熾仁親王筆  
「至誠如神」の書

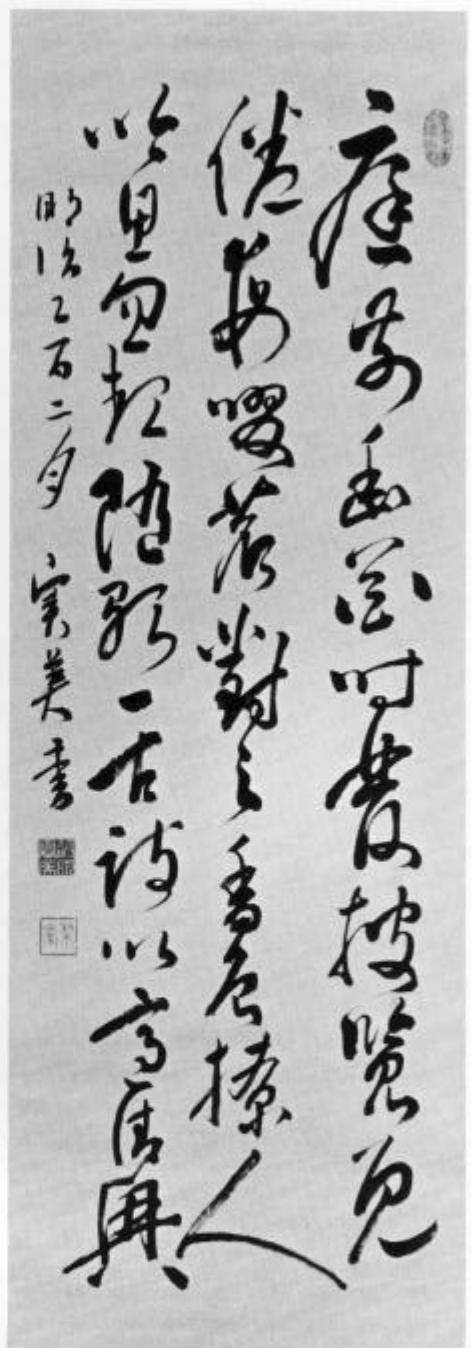


⑫ 千種有功筆 「おほそらをわたるくも云々」 の和歌



⑬ 徳川綱吉筆 「誠敬」 の書

㉑二條寅美筆 「庭前幽花時發披覽云々」の詩



㉒徳川慶喜筆 「鬼神泣壯烈」の書





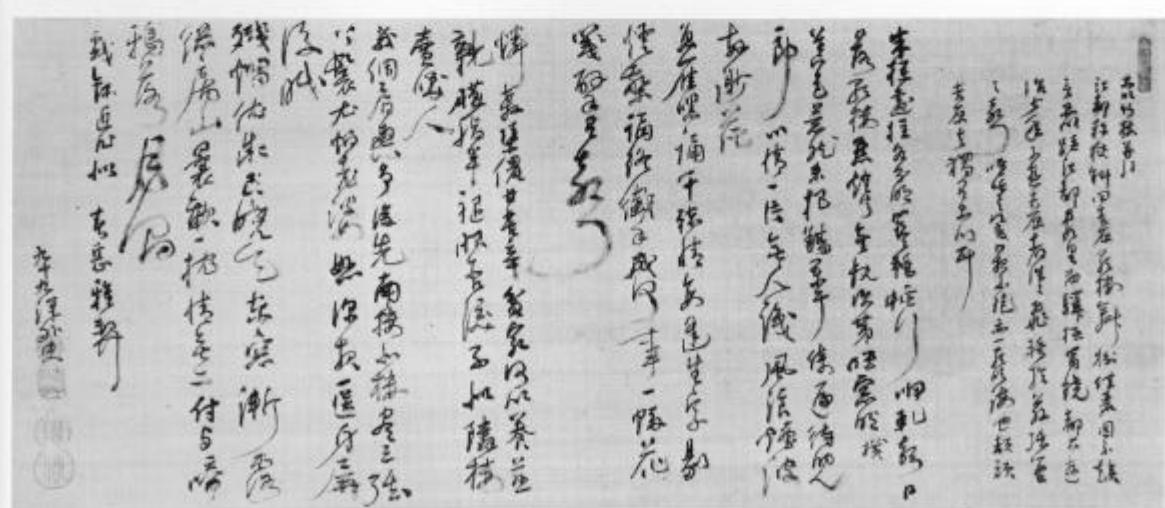
⑮ 松平春嶽筆 「敏徳」の書

③6 松平春嶽筆 「我無才略我無奇云々」の詩

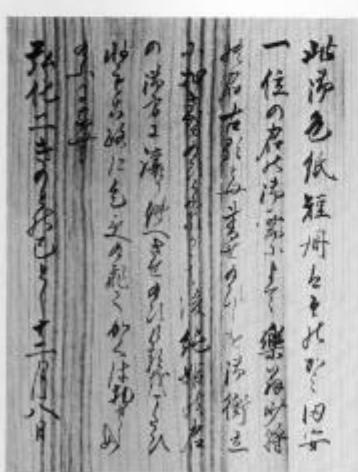
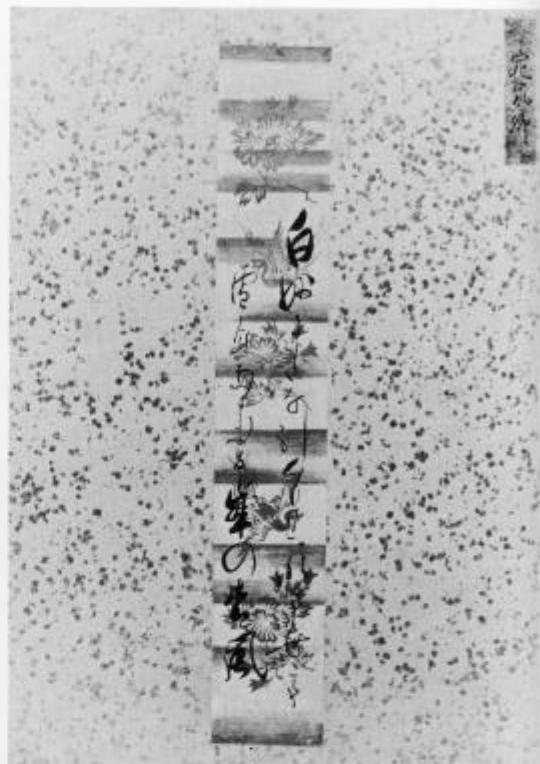
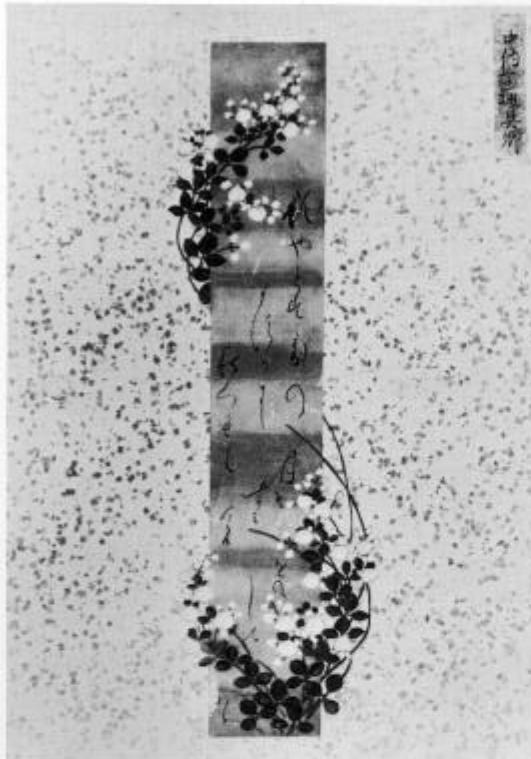
我無才略我無奇  
常能聚之  
以所用之  
渾此道  
雷時雨  
原野  
猶期  
不偶作  
春嶽



③7 松平春振筆 御手形並びに和歌贊の幅



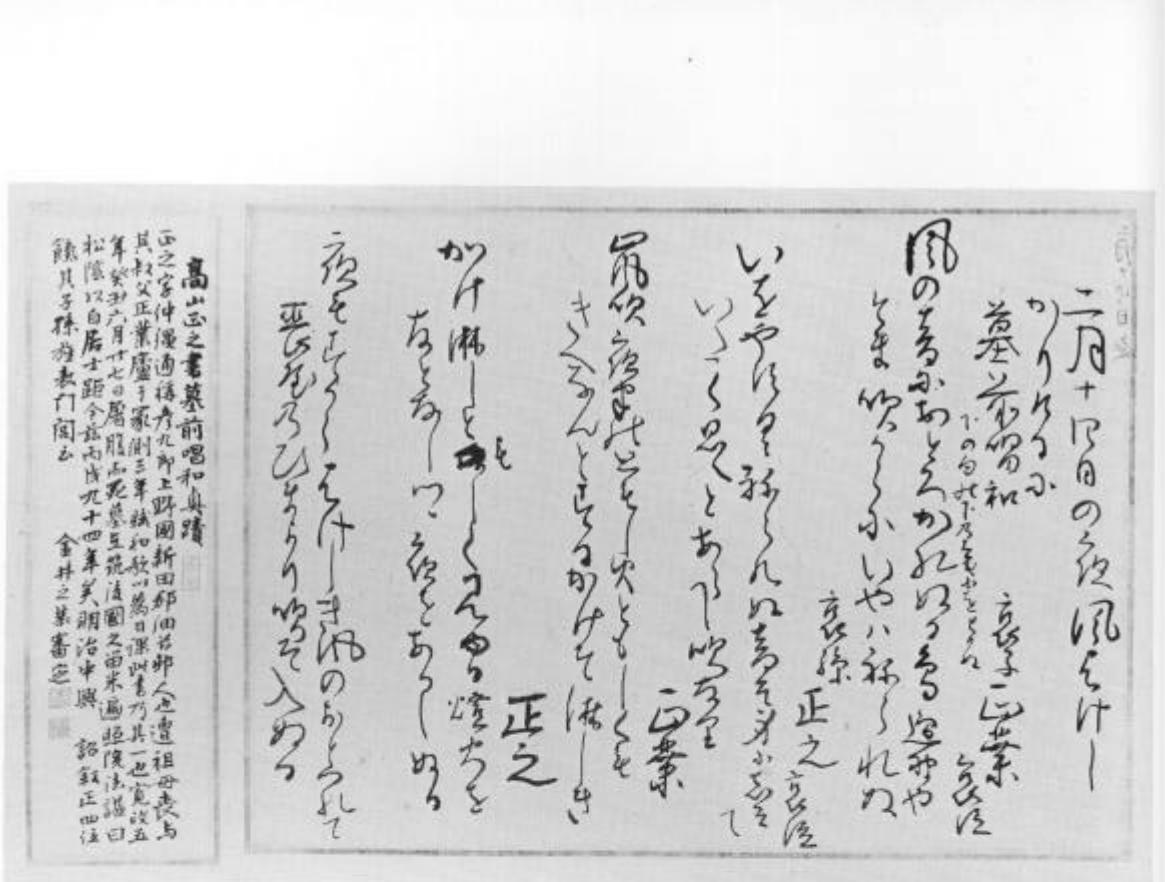
④0 山内容堂筆 「品川竹枝并引」の詩



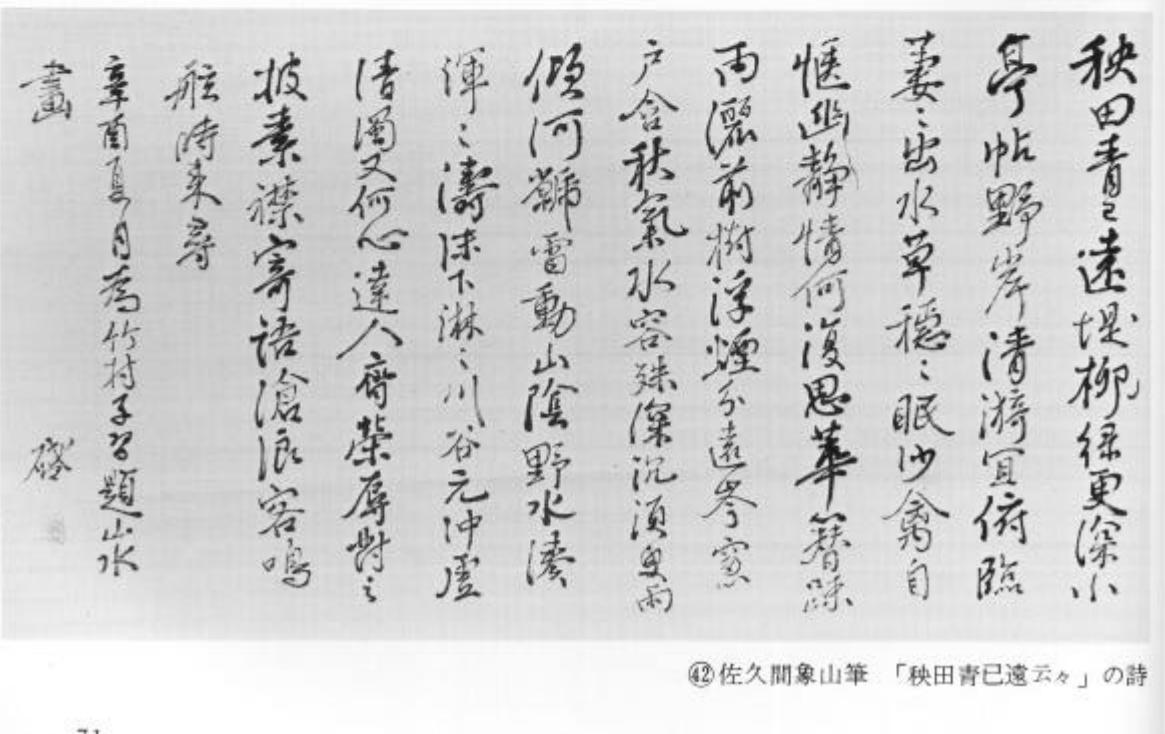
㉙ 松平定信筆 「古歌手鏡」

有耻而生不如無耻而死

◎徳川齊昭筆 「有耻而生不如無耻而死」の書



④1 高山正之筆 「風の音に云々」ほかの和歌



②2 佐久間象山筆 「秧田青已遠云々」の詩

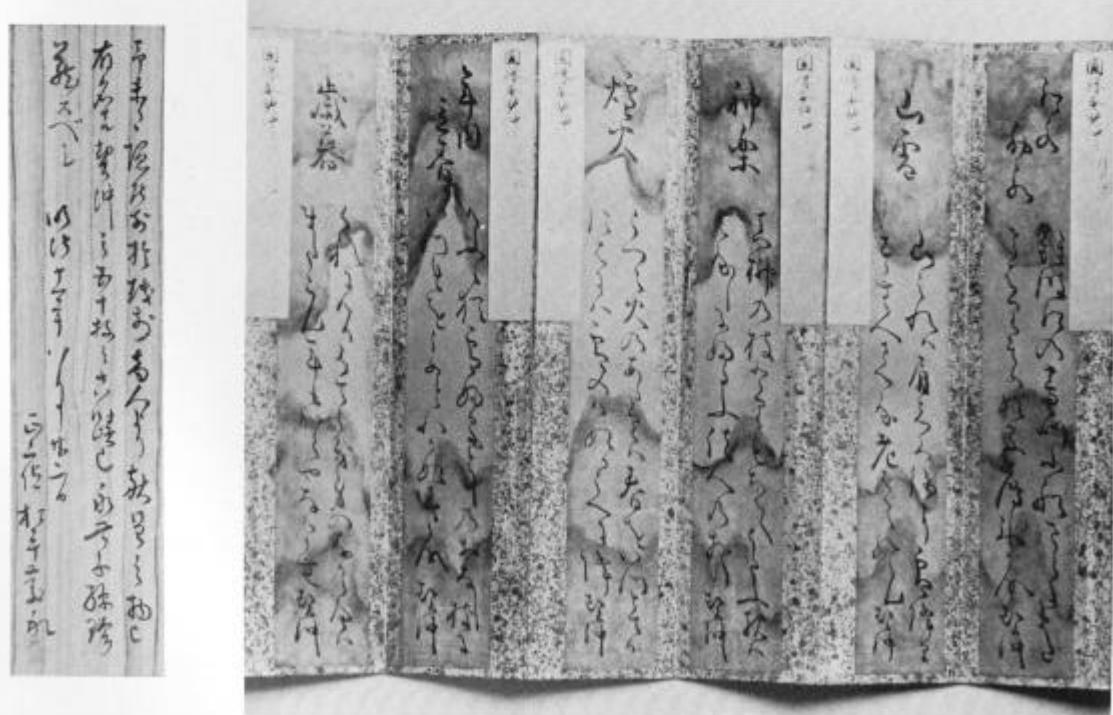
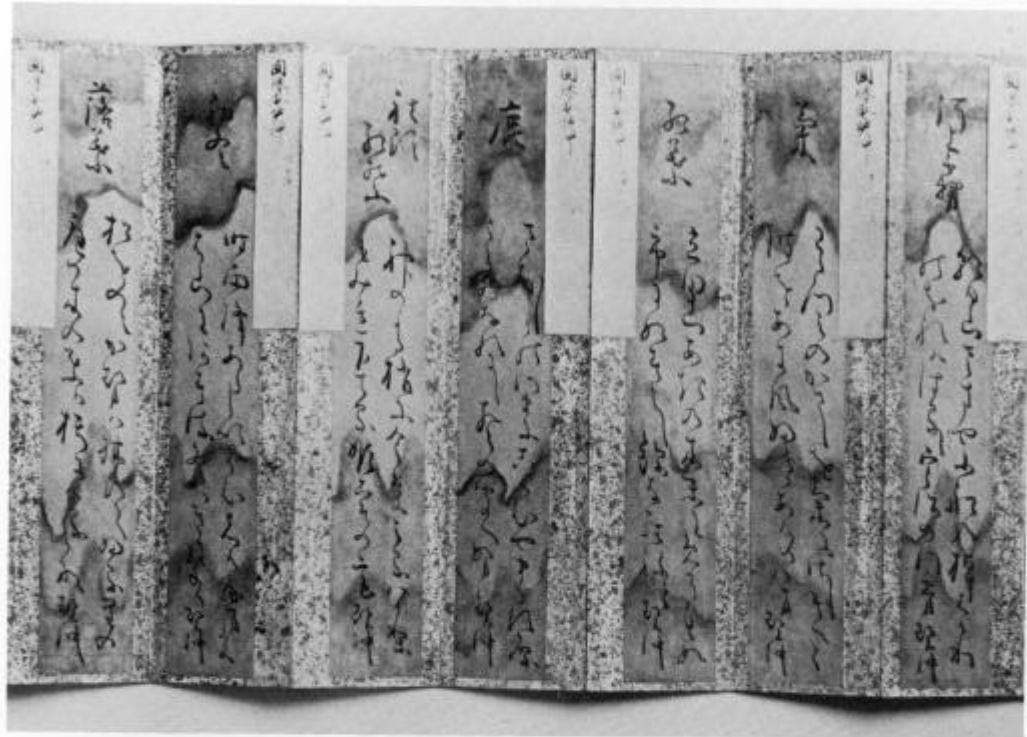
43 梅田雲浜筆 「野人載酒來云々」の詩

野人載酒來  
雲々  
歌は  
山の  
林の  
木は  
酒は

44 横井小楠筆 「試看天地間事云々」の書

試看天地間事云々<sup>トシミテテイジカンジトシ</sup>  
萬物を一空に置か  
易い事も常ぢ様正坐ヨウザツ田波有  
當念無言也 植多操書

④ 契冲筆 和歌短冊折本



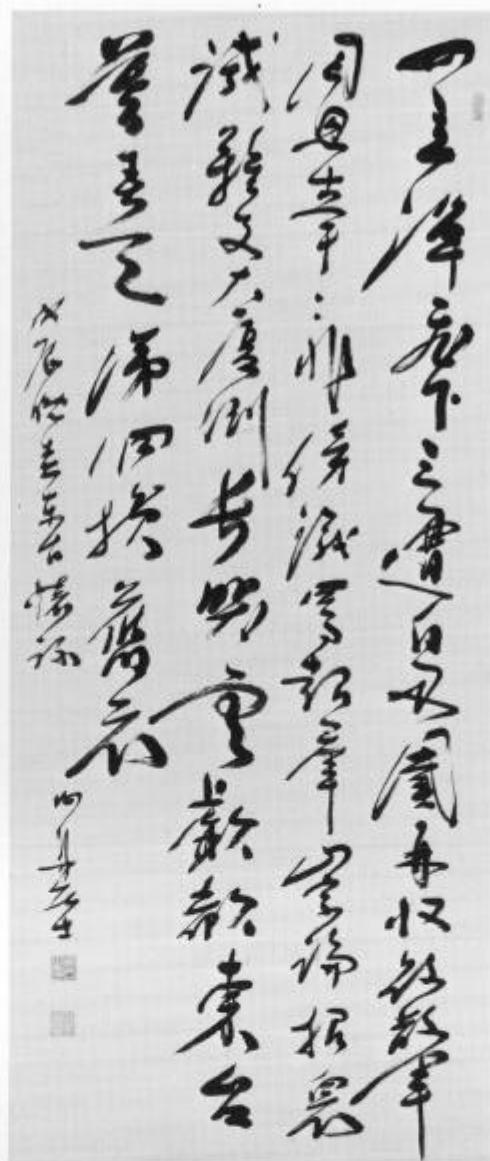
④ 橋本景岳筆 「雪中松柏愈青々云々」の詩

雪中松柏愈青々枝植綱常在此行天人久矣  
躰勝潔人间何獨伯夷清義高便覲見生撫撫  
礼主方知允直枉南八男兒終不辱皇天之上

帝恩永明

戊午之冬 緑稿草紀

蓋狀有六道程設心一  
處無以復骨髓盡通徹天  
地死生之在余懷但存  
無手以動予第以苦在平  
斯復可以往平扶遠之  
氣也夫浩然之氣孟子既  
曰以直義又曰集善不生  
又曰配考而道真所以生  
反覆丁寧三面推敲既  
令人耳所謂一臚社律中  
庸之最危漏泄故自古  
不疾者皆此病也地而居  
胎中不看一箇盛太之物  
也法以故耳學達或  
放與其後雖當不獨



④7 権海舟筆  
「戊辰晚春東台懷詠」の詩



④ 橋本景岳筆 藤田東湖「回天詩史」の幅

◎ 賴山陽筆 「旗旗凋不舉云々」の詩

旗旗凋不舉、不垂り持沈謹  
汝京志蕭條、獨耽心齋廬、南  
小坼鐵馬雪霜深、仰山英旌  
根以詒、一喪禮

為元祐元祐舊集

秋寒

◎ 鈴木重胤筆 奉賀天統長歌の幅

すまむる日乃は子あらへ、お大君浦にまつておこさむたすは  
みくらげの煙の煙の煙の煙の煙の煙の煙の煙の煙の煙の  
みーとをいふもの太陽の太陽の太陽の太陽の太陽の太陽の太  
ひすりけふあをあ、もゆうの太陽の太陽の太陽の太陽の太  
とよ下すはるすはるすはるすはるすはるすはるすはるすは  
まき聞こえすはるすはるすはるすはるすはるすはるすはる  
りのうはるすはるすはるすはるすはるすはるすはるすはる  
の月乃おめし日乃おめし日乃おめし日乃おめし日乃  
すと大君乃おめし日乃おめし日乃おめし日乃おめし日乃  
すと大君乃おめし日乃おめし日乃おめし日乃おめし日乃  
すと大君乃おめし日乃おめし日乃おめし日乃おめし日乃

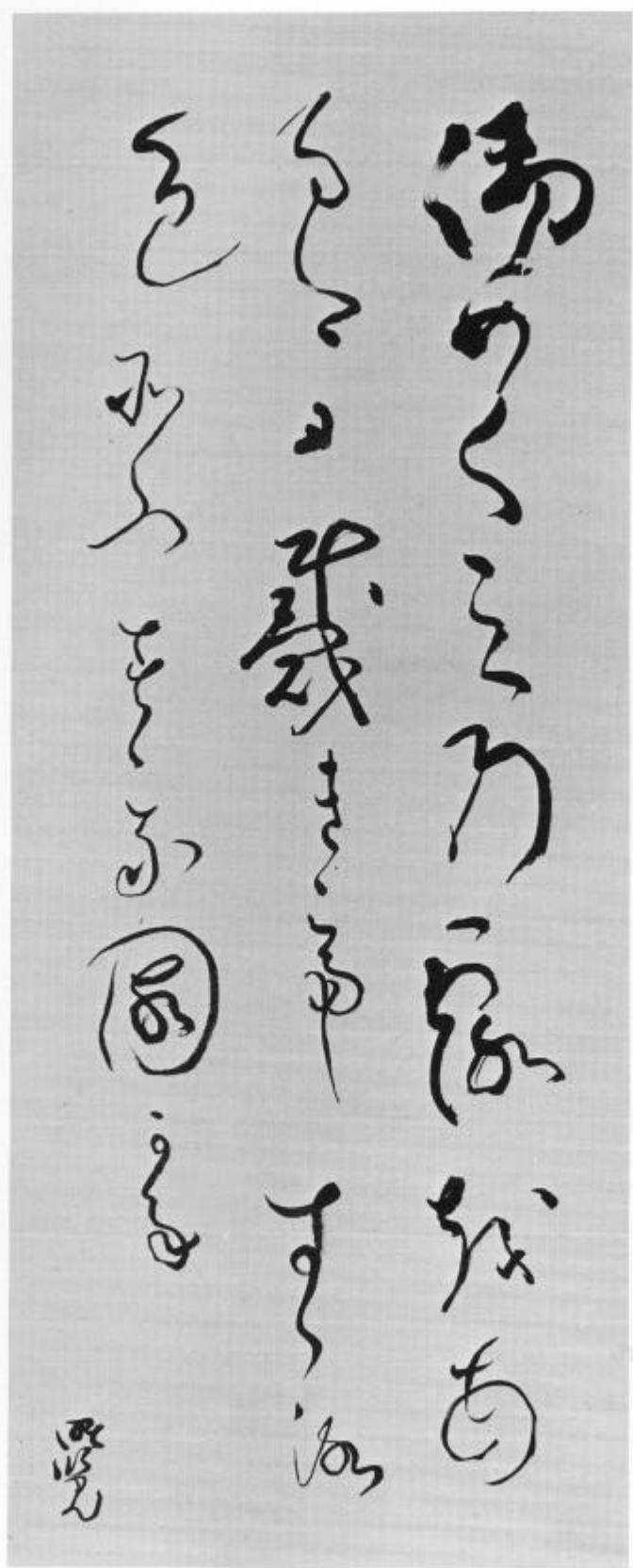
奉賀 天統長歌

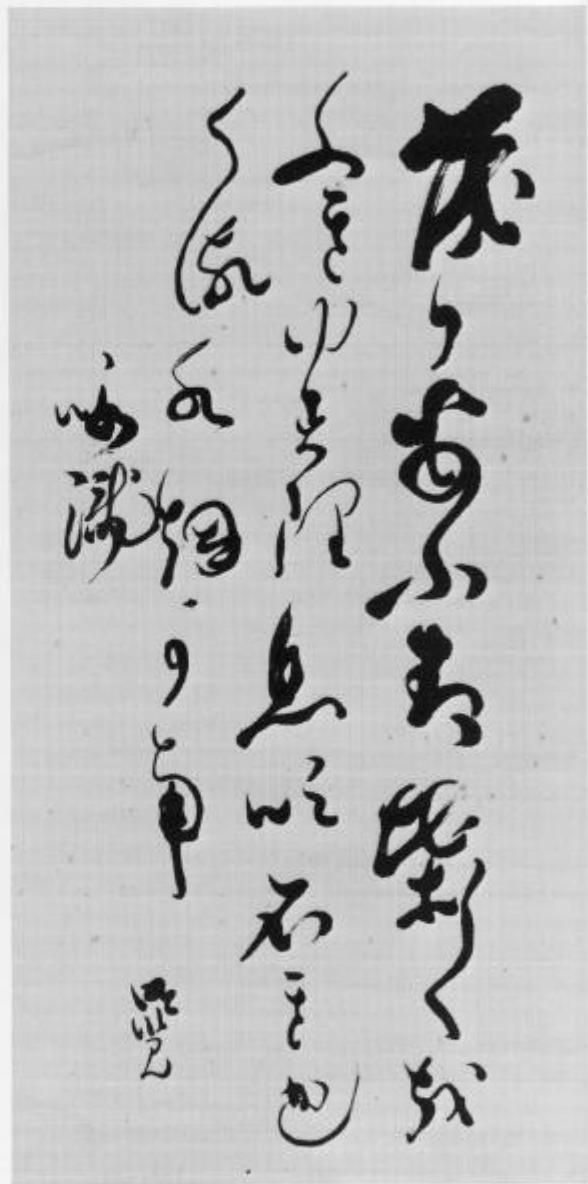
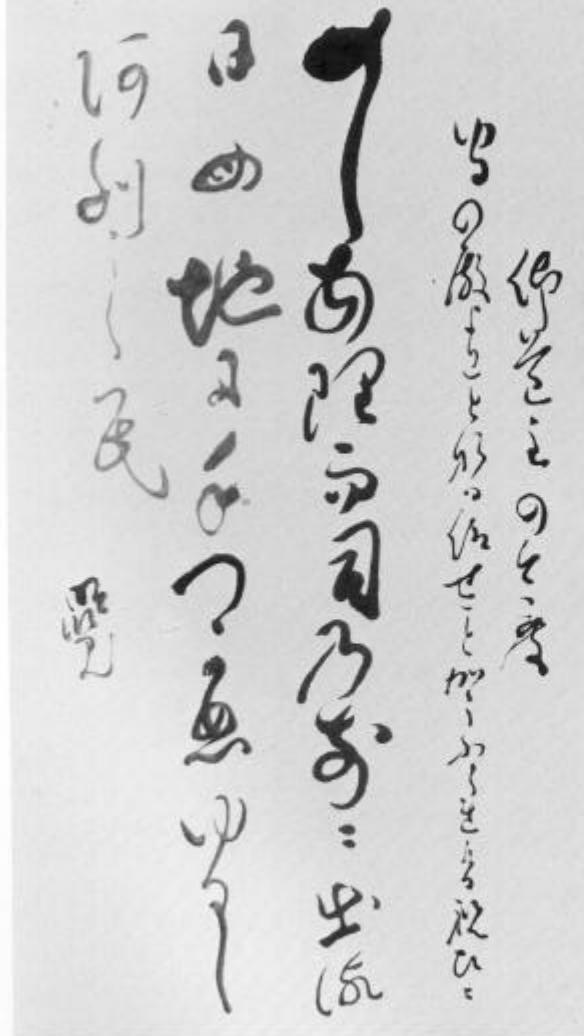
穂積重胤

送  
うらまくは今もまた  
ゆきのそへすま  
うかひやくは  
書日?

④賀茂真淵筆 古今歌集の文

52 橘 曙覽筆 「おめぐみの云々」の和歌幅





◎橘 曙覧筆 「咏 滅」ほかの和歌 三幅对

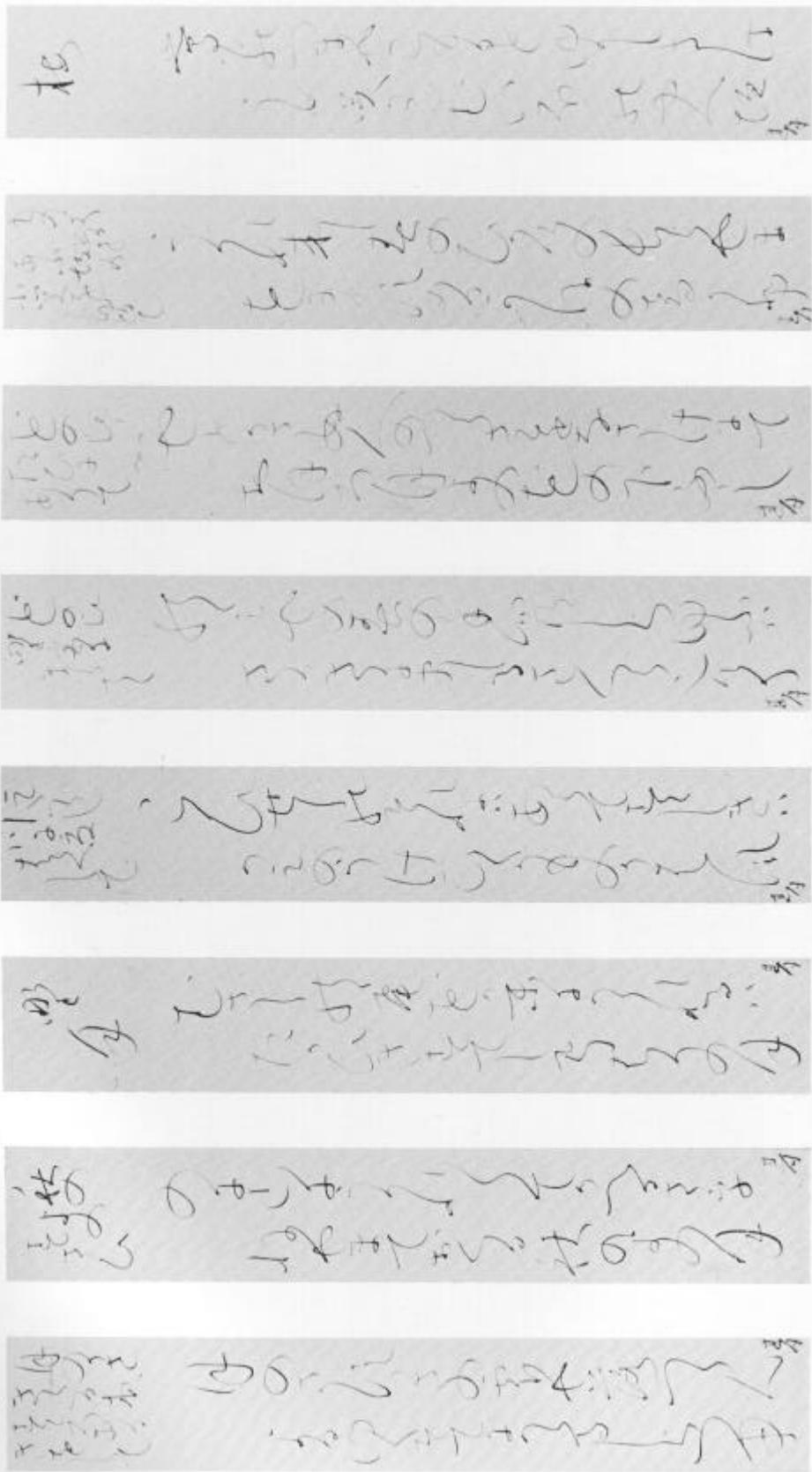
大藏居士詩集

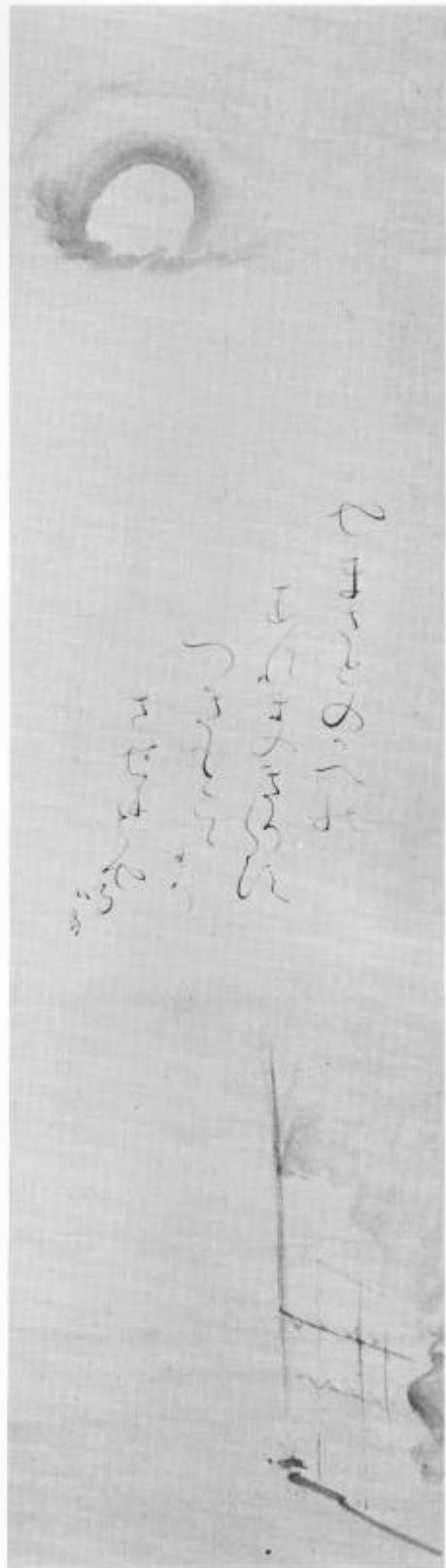
人あくまでも  
かくまゆの  
へどす

中根比呂  
奉ちる事  
トモ  
東洋社にて書かれて  
張や川  
家のものと  
思ひ得  
尚事

54 橋 曙覧筆 「とりのあとつくかたもなし云々」の和歌短冊

55 太田垣蓮月筆 和歌短冊の折本より





56 太田垣蓮月筆 和歌贊月にきりきりすの図

〔57〕松平春嶽所藏「和歌御手鑑」より

近來  
統世  
老軍士世の末子として  
義

阿部正弘

卷之三  
宋人書法  
宋人書法  
宋人書法  
宋人書法

美玉生  
生出  
之多才  
才多才  
任其一  
也無不  
能于其  
志寧都  
義

勝  
海舟

アラタニシトコトの如きをもとめ  
おのづかのうへ改めよ。アモガ

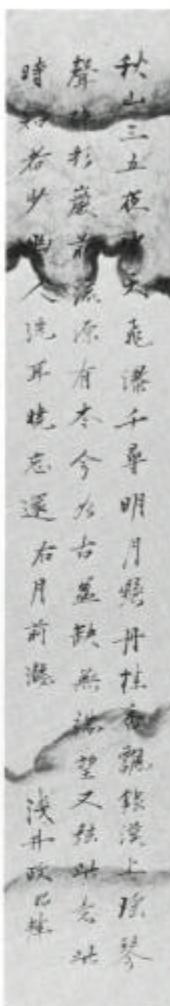
鈴木重嶺

卷之三

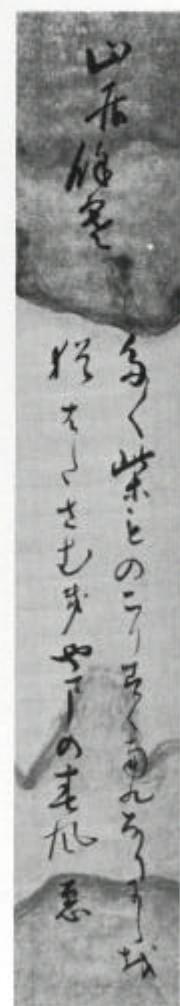
中根雪江

還舊ノ  
えり上  
生ノ  
事ノ用事  
其處

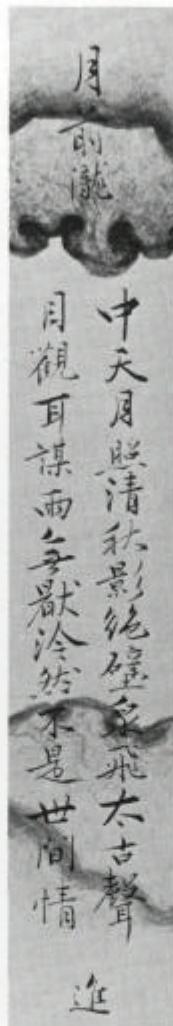
浅井政昭



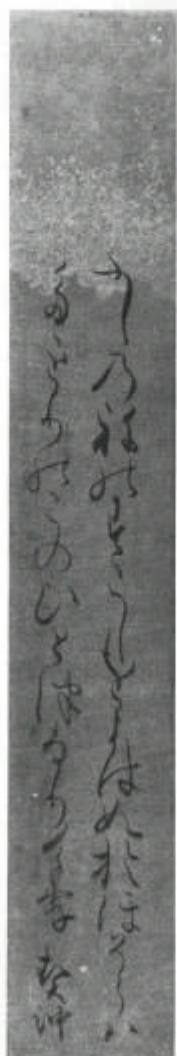
高野真齋



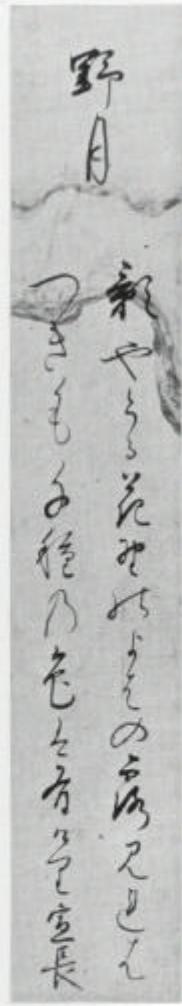
勝沢



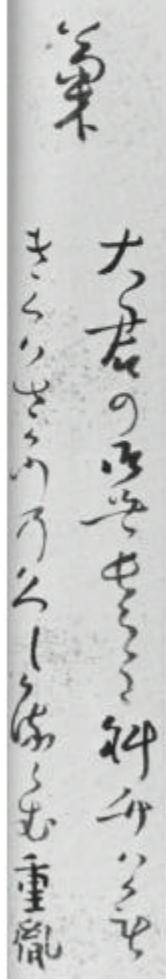
僧  
契冲



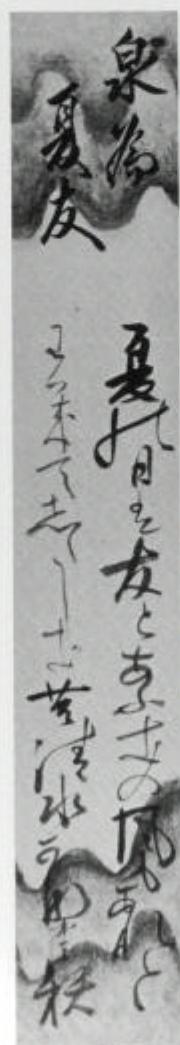
本居宣長



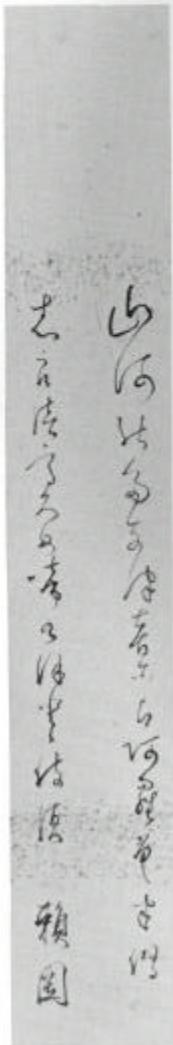
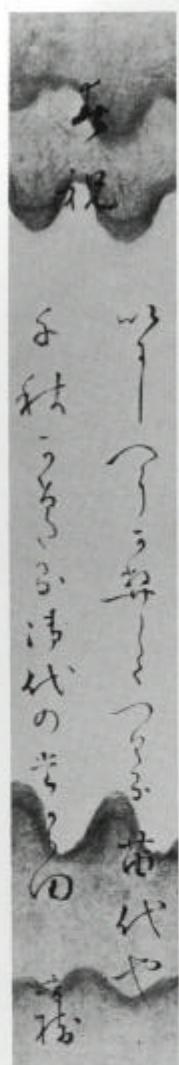
鈴木重胤



大本の事務所は御内閣  
主導の事務所は御内閣



近藤芳樹



井上頼園

留容江村暮云々 西峯挿天起云々  
瑞圖

西峯挿天起雲々 江村暮雲々  
瑞圖

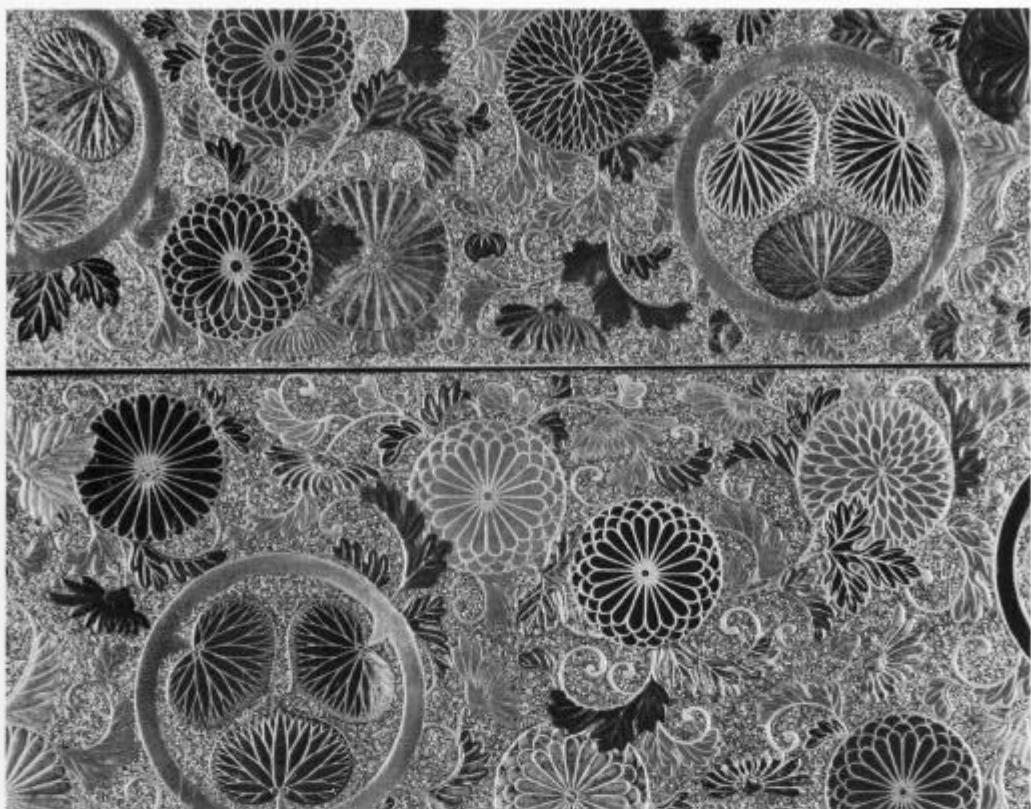
58張 瑞圖筆 「留容江村暮云々・西峯挿天起云々」の詩

永和九年歲在癸卯暮春之初會於會稽山陰之蘭亭脩禊事也羣賢畢至少長咸集此地有崇山峻領茂林脩竹又有清流激湍映帶左右引以爲流觴曲水列坐其次雖無絲竹管弦之盛一觴一詠足以暢叙幽情是日也天朗氣清惠風和暢仰觀宇宙之大俯察品類之盛所以遊目騁懷足以極視聽之娛信可樂也夫人之相與俯仰一世或取諸懷抱悟言一室之內或因寄所託放浪形骸之外雖趣舍萬殊靜躁不同當其欣於所遇暫得於己快然自足

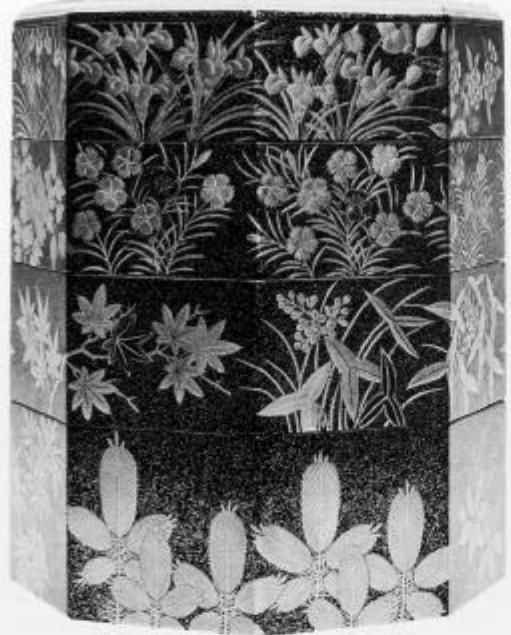
不知老之將至及其所之既倦情隨事遷感慨係之矣向之所欣俯仰之間已爲陳迹猶不能不以之興懷況脩短隨化終期於盡古人云死生亦大矣豈不痛哉每覽昔人興感之由若合一契未嘗不臨文嗟悼不能喻之於懷固知一死生爲虛誕齊彭殤爲妄作後之視今亦由今之視昔悲夫故列叙時人錄其所述雖世殊事異所以興懷其致一也後之覽者亦將有感於斯文

癸卯夏五齡褚模蘭亭帖 吳石靜

◎西脇典石筆「蘭亭帖」二枚折屏風



61 萋紋散菊花唐草模様蒔繪重箱

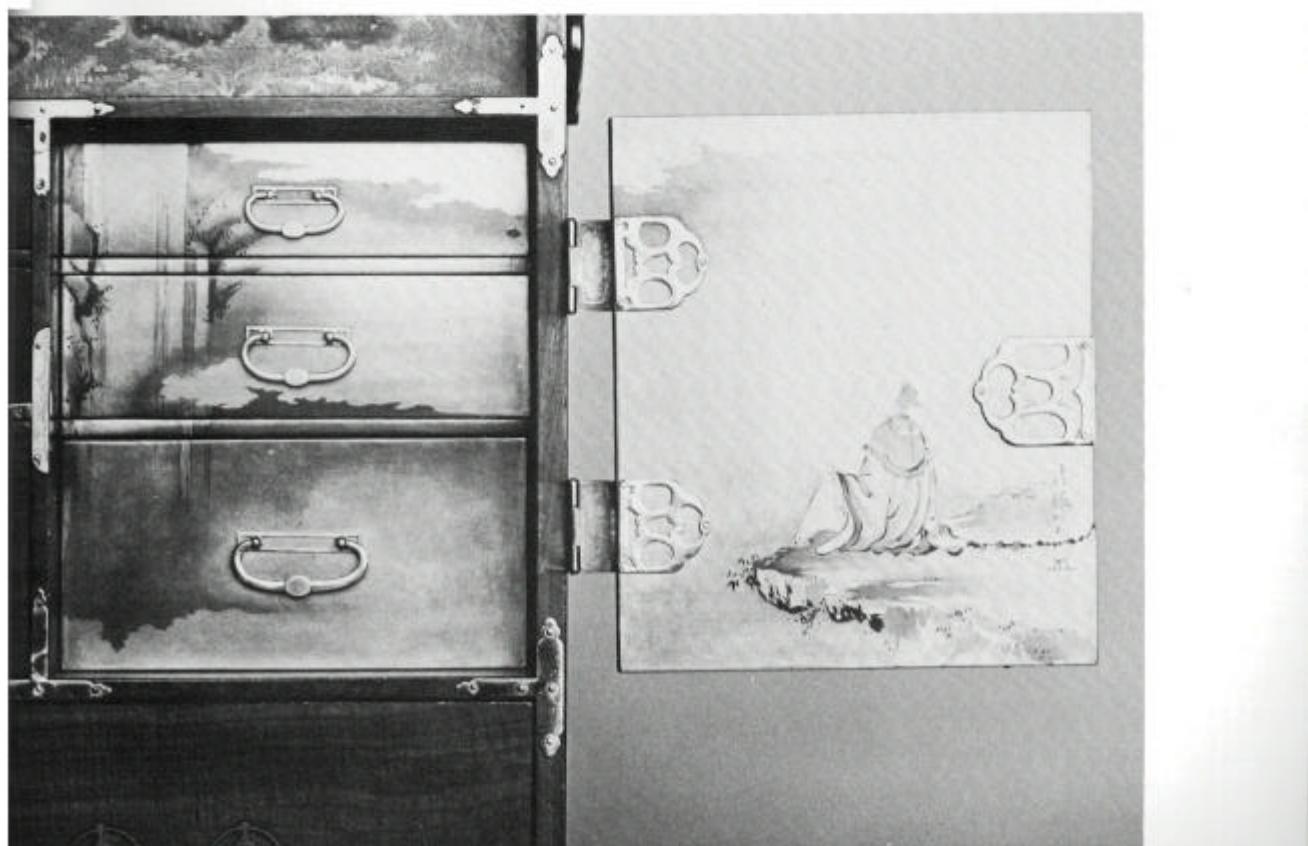


62 梨子地藤棚四季  
草花模様蒔絵提重





63 古溝巨柳・狩野栄川合作  
瀑布眺望図蒔絵桑製小箪笥





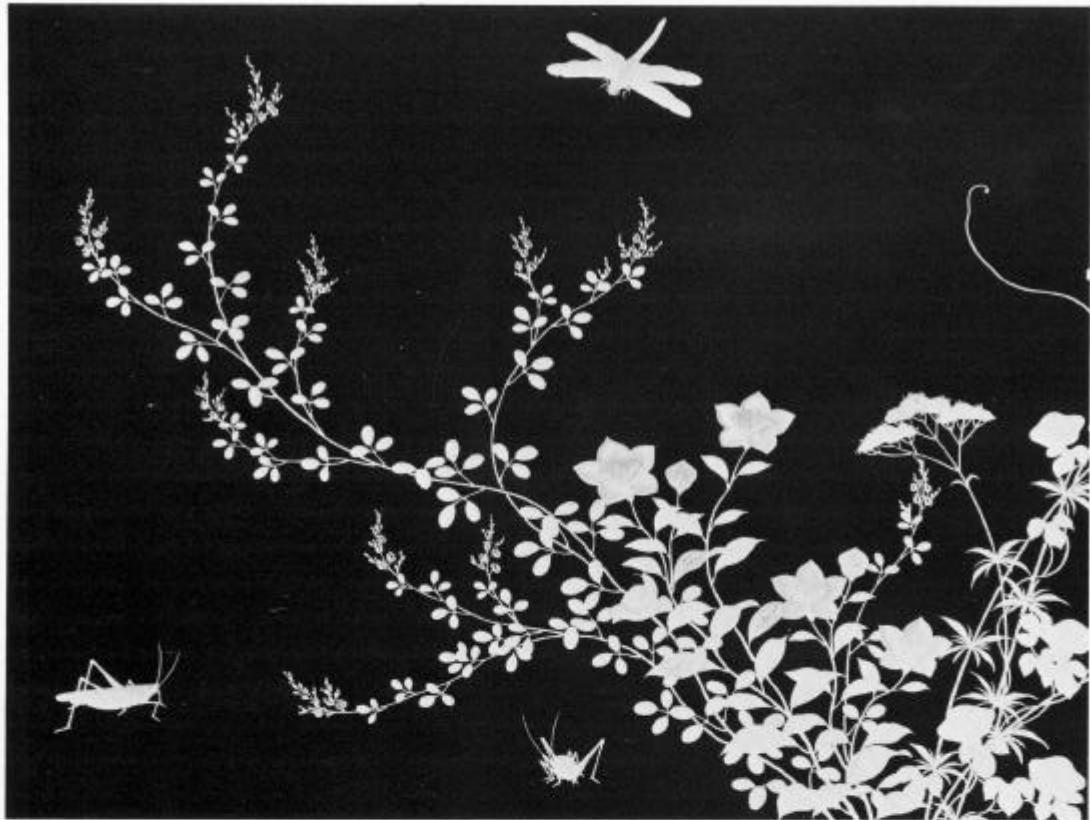
⑥4 堆朱小竈筒並びに田安齊匡遺品類



65 萍紋散牡丹唐草模様蒔絵香道具



66 跳鯉蒔絵引出付き硯箱



69 黑蠟色塗地秋草虫模樣  
蒔繪袖机・針箱





66 明珍吉久作 鉄製龍置物(部分)



66 明珍吉久作 鉄製龍置物



66 明珍吉久作 鉄製海老置物



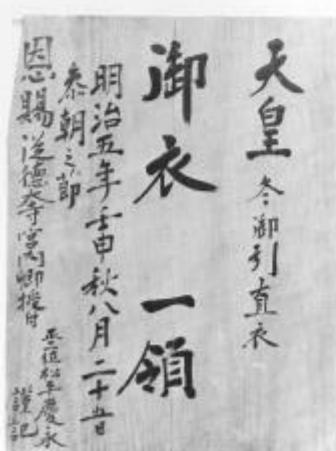
⑦⑩ 沼田一雅作 三島釉象香炉



71 金製細鑲耳飾

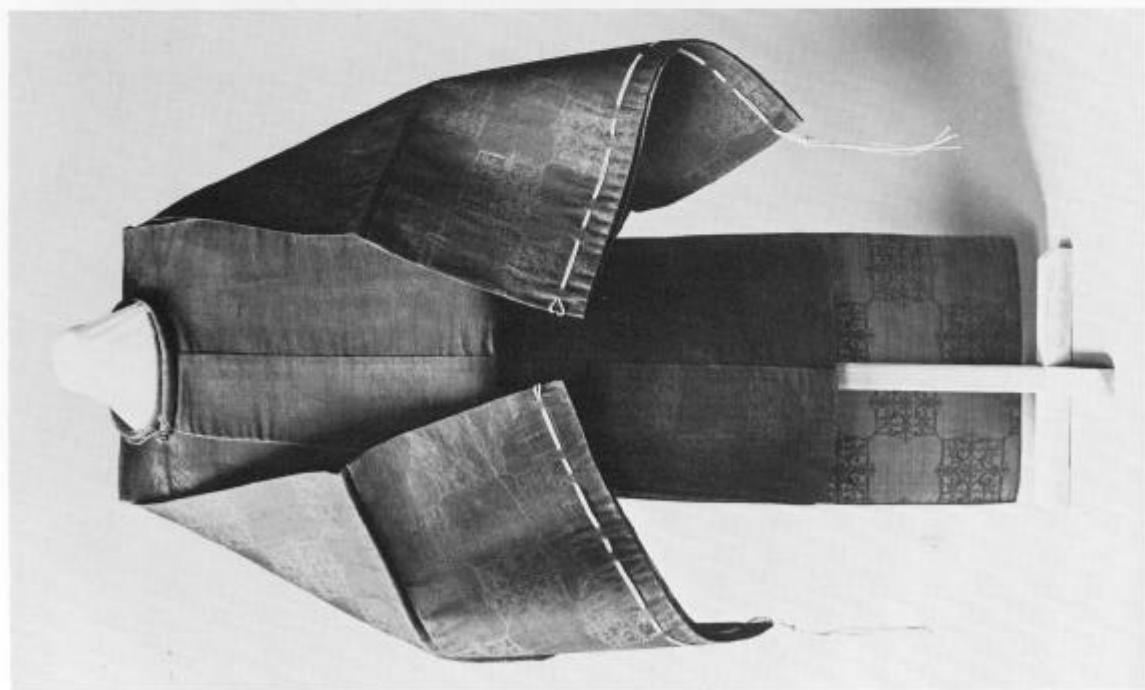


72 白地小葵文冬の御引直衣

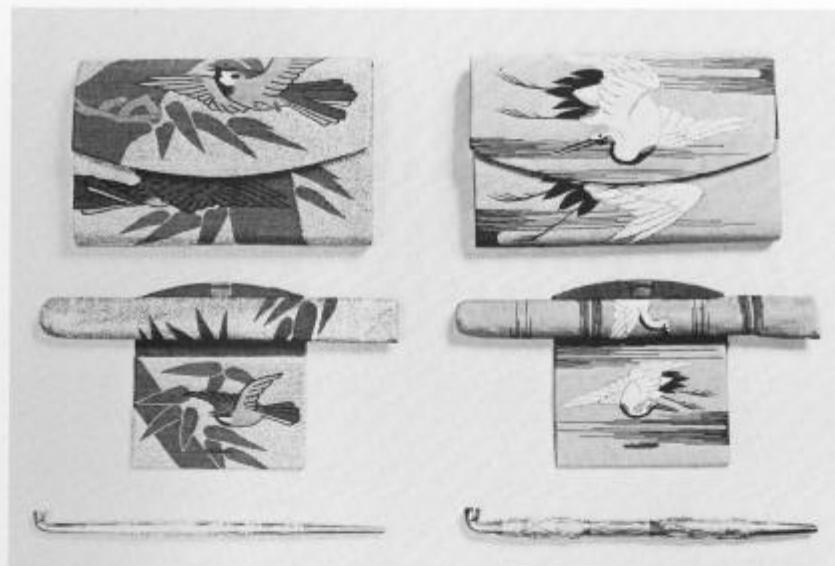




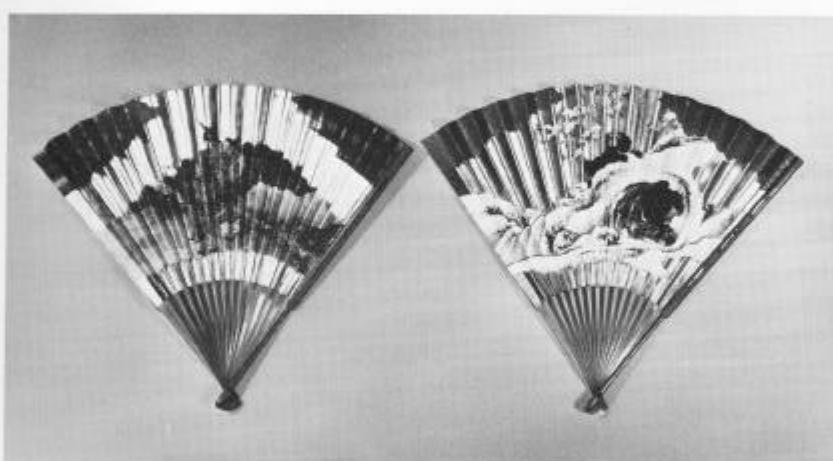
⑭ ⑮ 黃地花鳥文狩衣，武家風指實



⑯ 青葡萄色頭紋紗狩衣



(1) 緞錦紙入・煙草入・煙管筒



(2) 中 啓



(2) 夏 局



78 薄萌黄色縮緬地御所車に草花流水模様縫小袖



79 白縮緬地紗綾形文藤桜牡丹模様繡小袖

花菴室而御壺

御茶入日記

一柄上

半武裕

全肩百  
足肩百

初肩八  
後肩八

足肩字文多の白三

白三

小松  
大松  
杭

白二  
白三

柄上  
一柄裕

四升八

坐

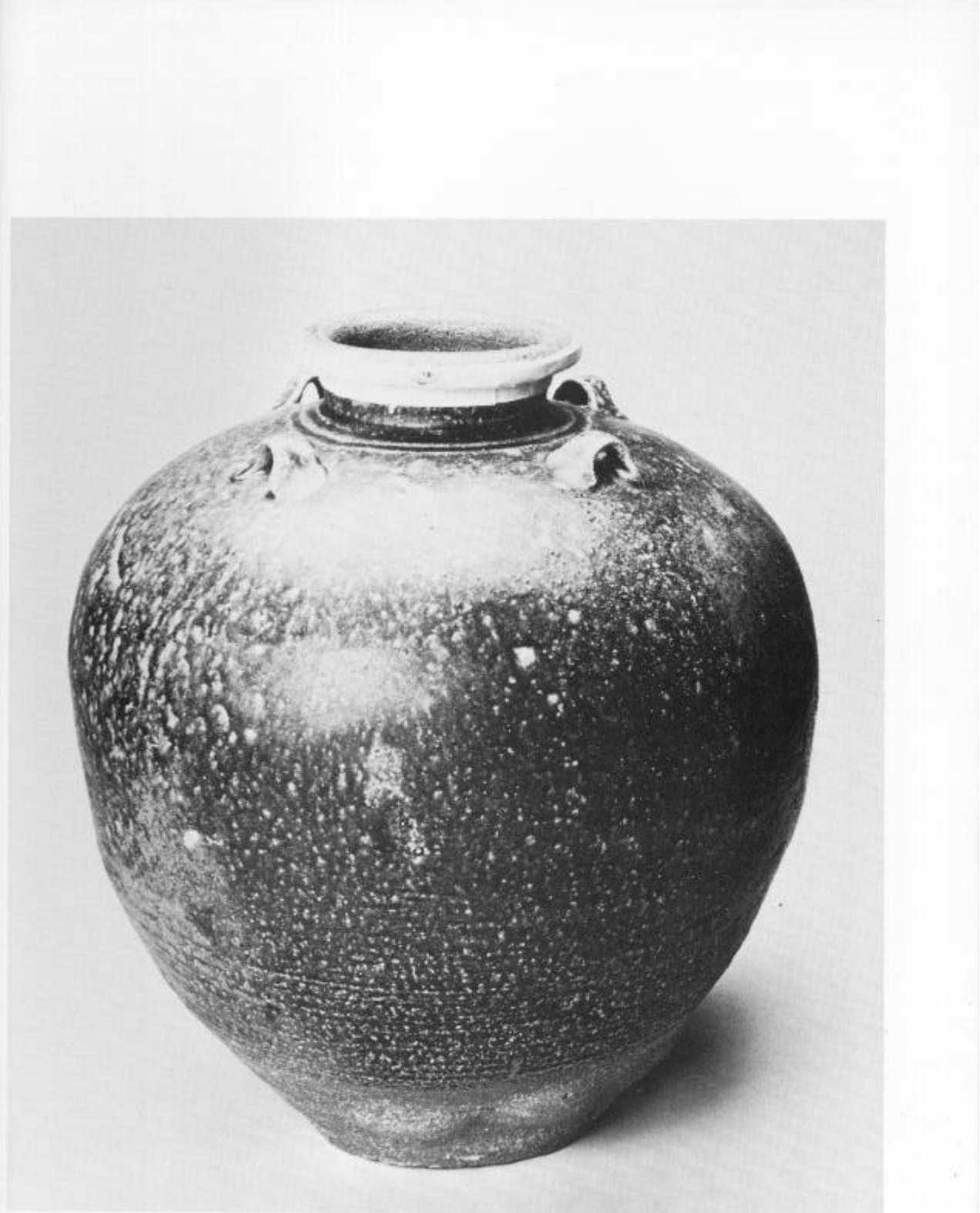
已肩百  
足肩百

福山法典

80 初花の茶壺 付属史料

宇治茶師堀正法筆 御茶入日記  
松平春嶽筆由緒書付き茶壺袋





81 大呂寸茶壺（黃綠褐蛇蟠釉四耳壺）



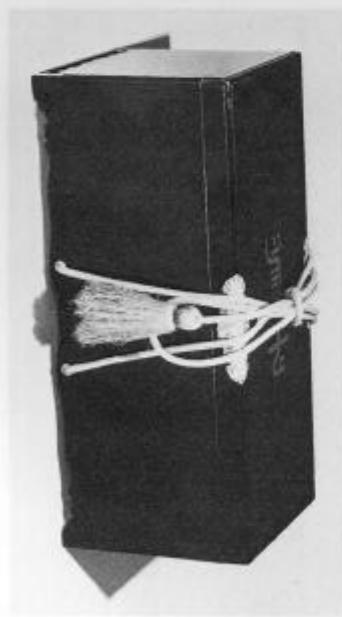
86 桜花模様染付絵道具



90 木製堆朱暗箱形写真機

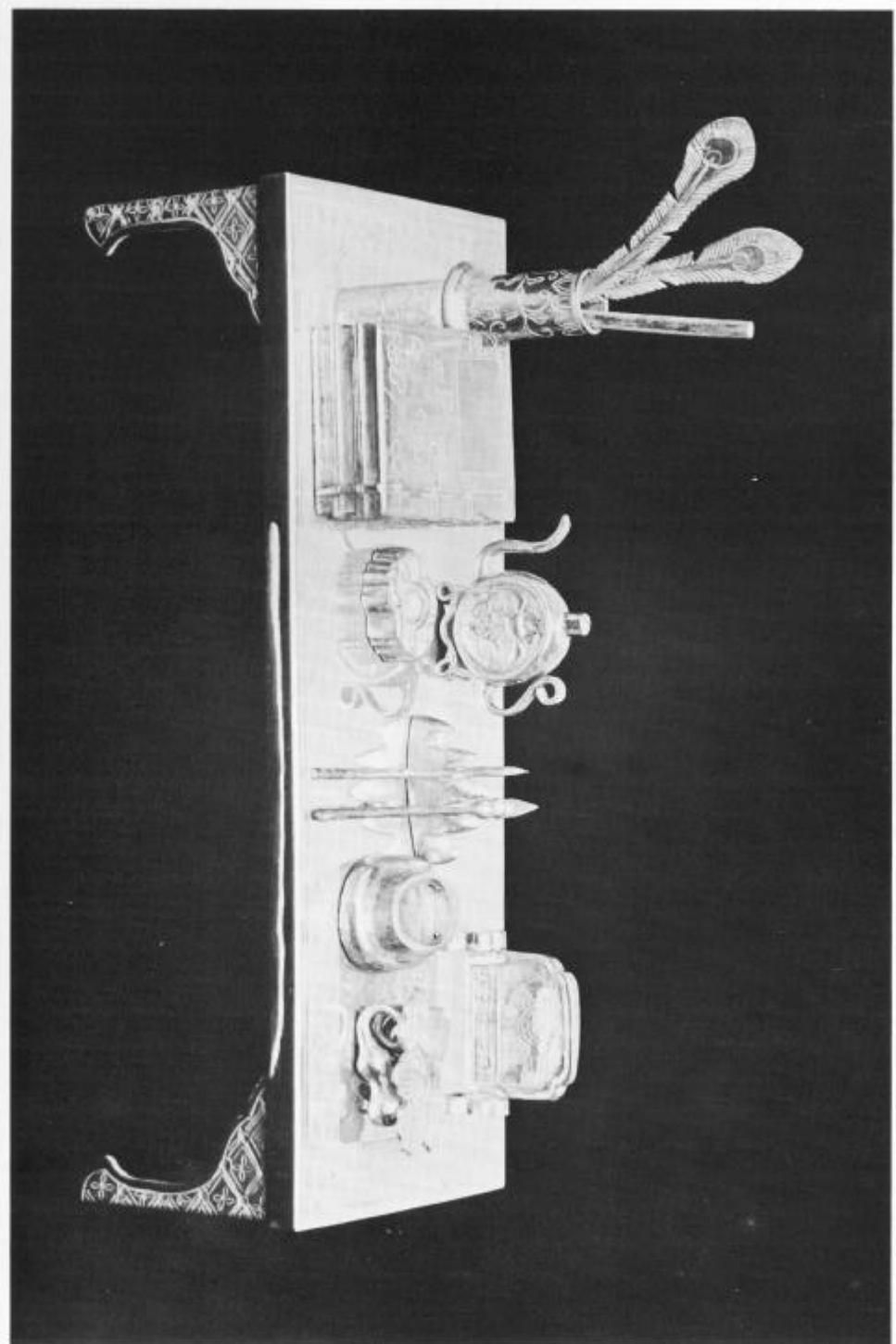
② 佐太田道灘所用琵琶 銘「子鳥」



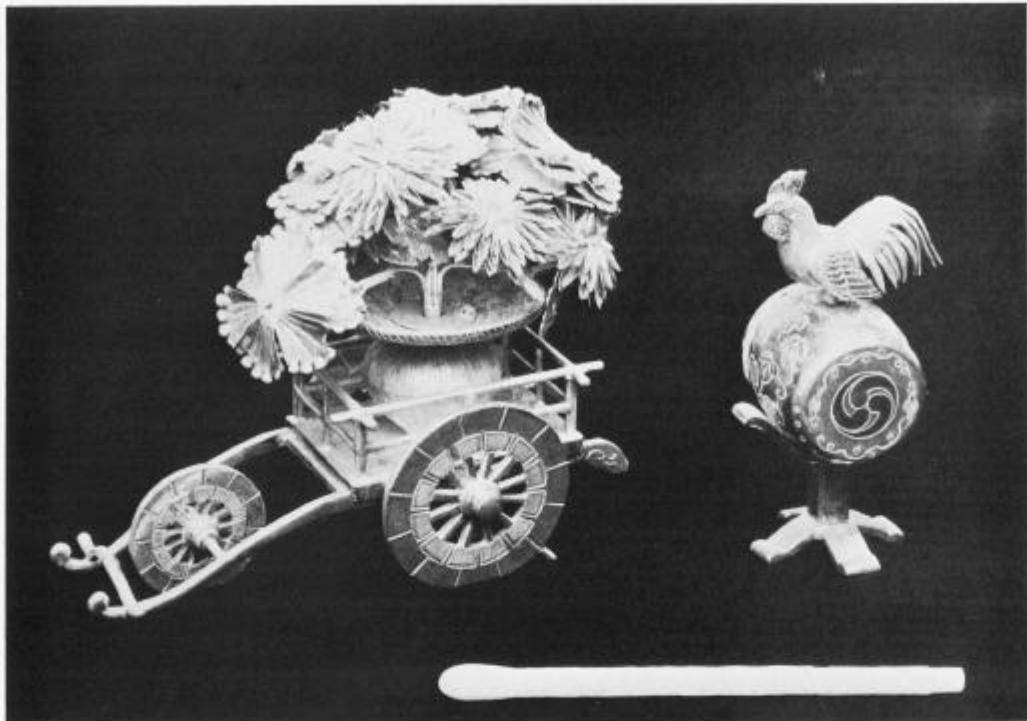


⑧「千鳥」の花籠箱並びに蓋裏の蒔絵

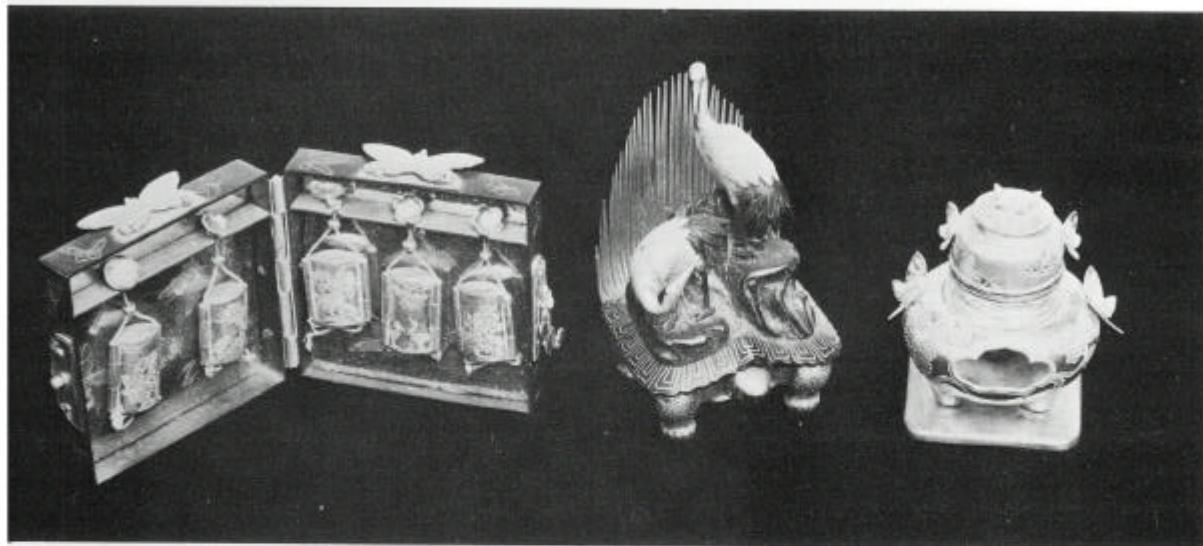




83 御屏領御大切之御細工物



83 御拂領御大切之御細工物



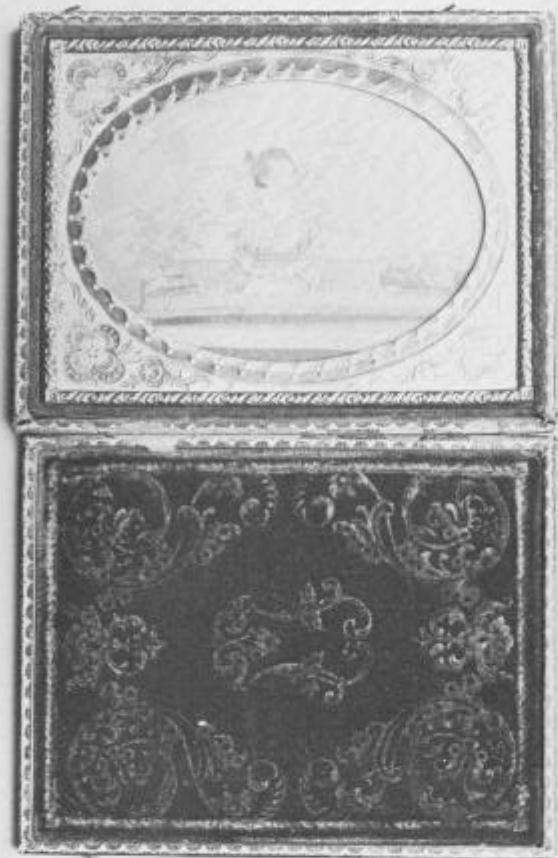
83 御拝領御大切之御細工物



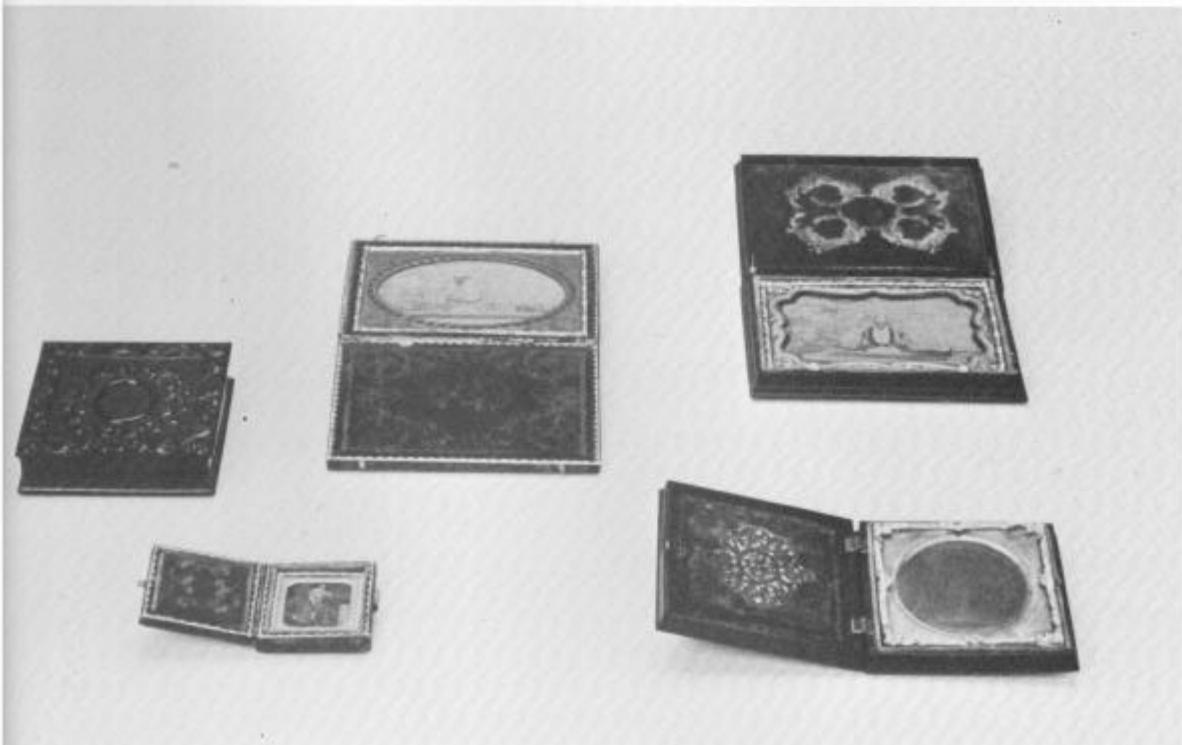
84 オルゴール付枕時計



85 松平春嶽手廻諸道具類  
(葉入類)

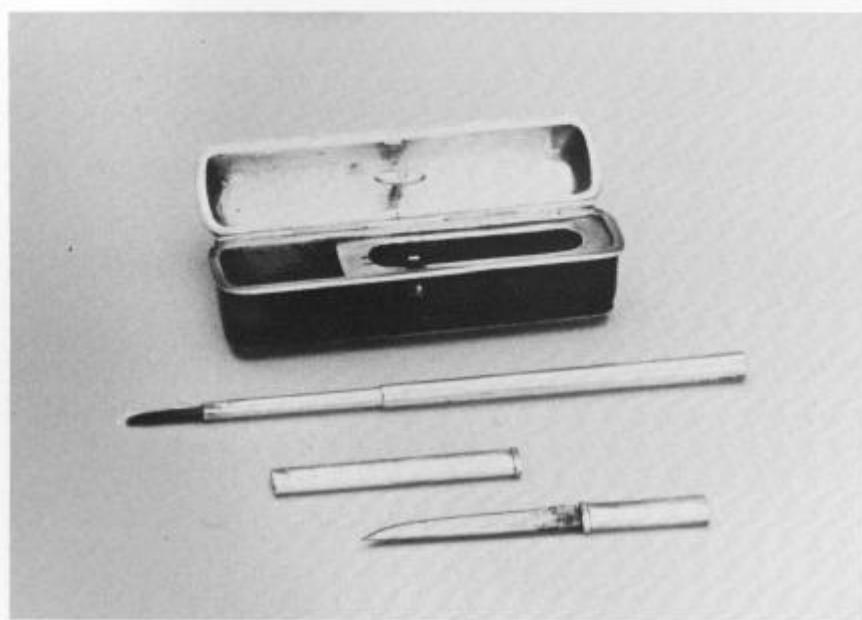
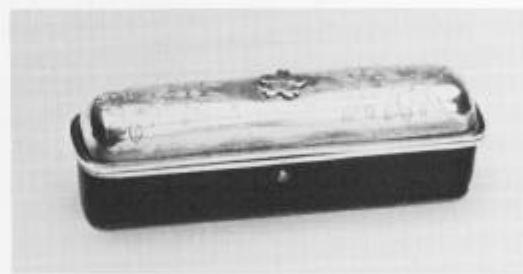


85 松平春嶽手廻諸道具類  
(黒皮張り写真入)





85 (蓮模樣犀角盃)



85  
(銀製矢立)

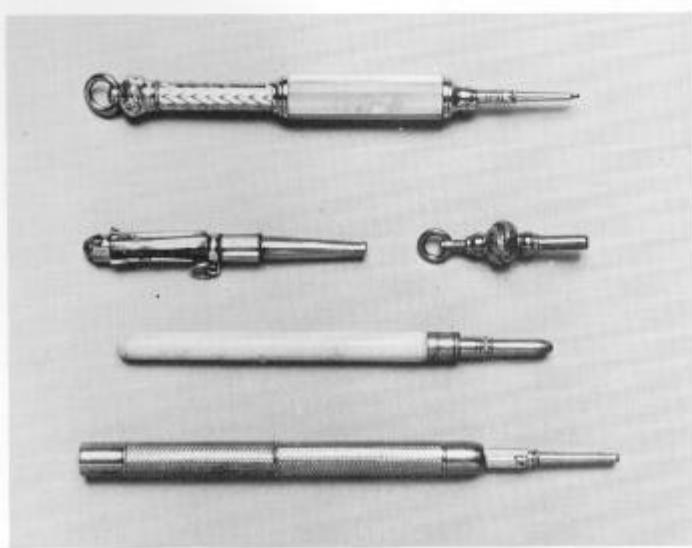
85 (筆立・筆洗・硯屏)

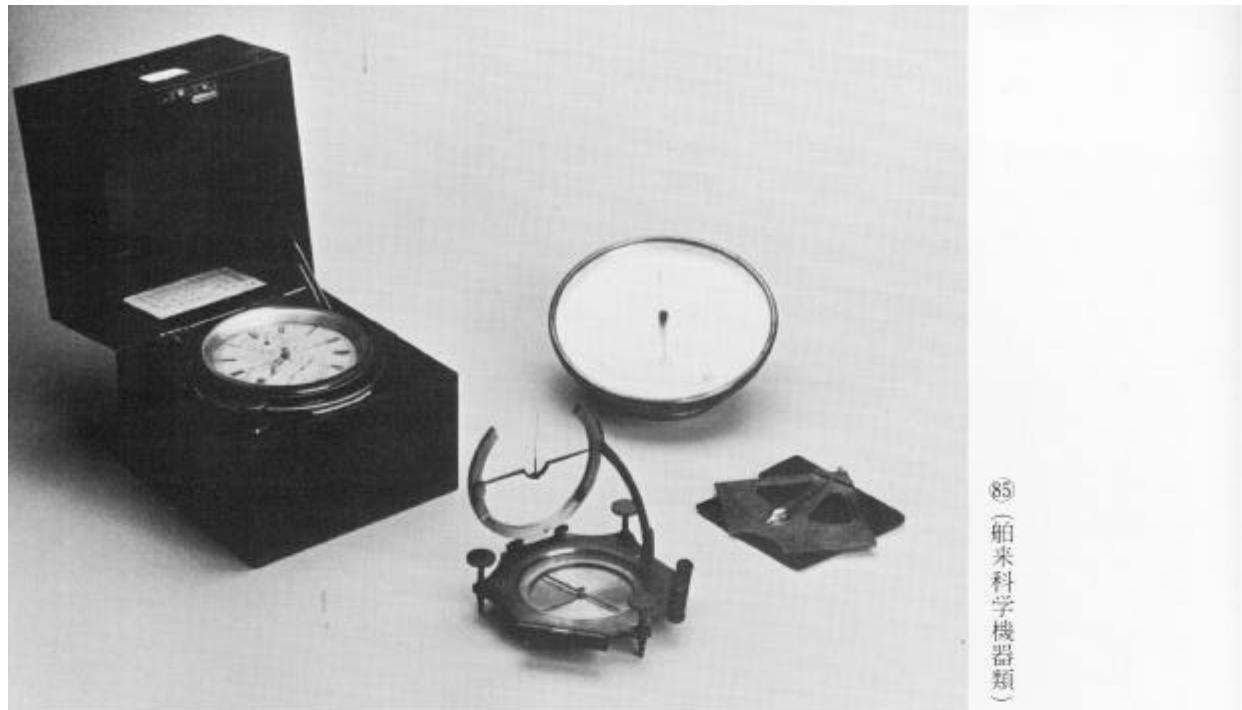


85 (本間琢齋作  
班紫銅水滴)



85 (舶来シャープペンシル)





85 (舶来科学機器類)



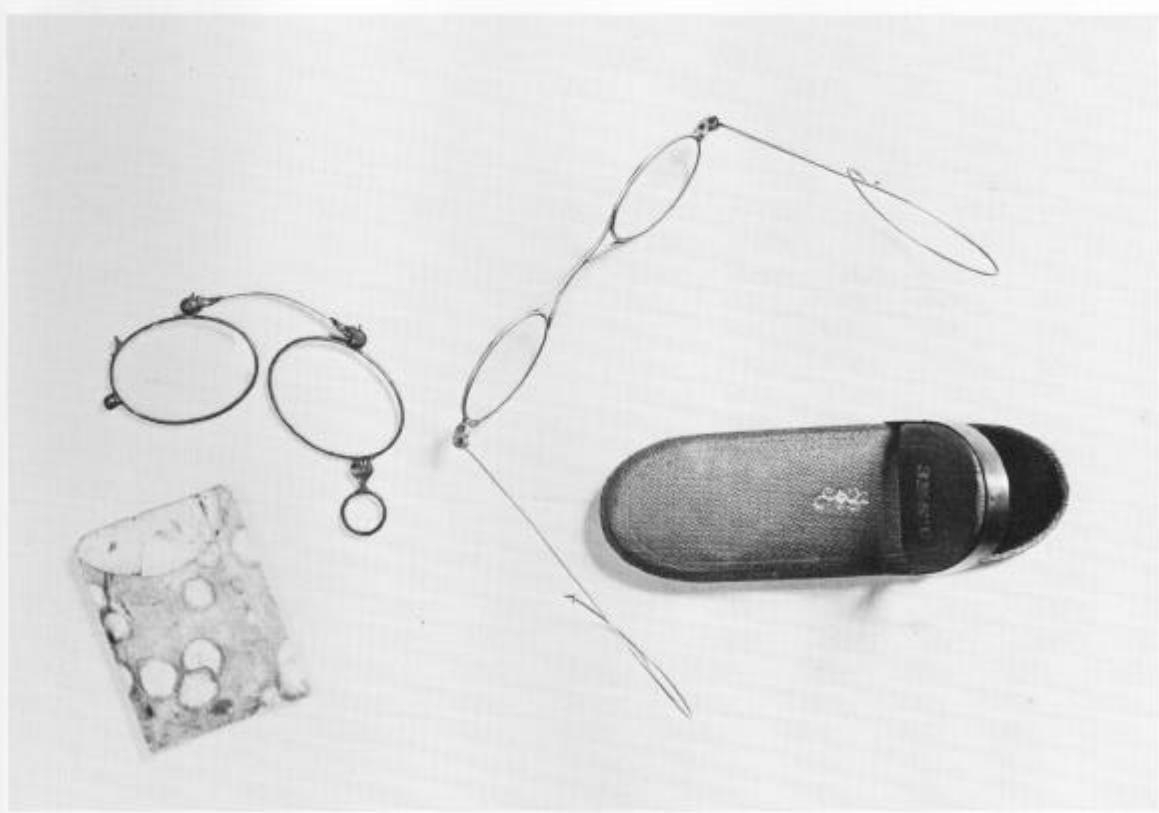
85 (英國製氣圧計)



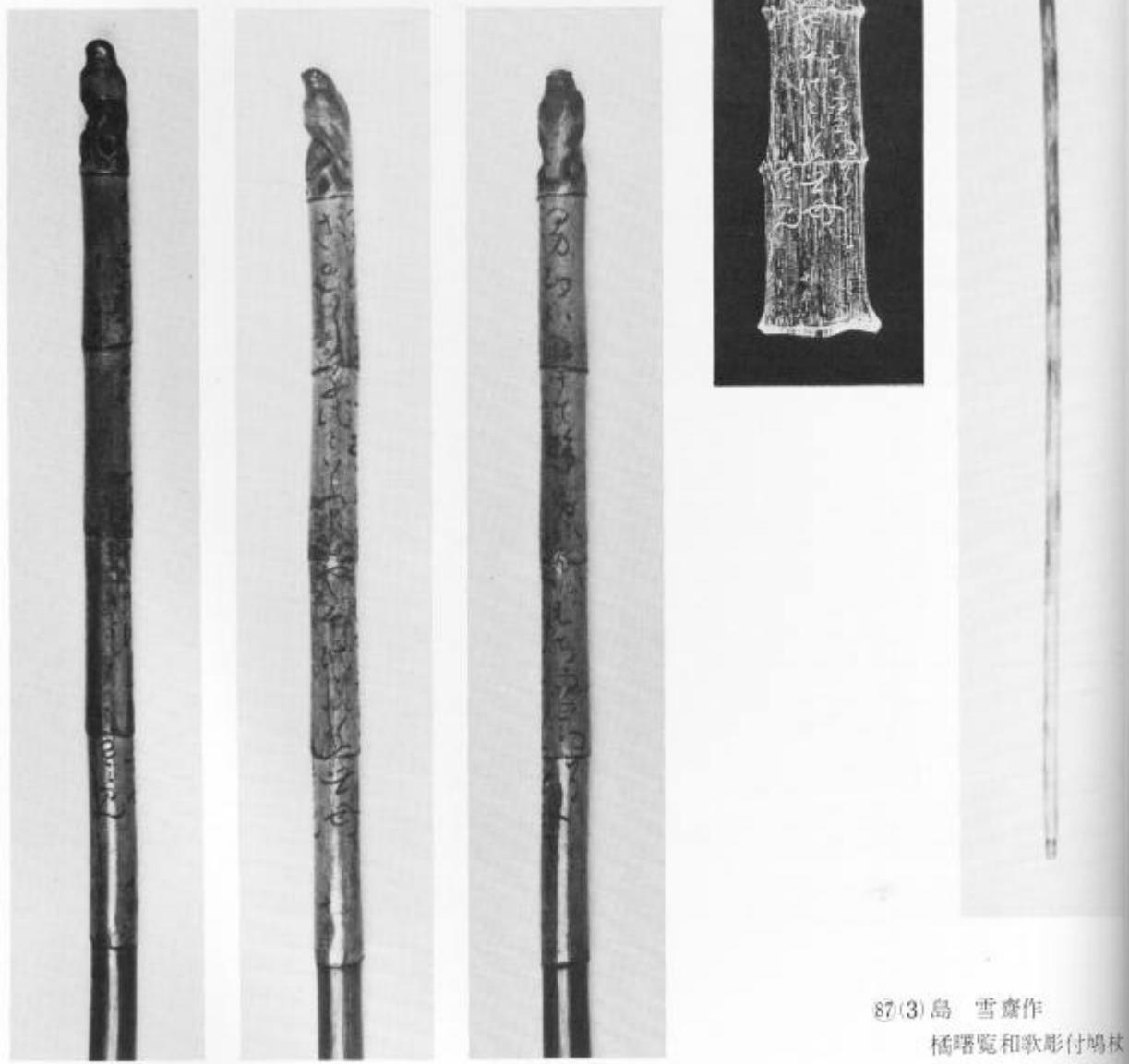
85 (舶來懷中時計類)



85 (ドイツ製望遠鏡)



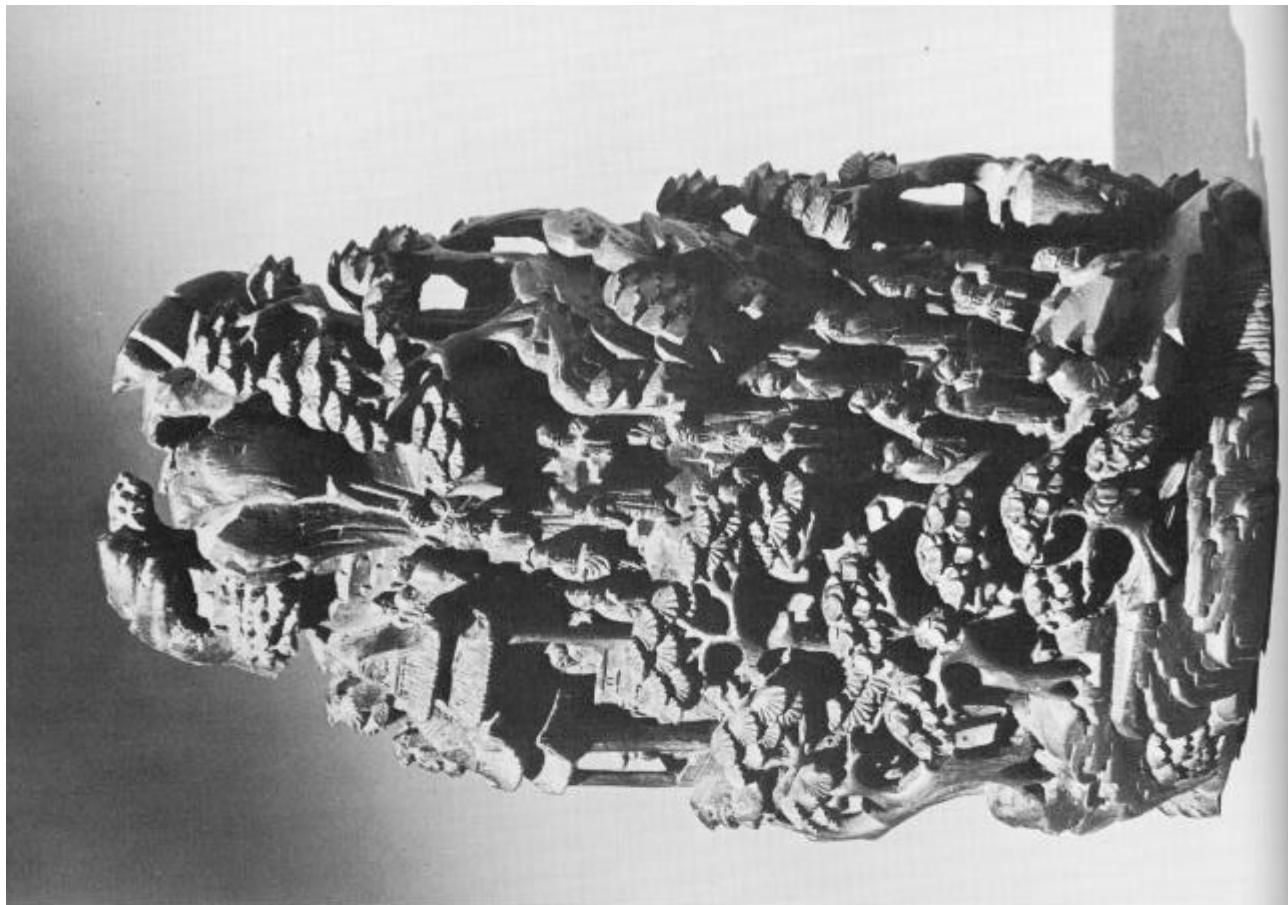
85 (舶来老眼鏡)



87(3) 島 雪齋作  
橋曙覧和歌彫付鳴杖



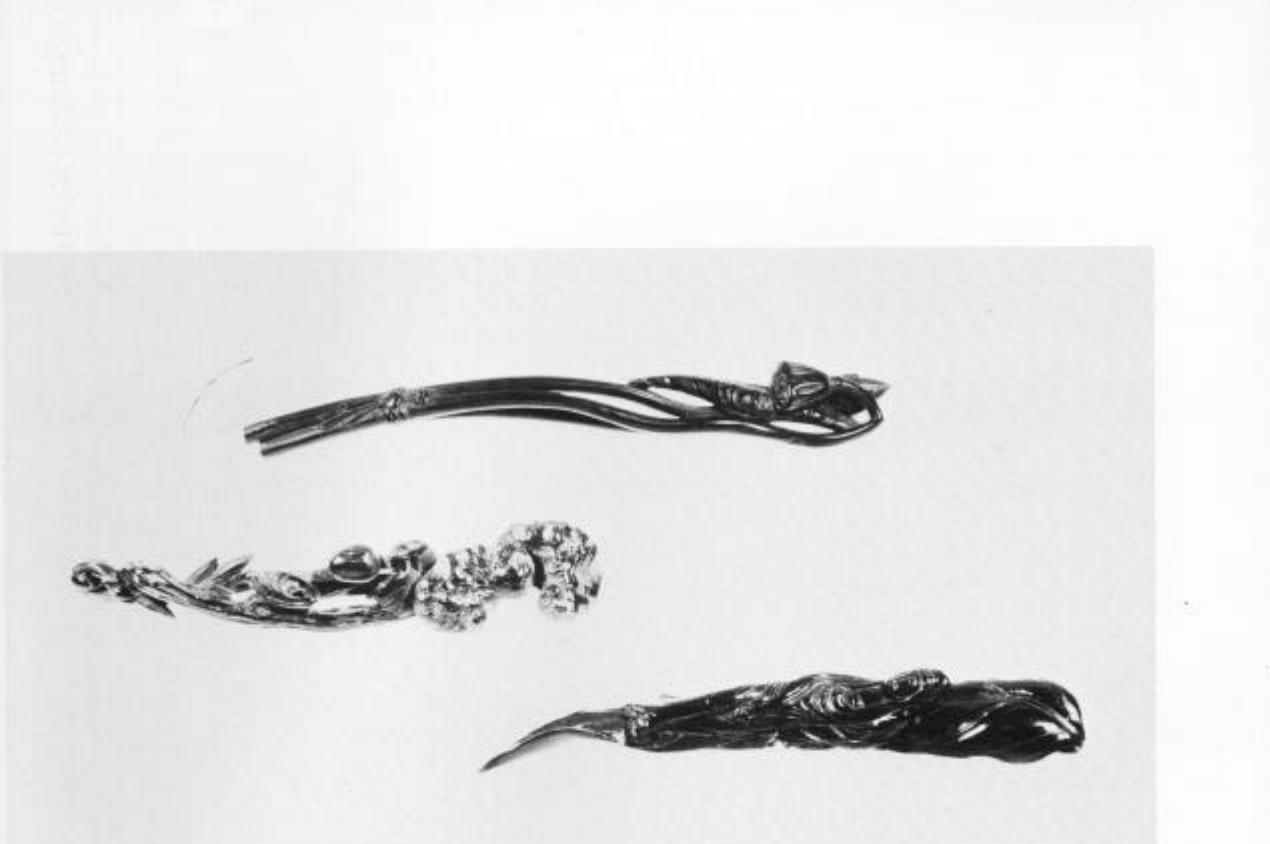
87(1)島 雪齋作 柿本人麻呂座像



87(2) 百老竹泥塑



87(6) 島 雪齋作 伽羅製白衣觀音線香立



87(4)島 雪齋作 筆架類



87(5)島 雪齋作 竹・紫檀製矢立



88 仏国製 男女人体模型





89 山内容堂肖像写真



89 四老公御写真衝立  
松平春嶽肖像写真



89 島津久光肖像写真



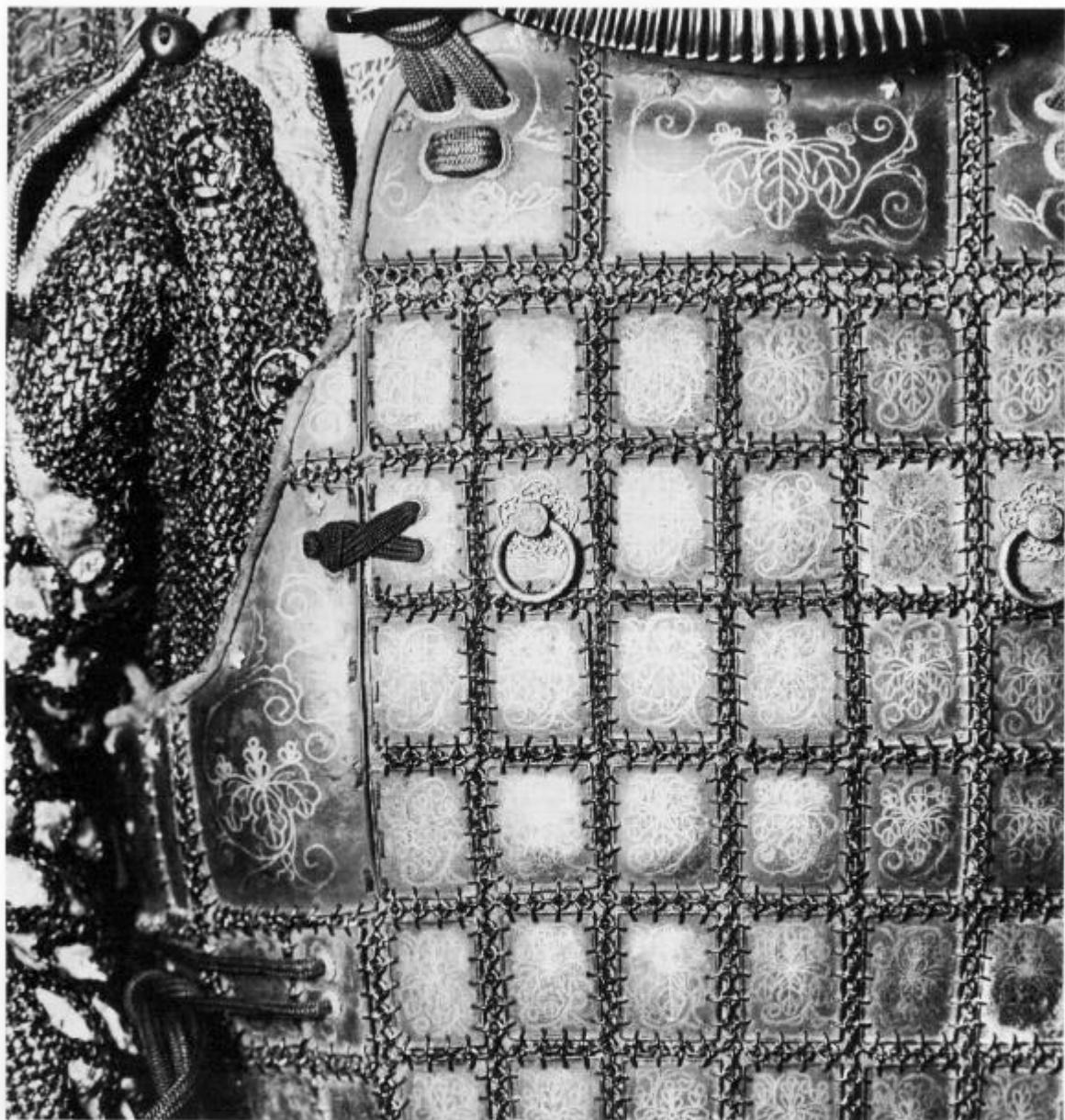
89 伊達宗城肖像写真

此寫照慶應三年  
五月十四日大樹公召  
余與嶋津君輝伊達  
子藩松平嚴璋於京師  
營中令俱議國事是日  
為慰其勞賜酒又出寫  
真鏡所俾描四人象者  
也故裝以為小屏書其  
由於背云春嶽永識

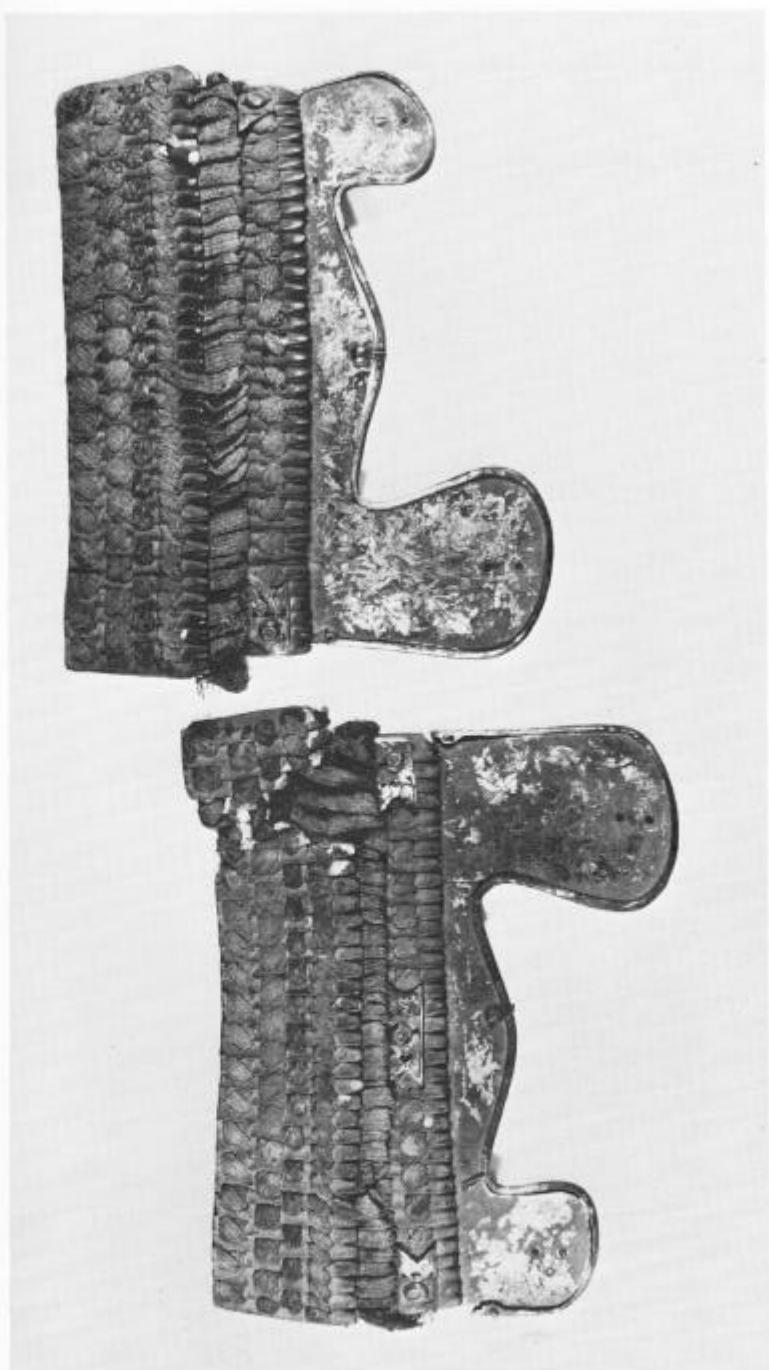
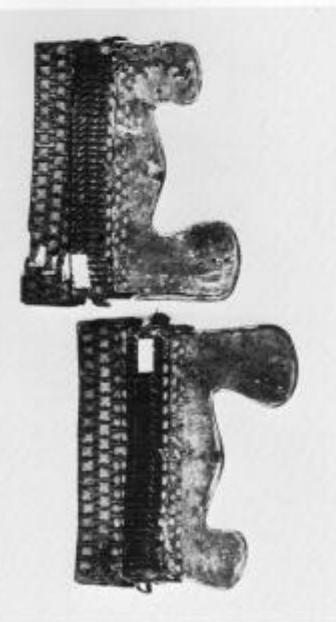
89 松平春嶽筆 衡立裏書

92 桐崩紋銀象眼骨牌札疊具足





92 桐崩紋銀象眼骨牌札疊具足(部分)





93 葵葉模様顯紋紗夏用陣羽織

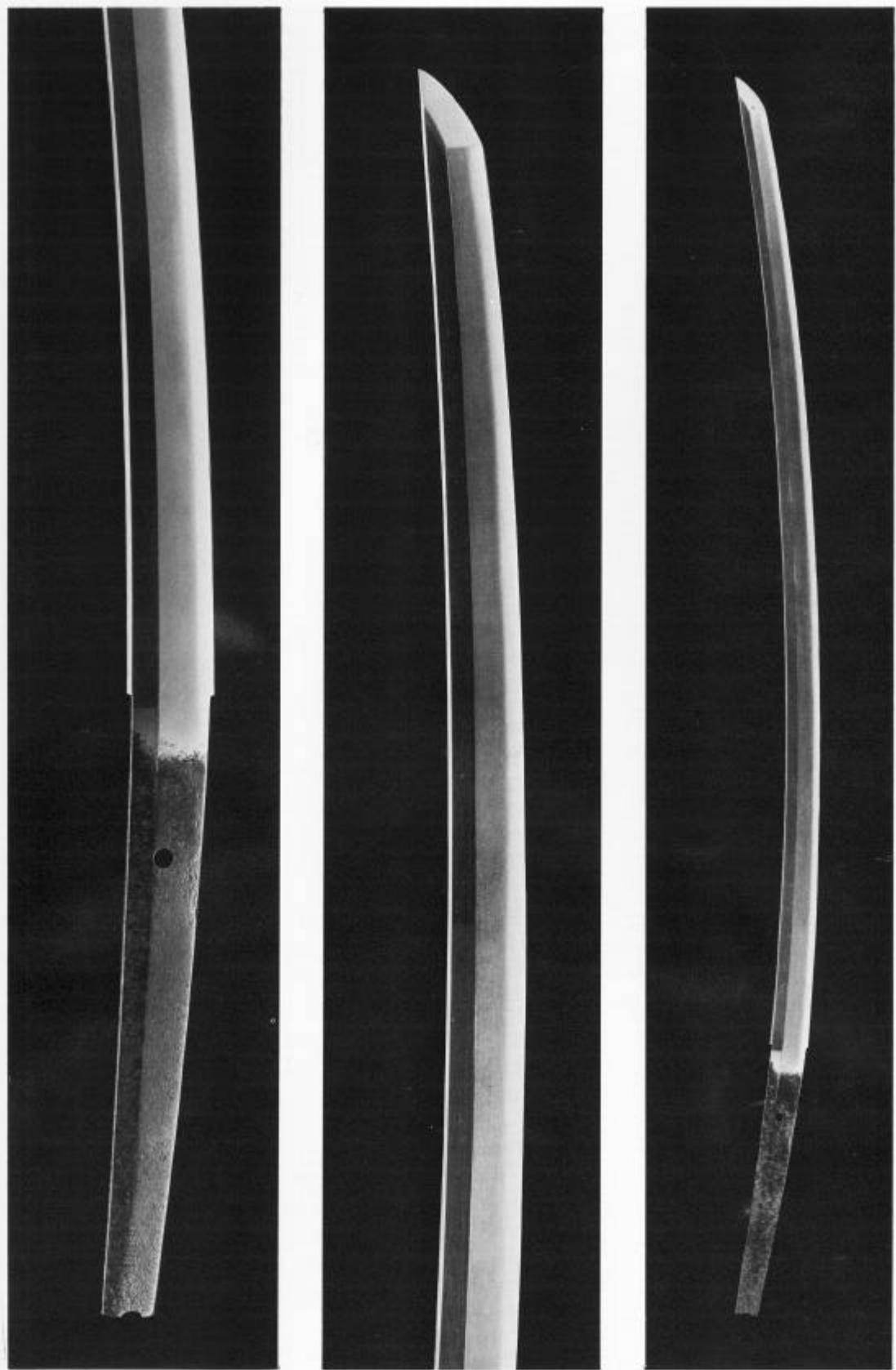


94 白糸緘陣羽織

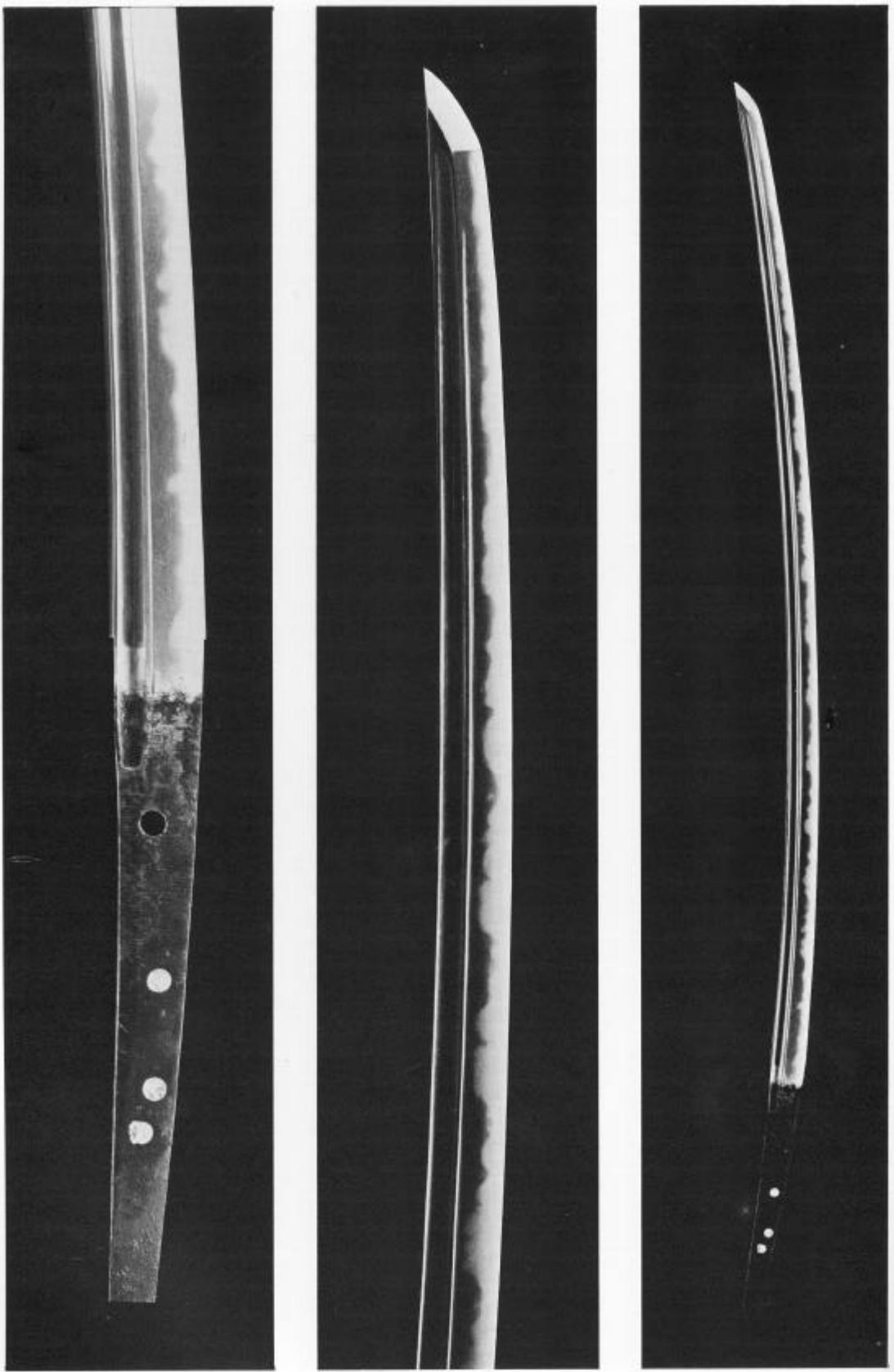


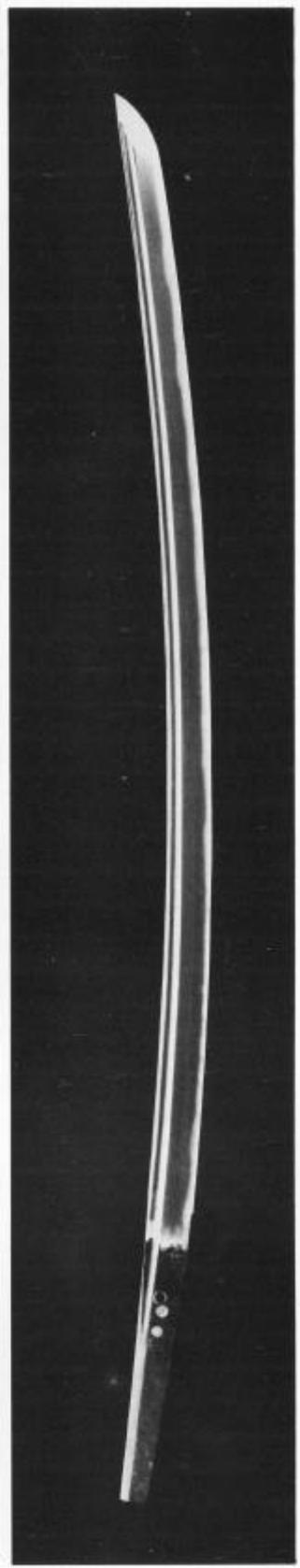
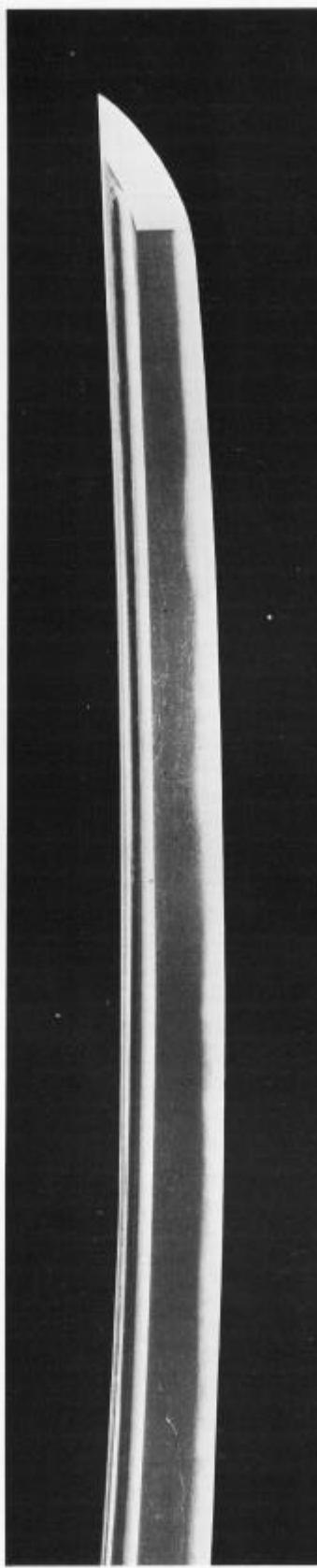
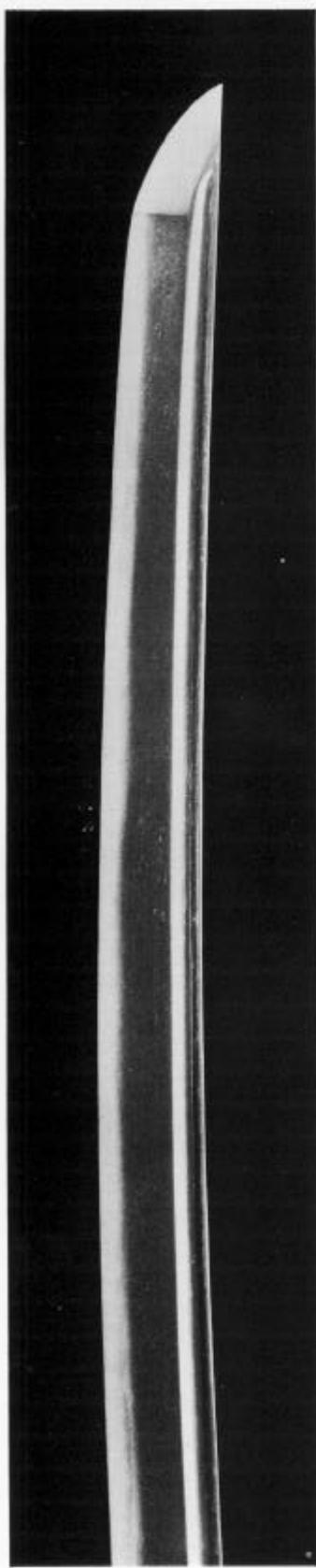
95 葵紋散雲形模樣錦具足下椅

96 太刀 銘「恒次」



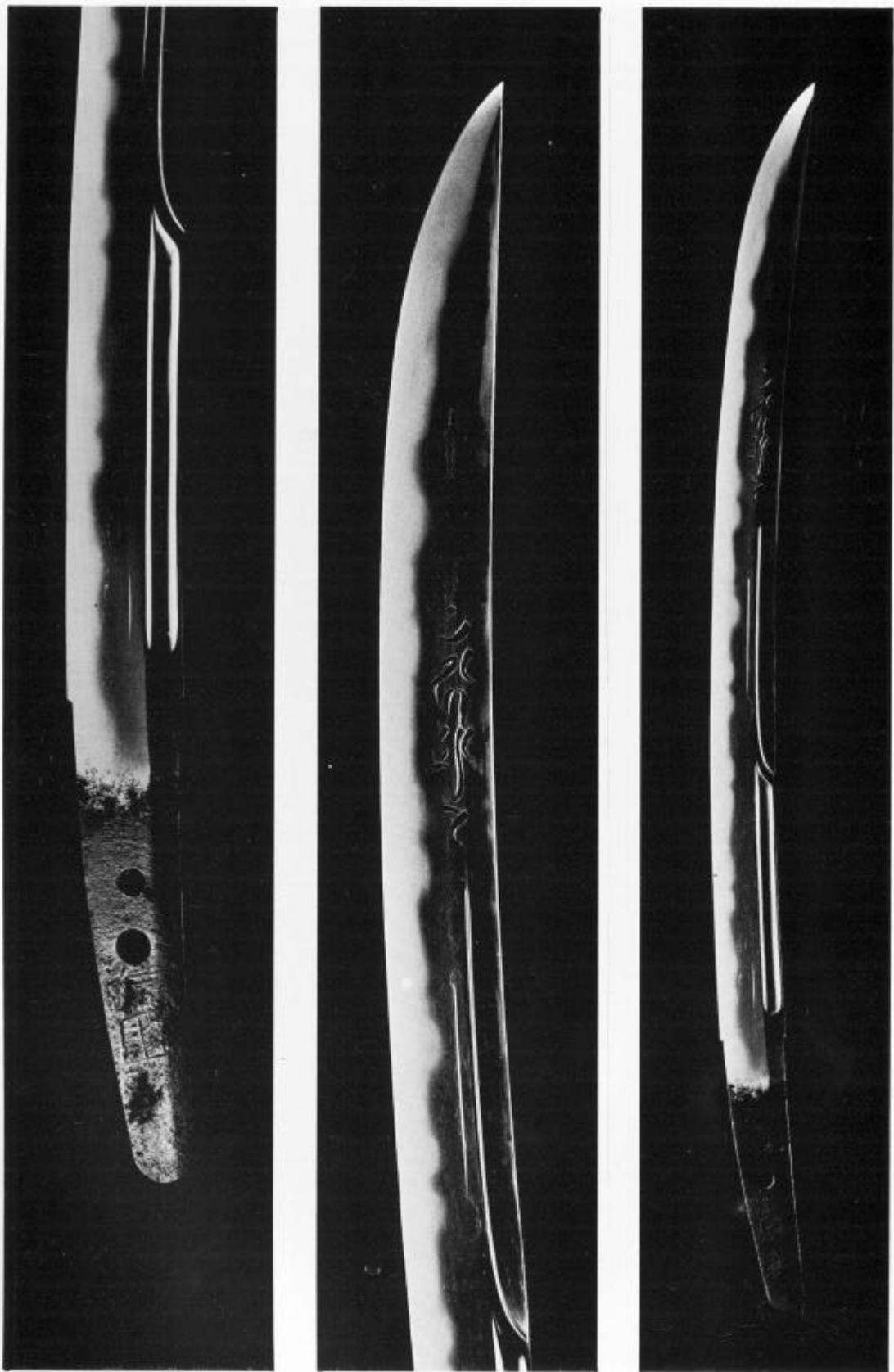
97 太刀 謂「康光」



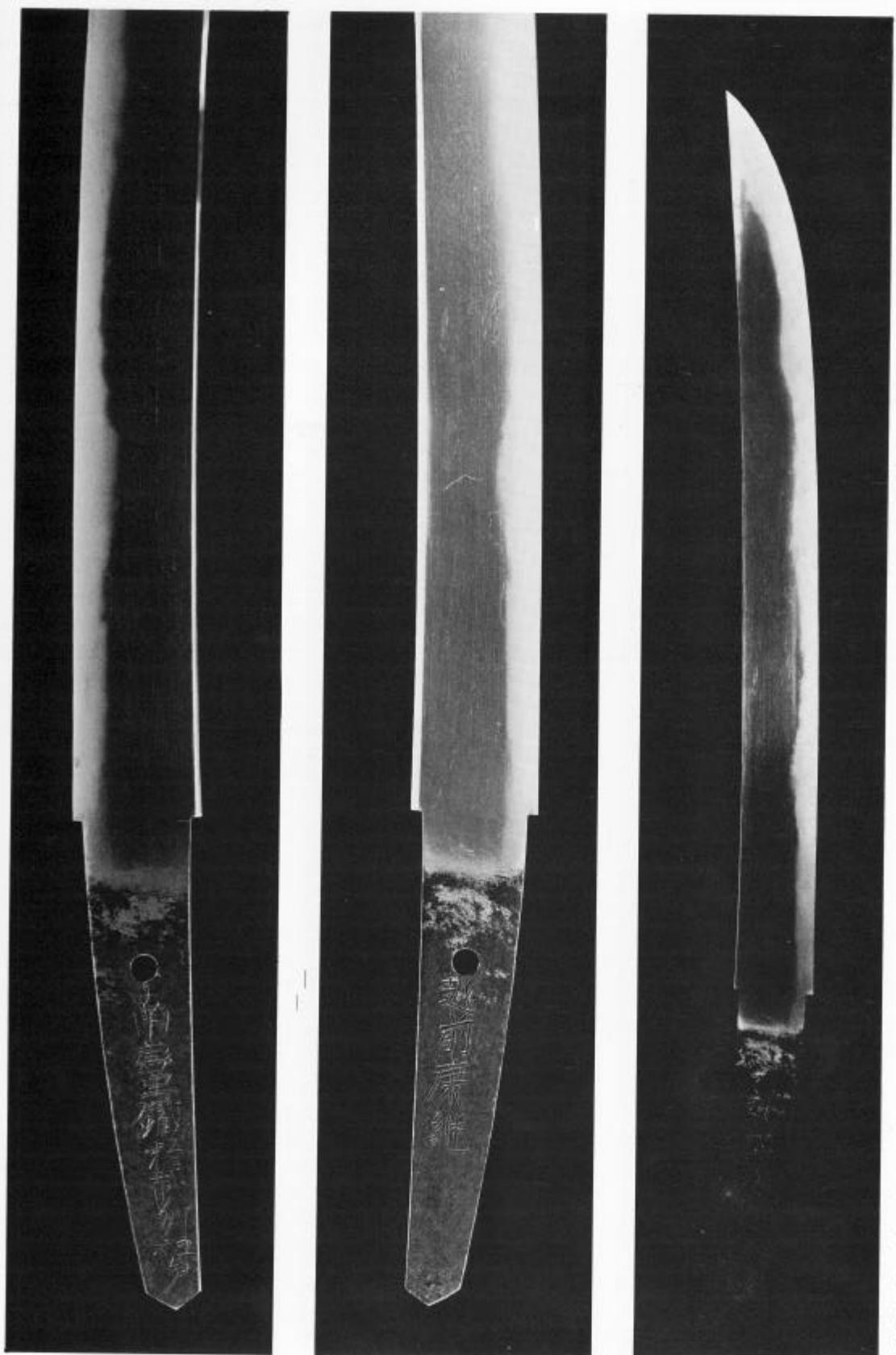


刀 無銘  
伝来国光

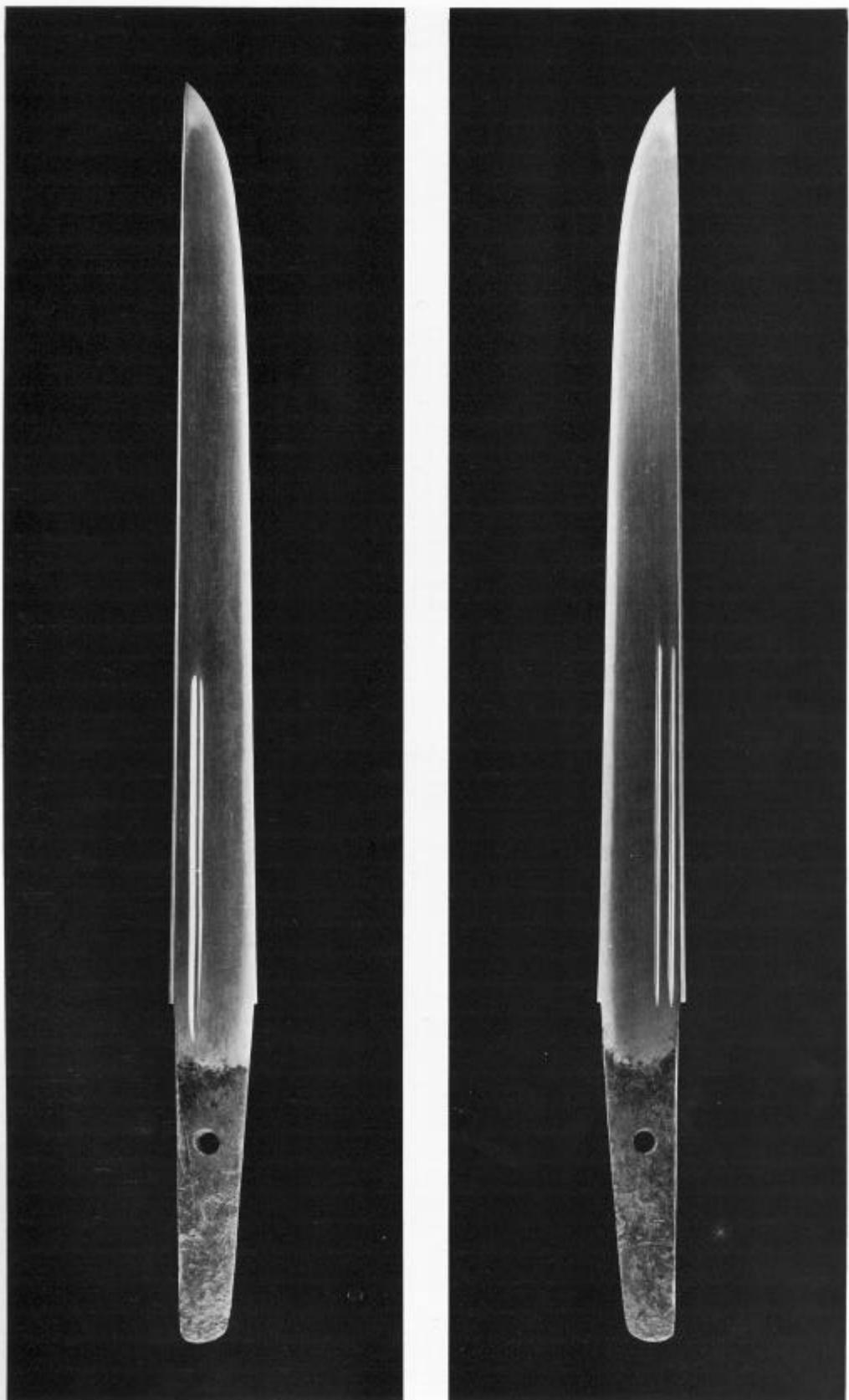
99 脇差銘「信國」

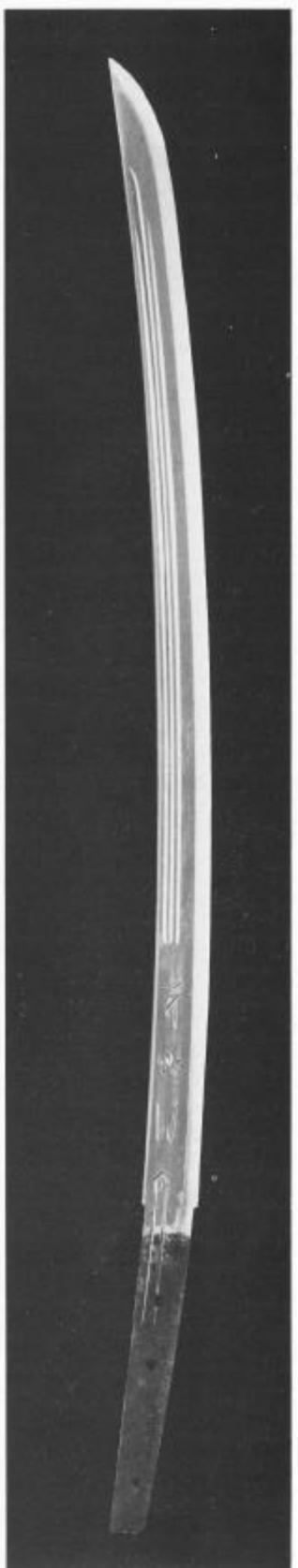
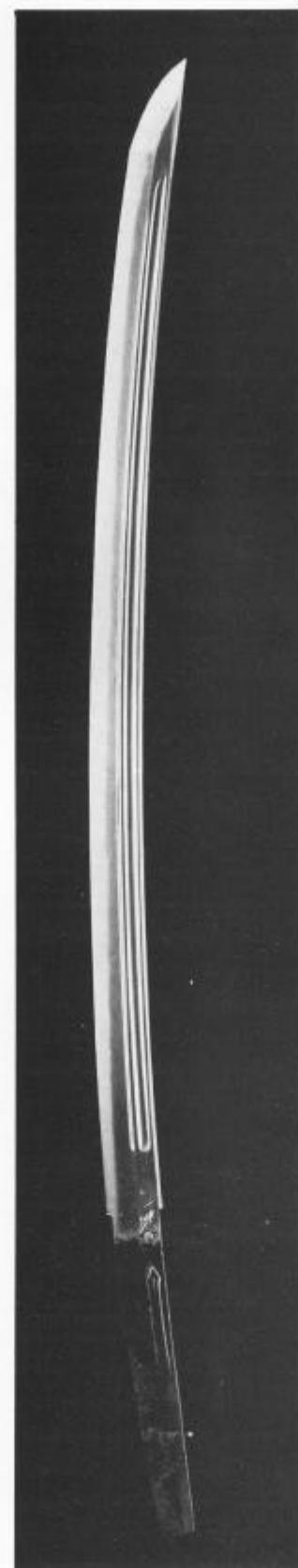


○脇差銘「越前康経」



⑩ 短刀 銘「国光」

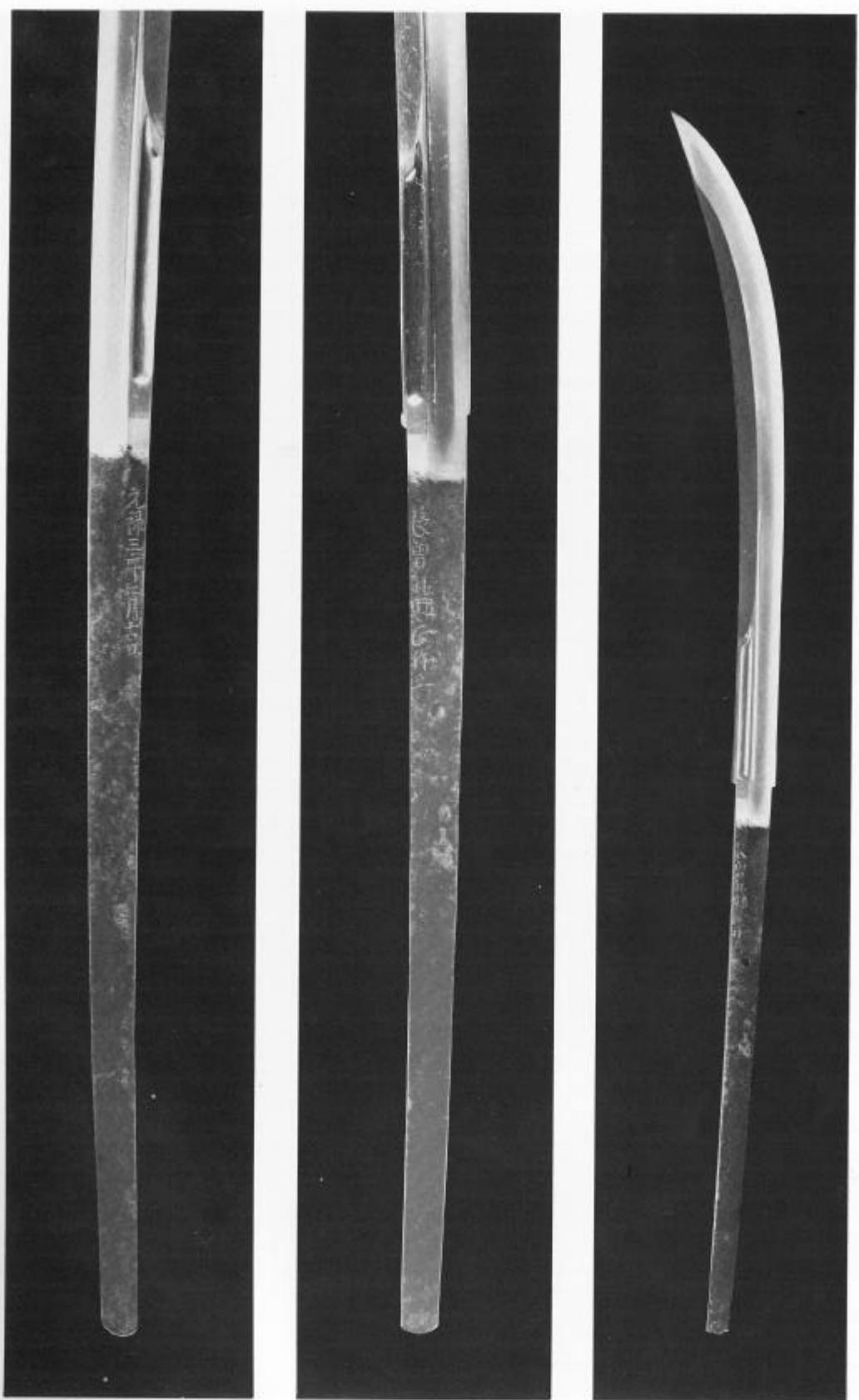




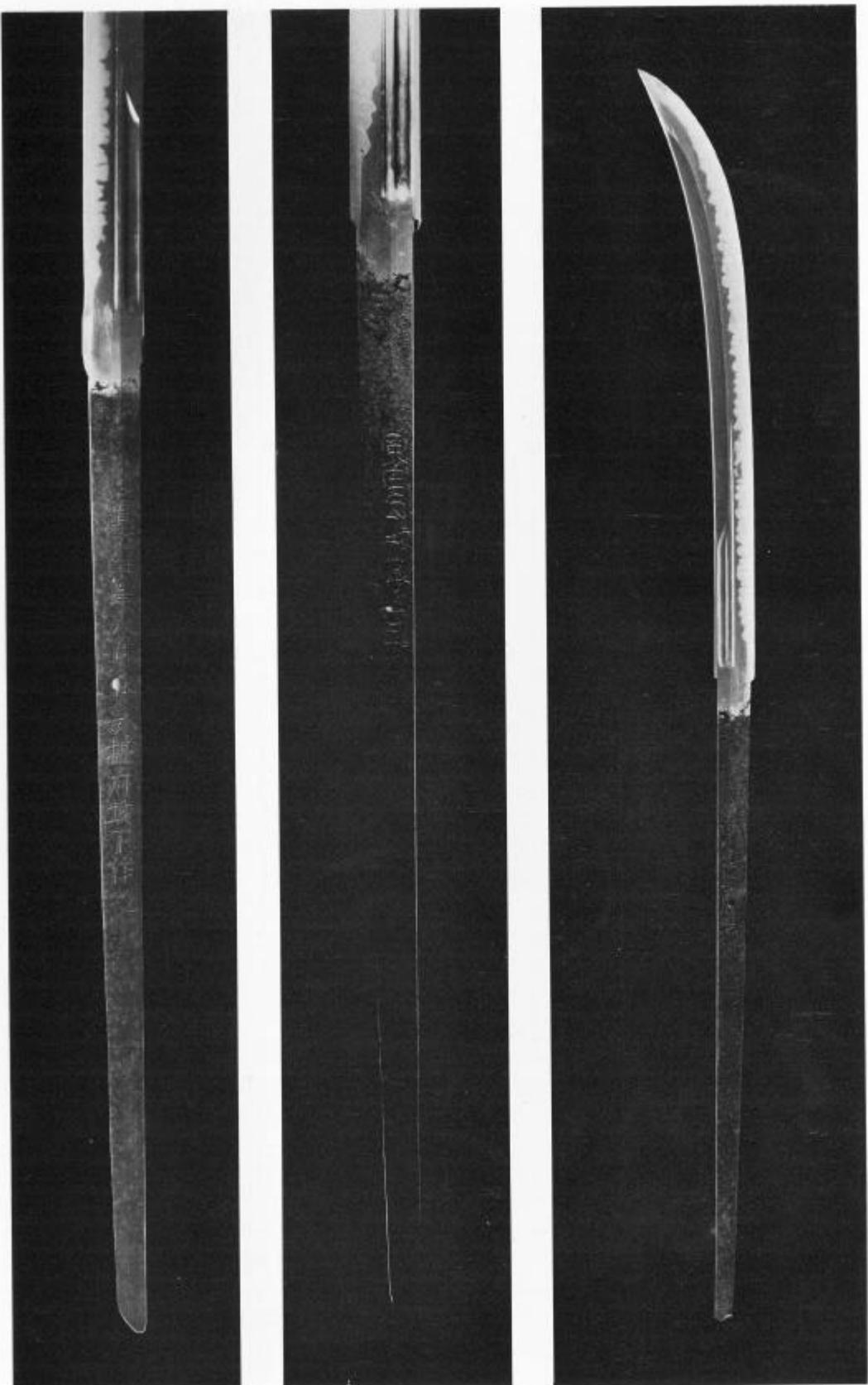
◎ 横井小楠筆 精書

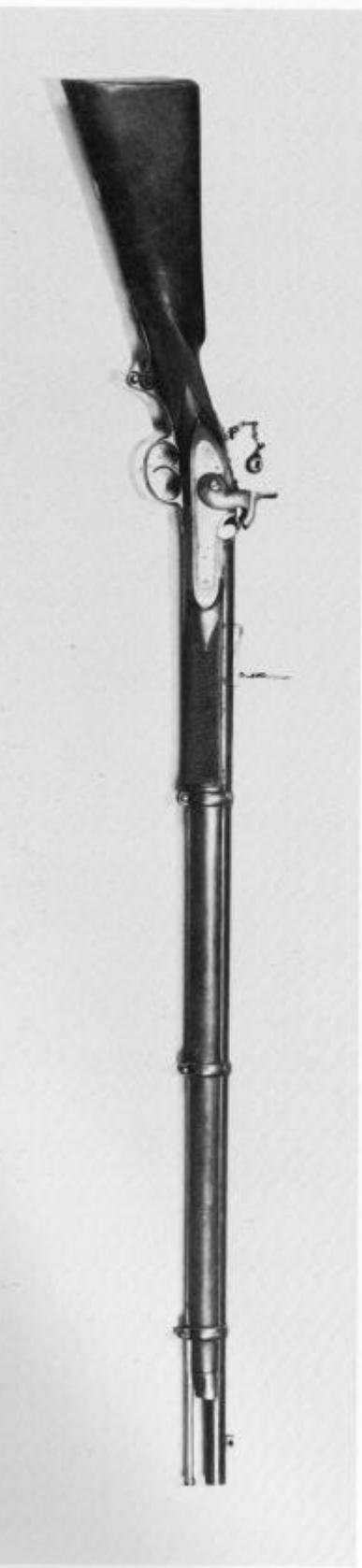
◎ 刀 無銘

◎ 蕤刀銘「長曾祢興正作之」

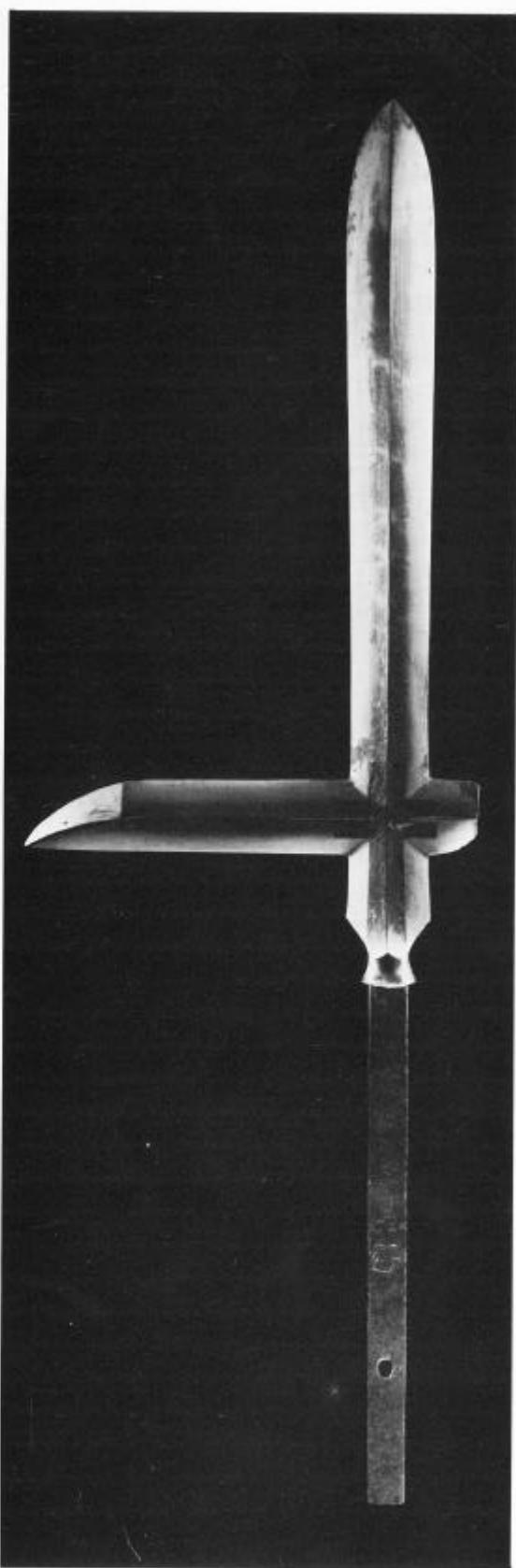


⑮ 鎌刀 銘「栗田口近江守忠綱」

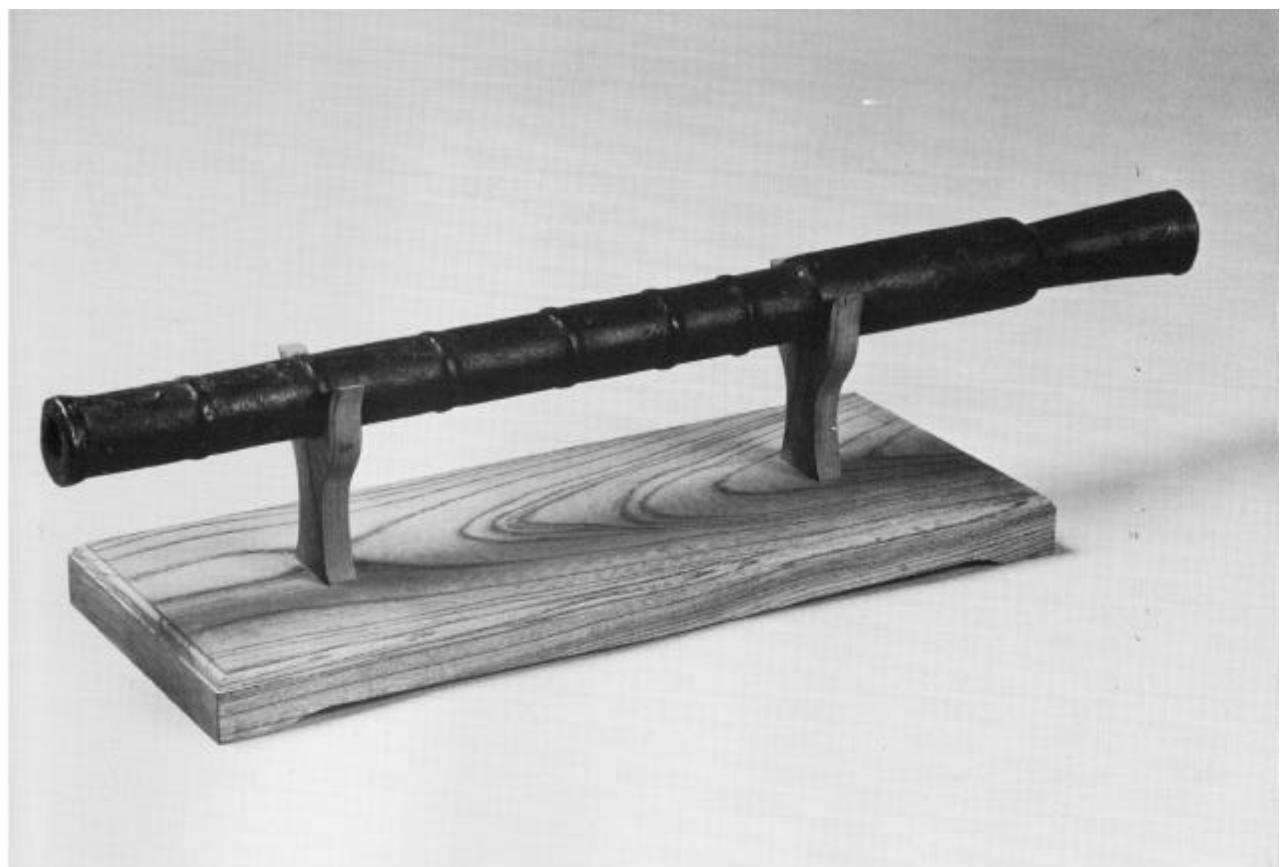




◎片銃槍 銘「広正」



◎エンフィールド銃



◎ 鎏銅勝字銃筒





◎ 銘「万治二年八月作」  
菱紋付界龍文様蒔絵鞘





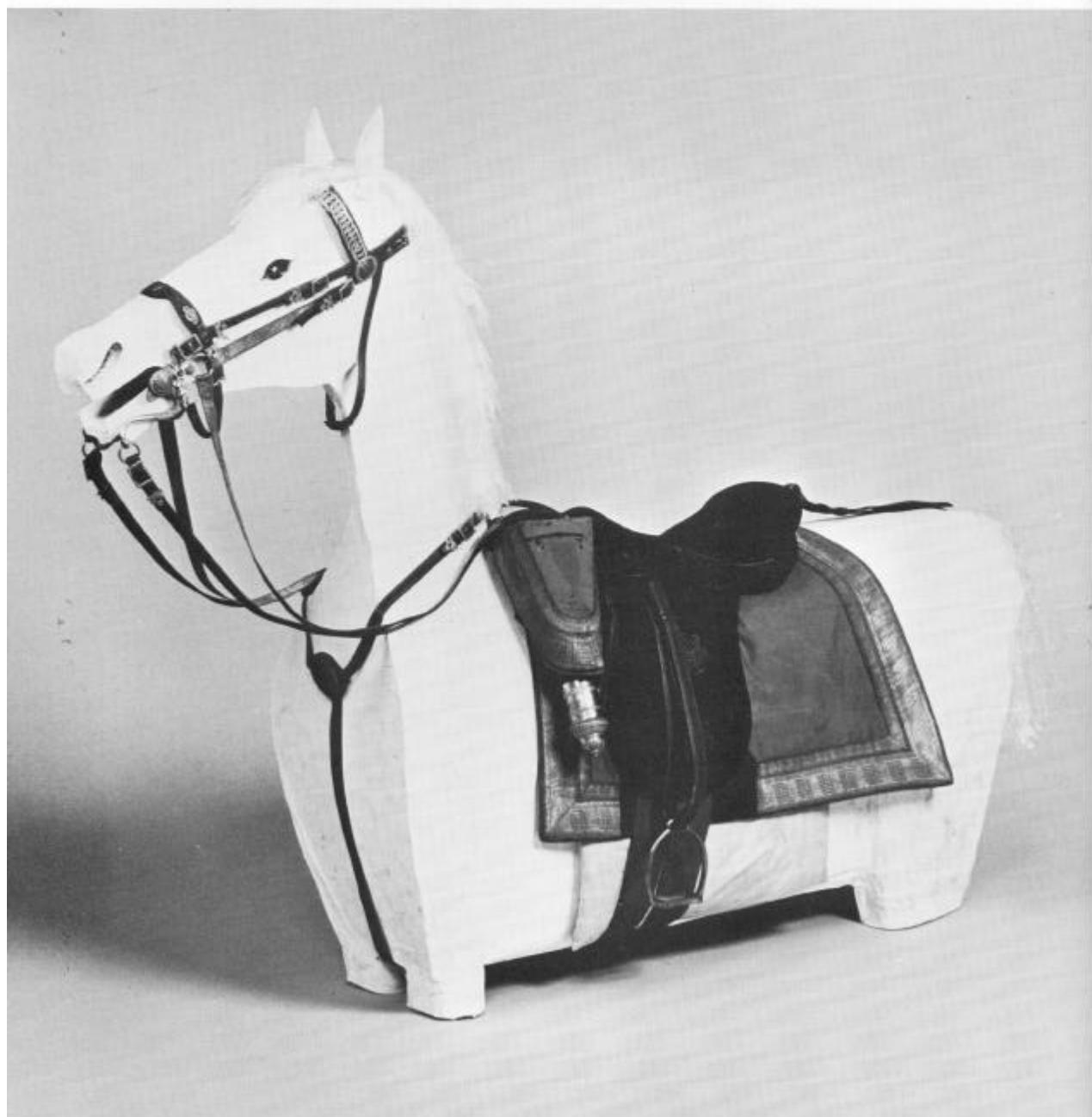
⑩ 鉄製銀波涛に雁模様象眼鏡



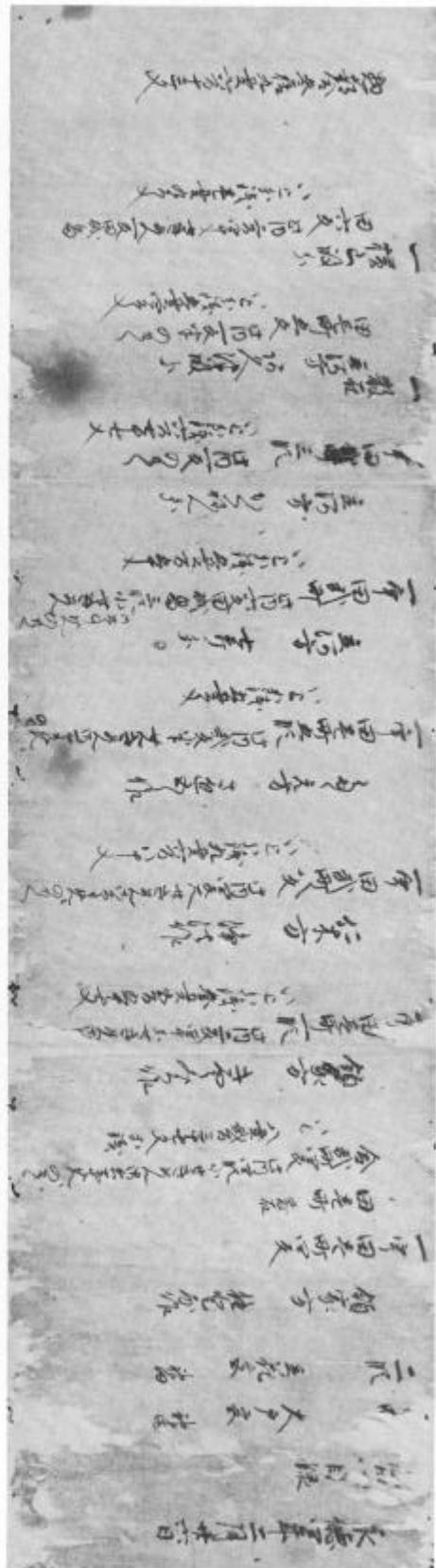
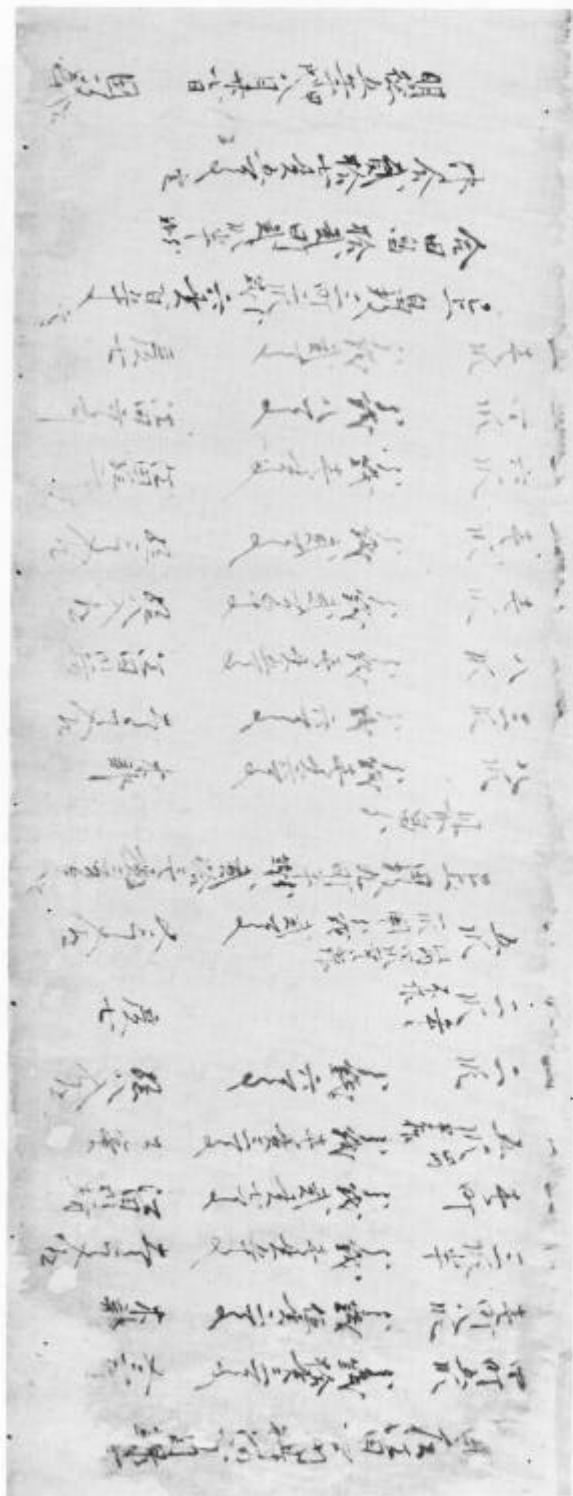
⑪ 鉄製銀野馬模様象眼鏡



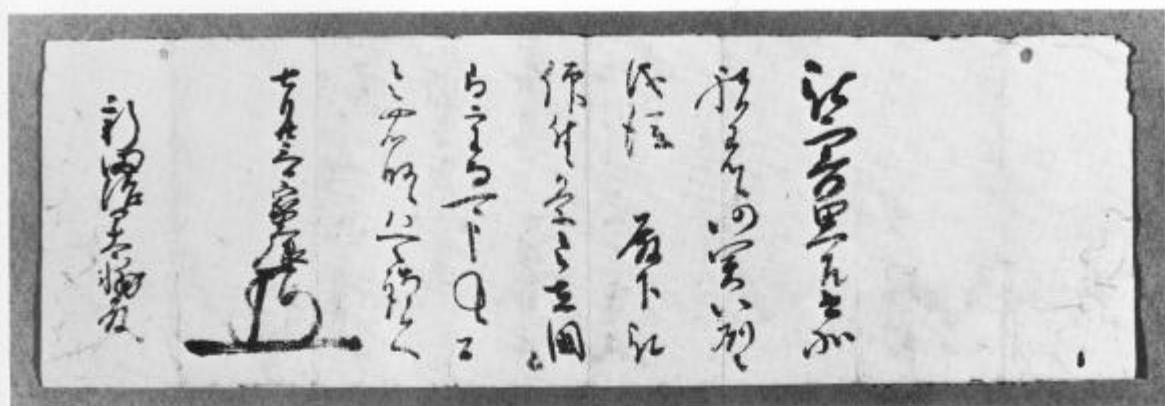
⑩ 洋式軍裝馬具



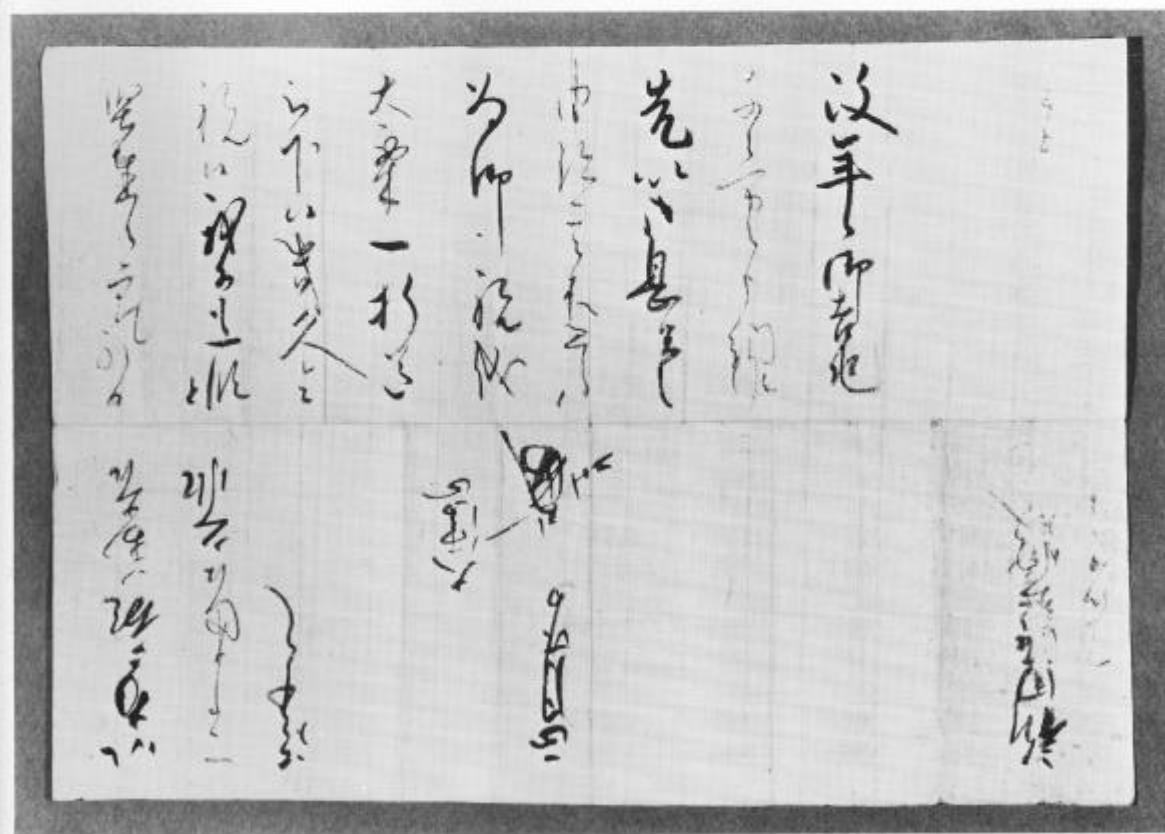




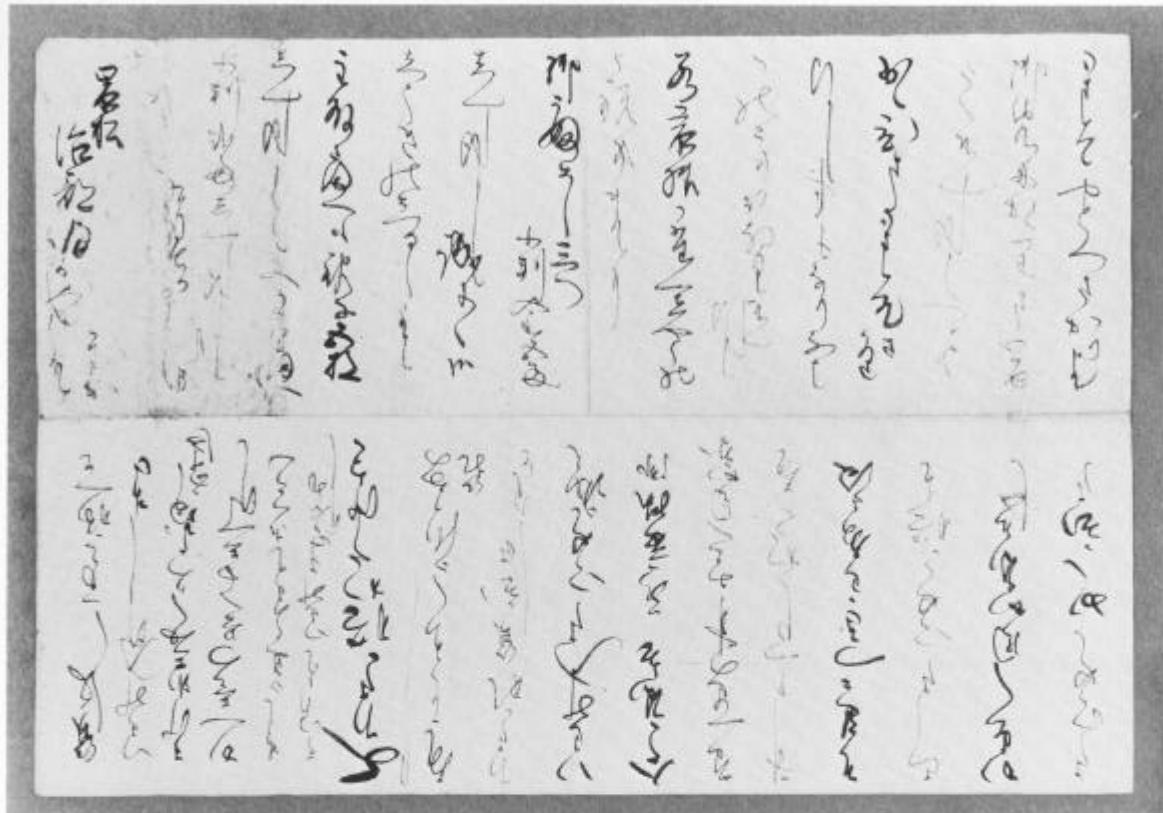
◎(1)正木古文書



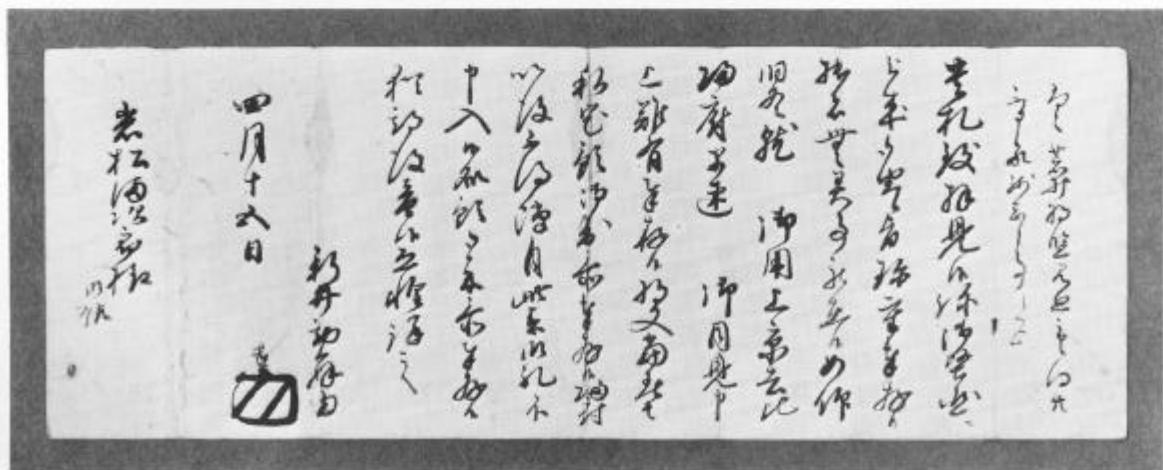
⑩(2) 德川家康折紙状



⑩(3) 慈眼大師（天海）折紙状



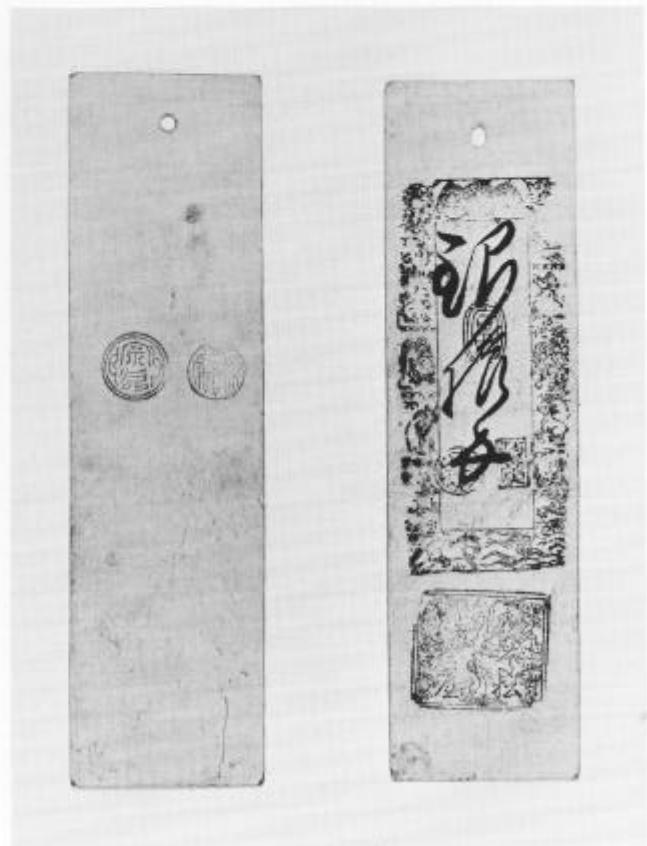
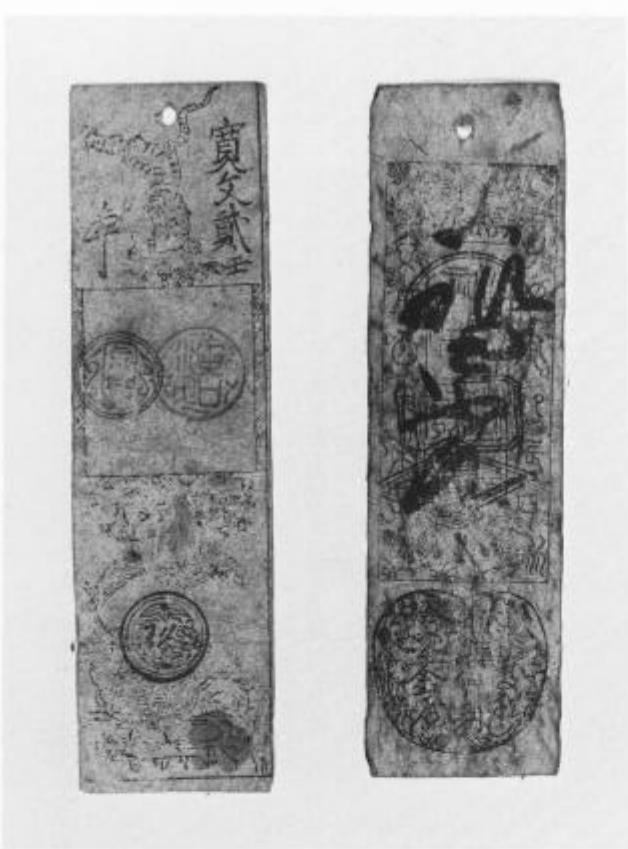
11(4) 春日局折紙狀



11(5) 新井白石折紙狀



⑩ 金屋家文書 (1) 福井藩々札(寛文札)



⑪  
(1) 福井藩々札

(15) (2) 金屋家十・十一・十二代当主肖像画



瑞雲院心嶽徹山居士

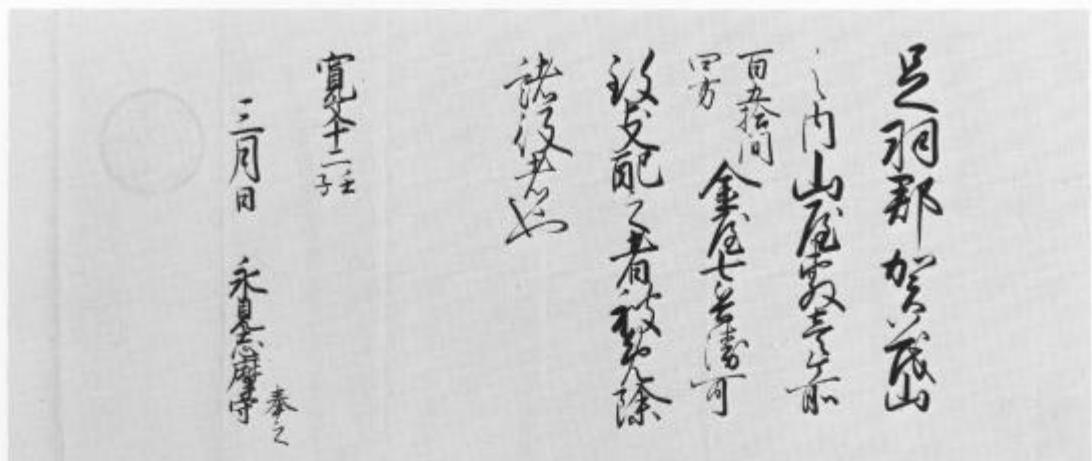


美性院瑞月道故居士



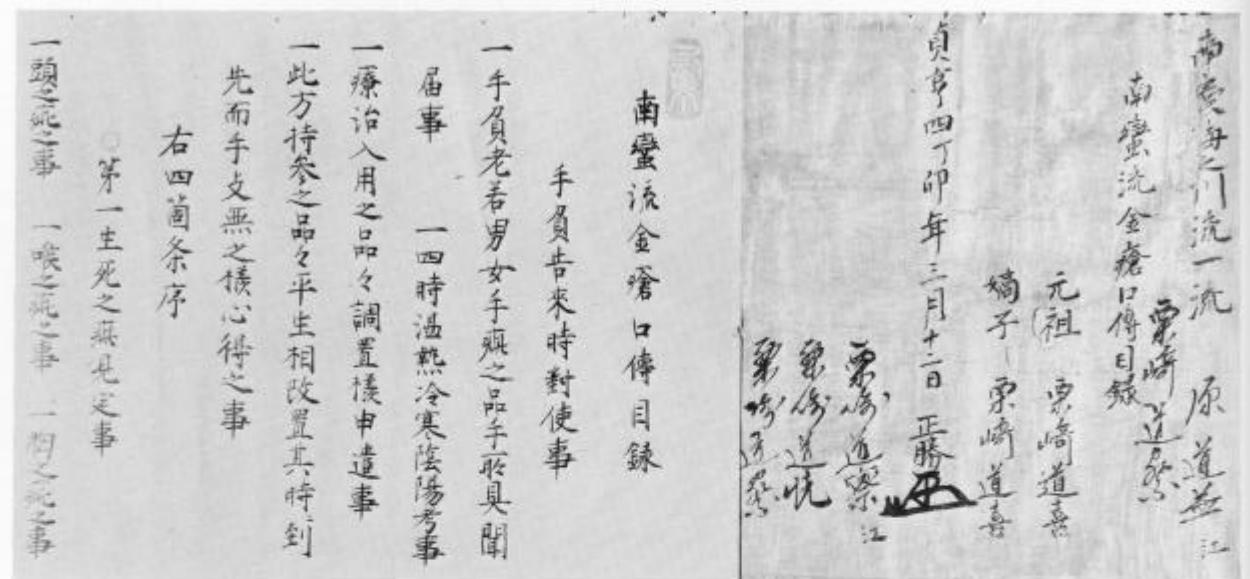
唯心慈龍道瑞侯居士

(3) 福井四代藩主松平光通朱印状  
 (4) 足羽郡賀茂御立山之内被下置御朱印地の絵図・同裏書





⑥ 栗嶠家文書 (1)二代栗嶠道喜筆 「金匱外科一流之事」秘伝書



南蛮身ノ門流一流 原道喜 江  
南蠻流金瘡口傳目錄  
元祖 栗崎道喜  
嫡子 栗崎道喜  
栗崎道喜  
栗崎道喜

貞享四丁卯年三月十二日 正勝

南蠻流金瘡口傳目錄  
手負告來時對使事  
一手負老若男女手瘡之品手於具聞  
届事 一四時溫熱冷寒陰陽考事  
一療治入用之品々調置様申遣事  
一此方持參之品々平生相改置其時到  
先而手文無之様心得之事  
右四箇条序

一頭之死之事 一喉之死之事 一胸之死之事

第一生死之疾見定事

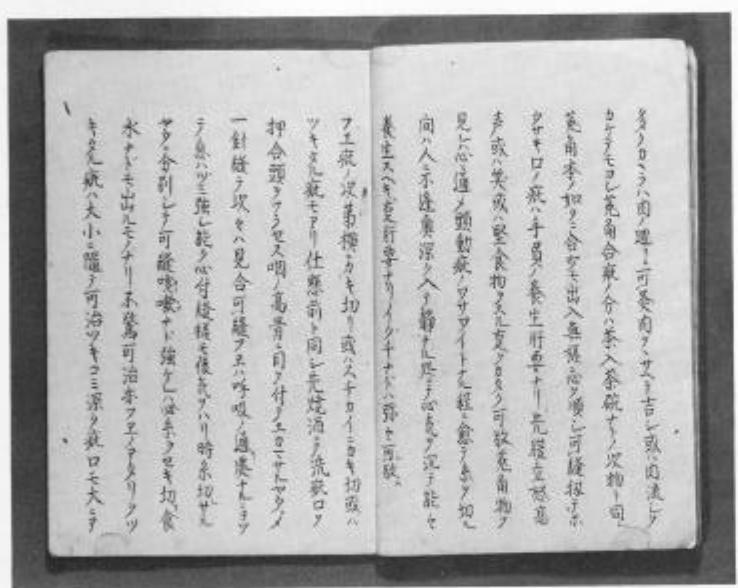
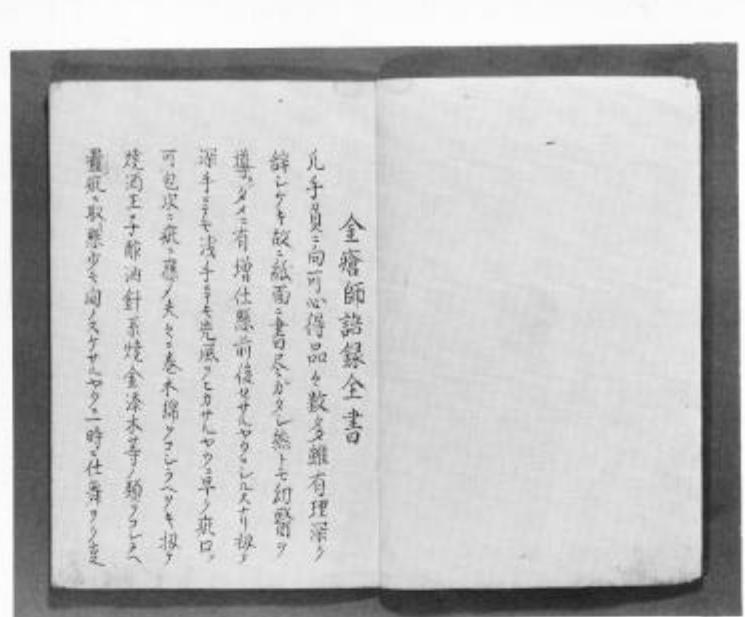
貞享四丁卯年三月十二日 正勝  
元祖 栗崎道喜  
嫡子 栗崎道喜

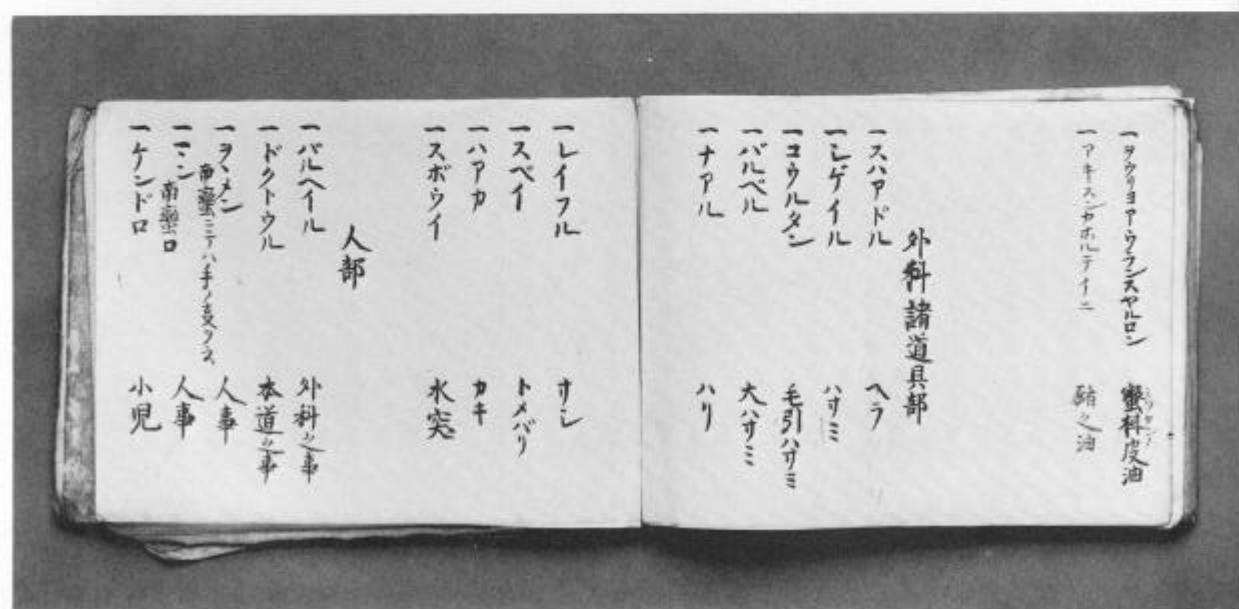
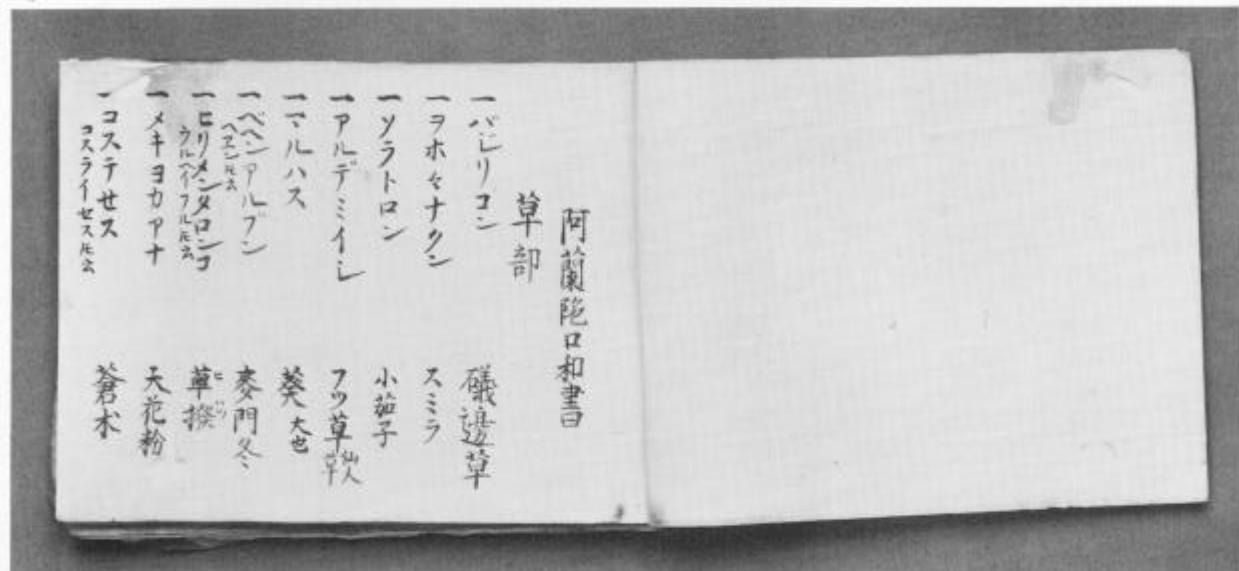
栗崎道喜

師委細免許而以授之即可以矣特其世氏  
以此藝能成而為醫功之司以富貴高威  
之位欲用之然常雖告貧幾朝奉之乏只  
願取日本清上而死先祖之林家雖然遙  
隔海上而欲渡無船欲步無路只愁懲向  
千蠻風而沾雙袖畏無可取茲幸蒙天道  
伸佛之慈惠得報目識貴國之古鄉矣而  
后多年於日本療功如磬玉終年七十歲  
常以其傳相續子孫者也其流今於我二  
代也真理之源流決定無疑者也以因于  
父意之療功奇驗之手段仕懸之分事  
今改作於此書而傳子孫者也

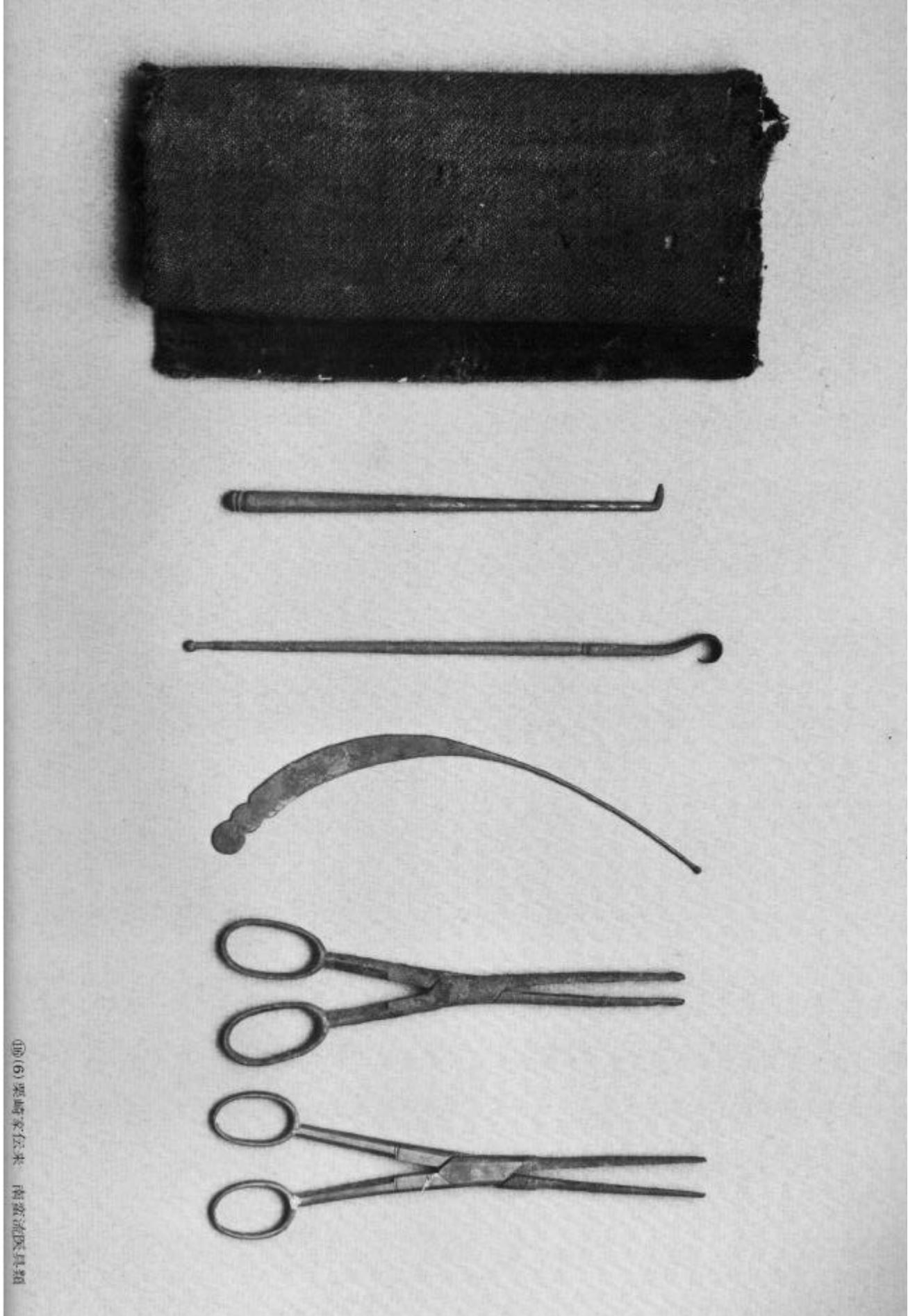
一家流金瘡外科嫡流傳授之趣於爾以口  
授相續者也至干後裔雖為弟子於  
祕傳二字全起於池心而漫不可傳之有也  
仍遺戒如件

(10)(3) 栗崎道喜筆 南蠻流金瘡口伝目録





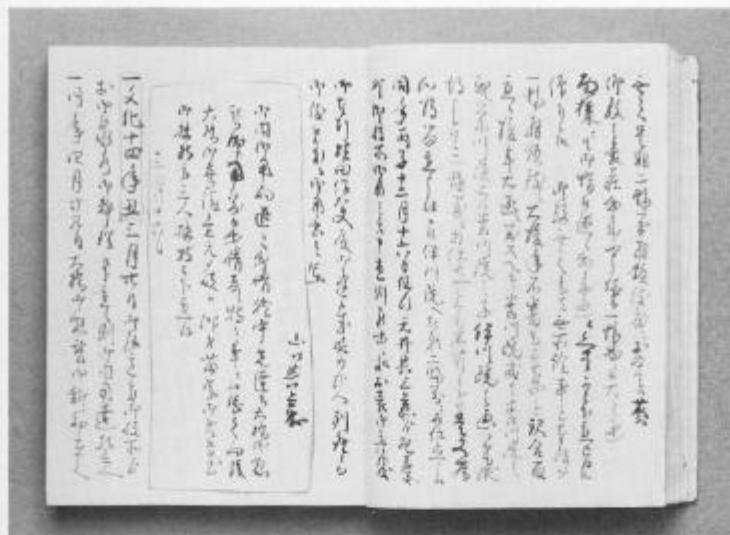
⑩(5) 阿蘭陀口和書



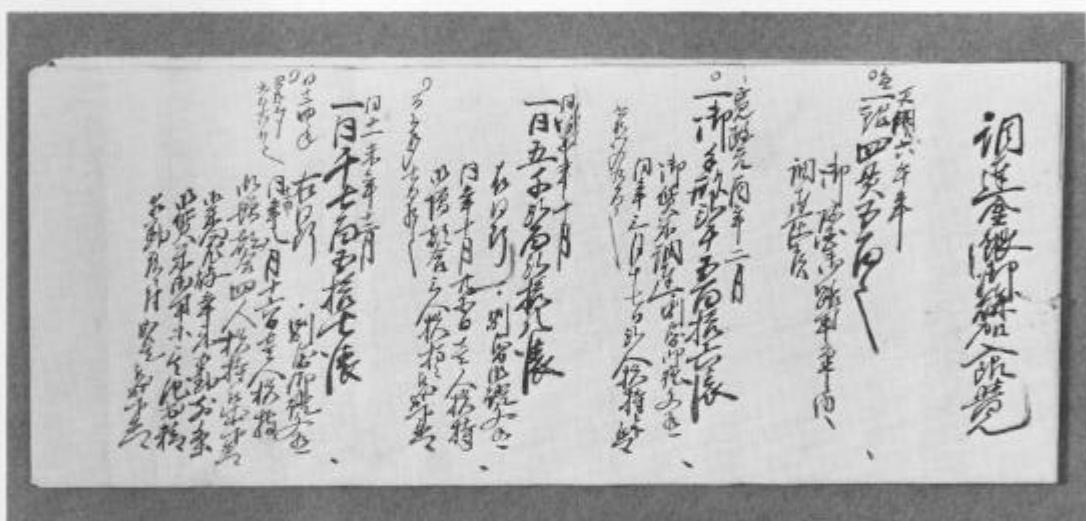
⑩(6) 李崎家伝来 南宋医器具



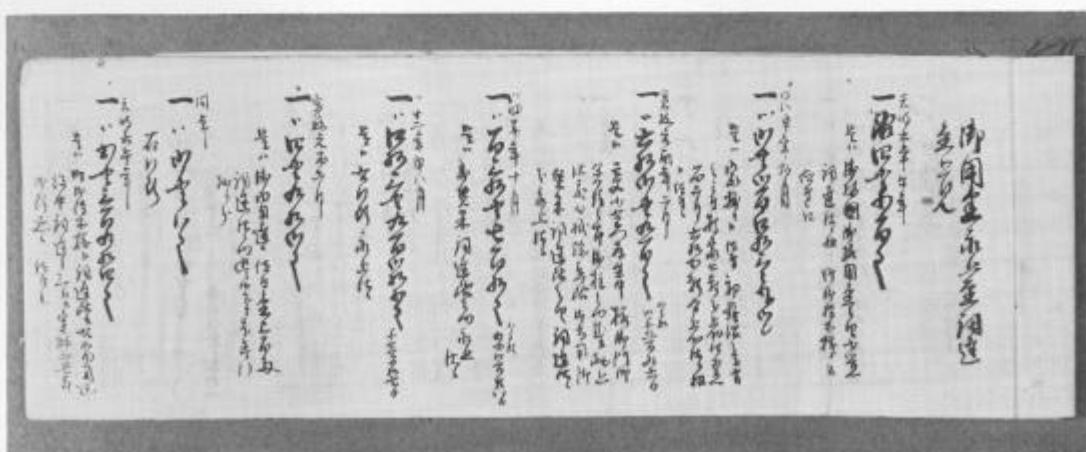
⑪ 山口家文書 (1) 起前太守(春穂) 山口家御成之図



⑪(2) 山口家家譜



⑪(3) 調達金銀・御用金銀・御講加入銀共貲



⑪(4) 調達金穀御達之記

新編和漢書

六

卷之三

水のあらはこまくさ  
うさきすみれ

老と見ゆるはまほのうちと  
にさう。すなはて、

安貞二年五月二日

深草堂

かくはうとうとて  
かくはうとうとて

野亭集

少家書

人情の如きをもつてゐる

是津平生之同所役江寧

卷之三

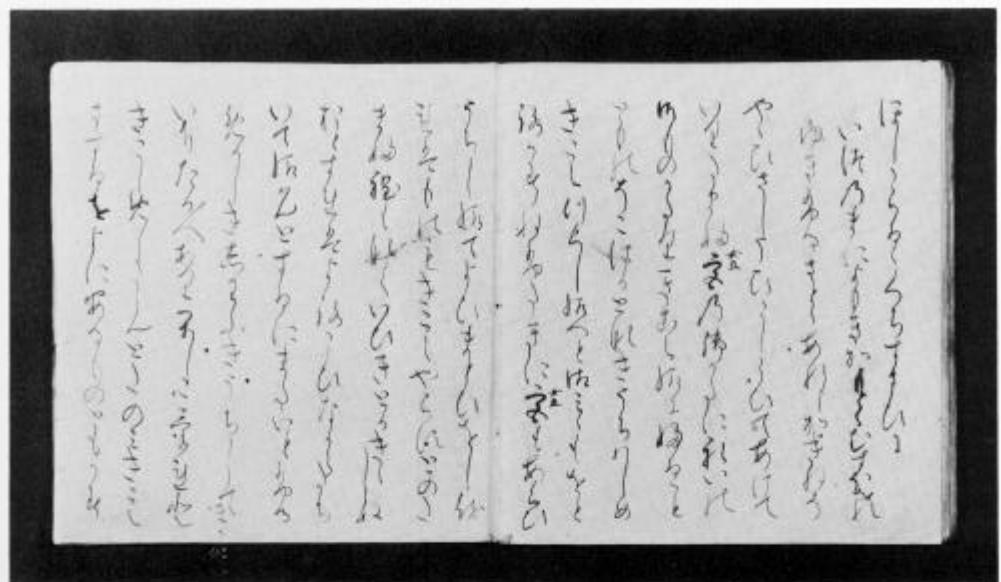
相一見了事矣

卷之三

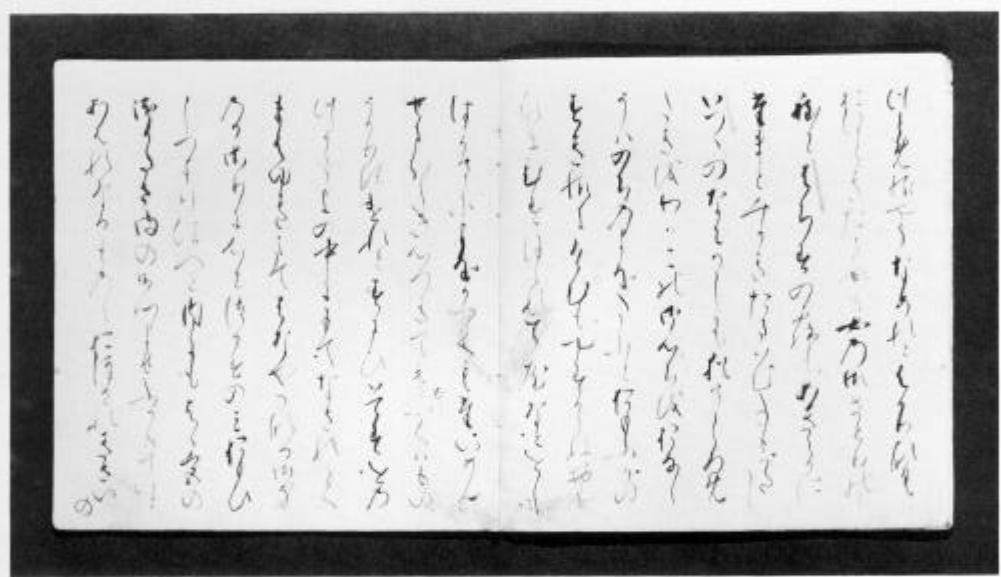
三日不見中大草詩譜

◎ 伝慶雲筆「武部史生秋篠月清集」

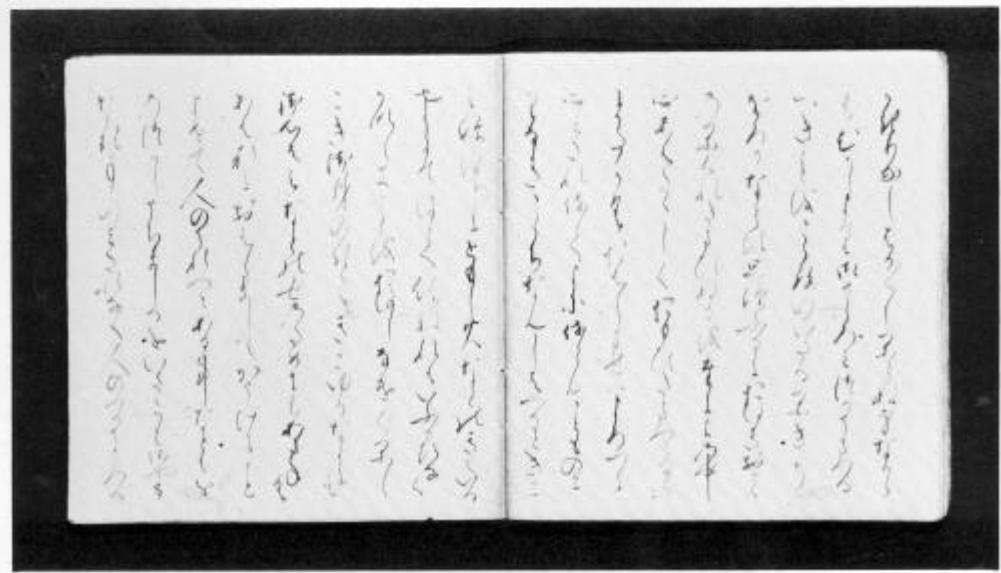
⑩伝後伏見天皇筆  
『源氏物語』あさかほの巻

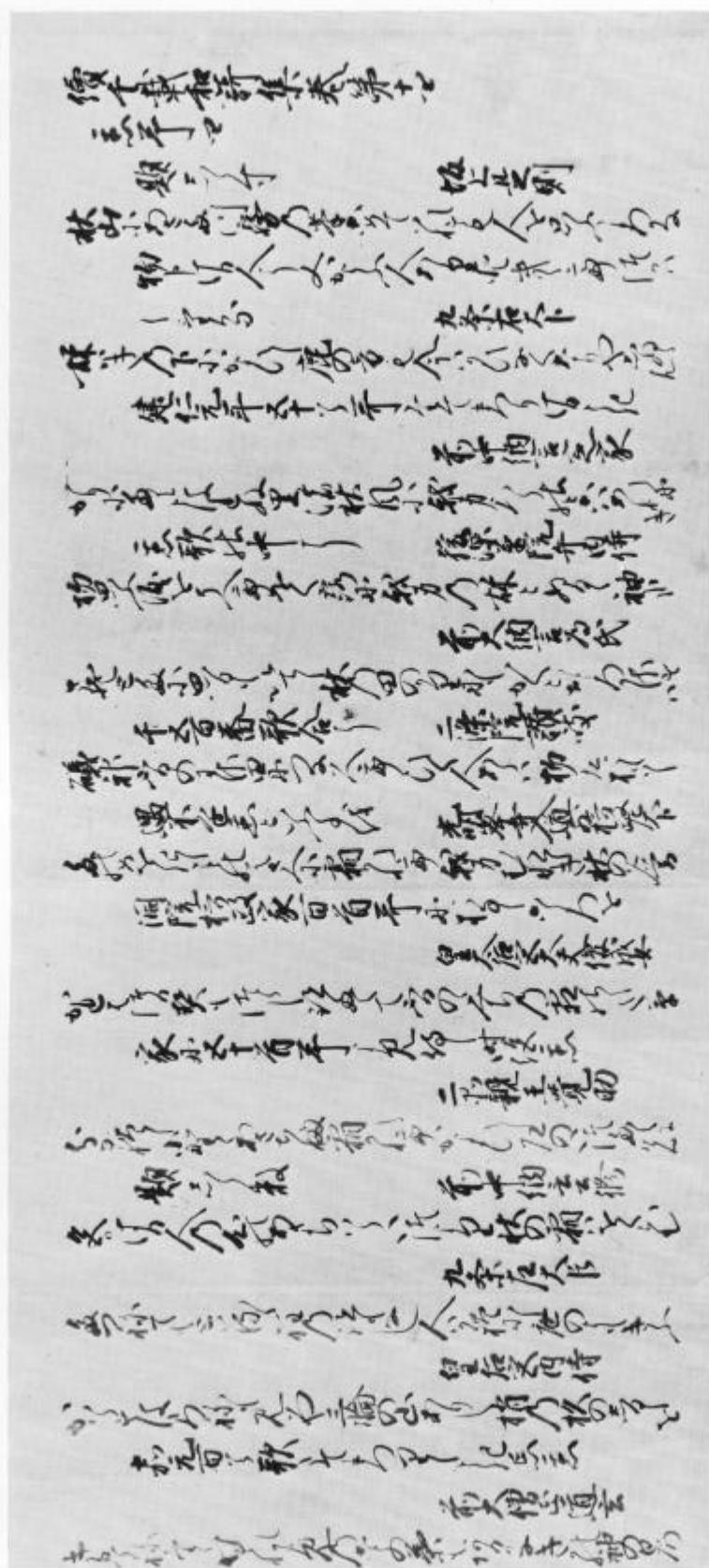


⑪伝二條為定筆  
『源氏物語』にほふ宮の巻



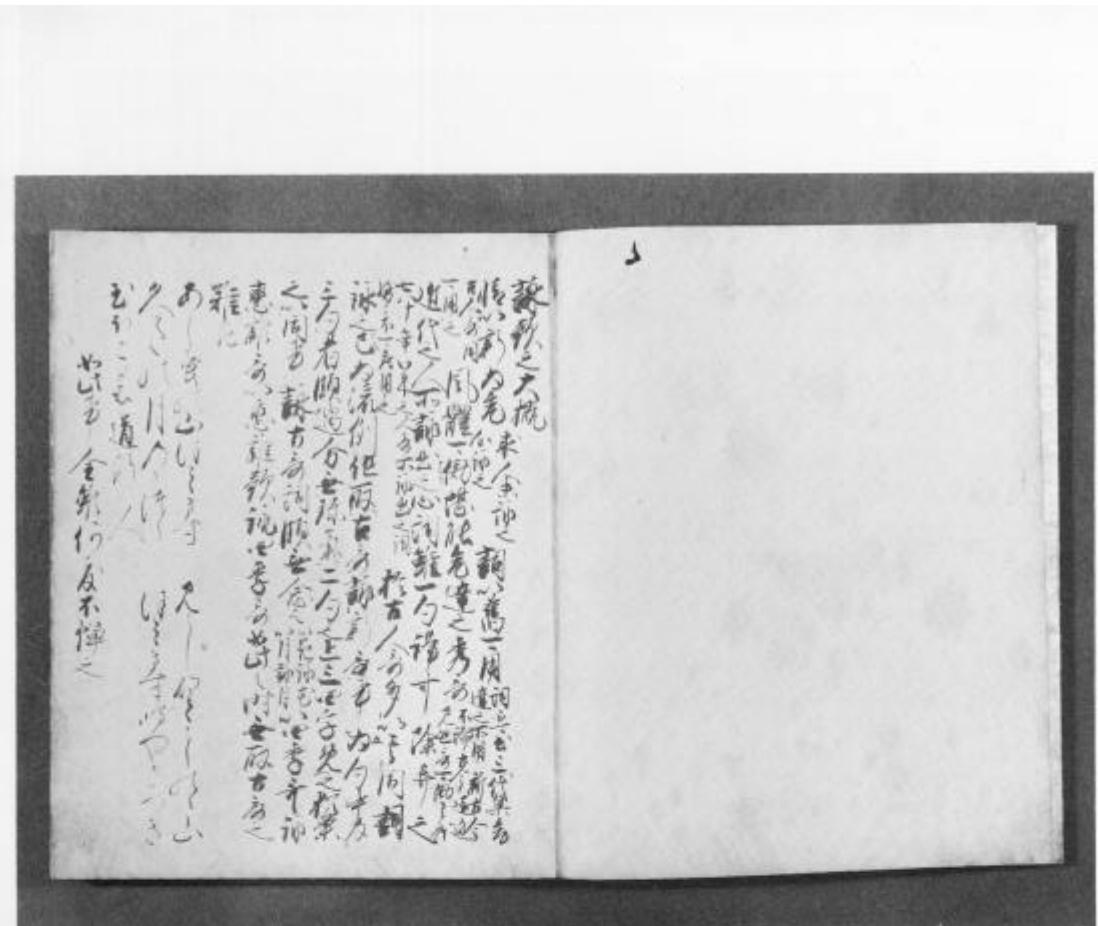
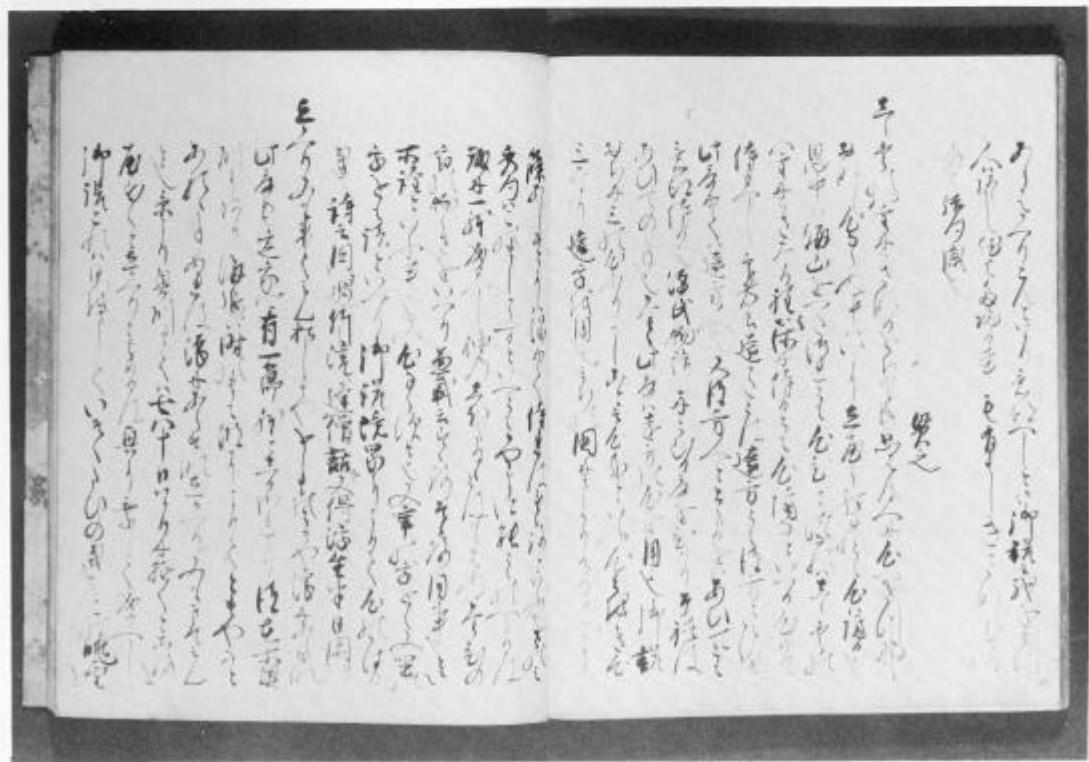
⑫伝二條為定筆  
『源氏物語』うす雲の巻

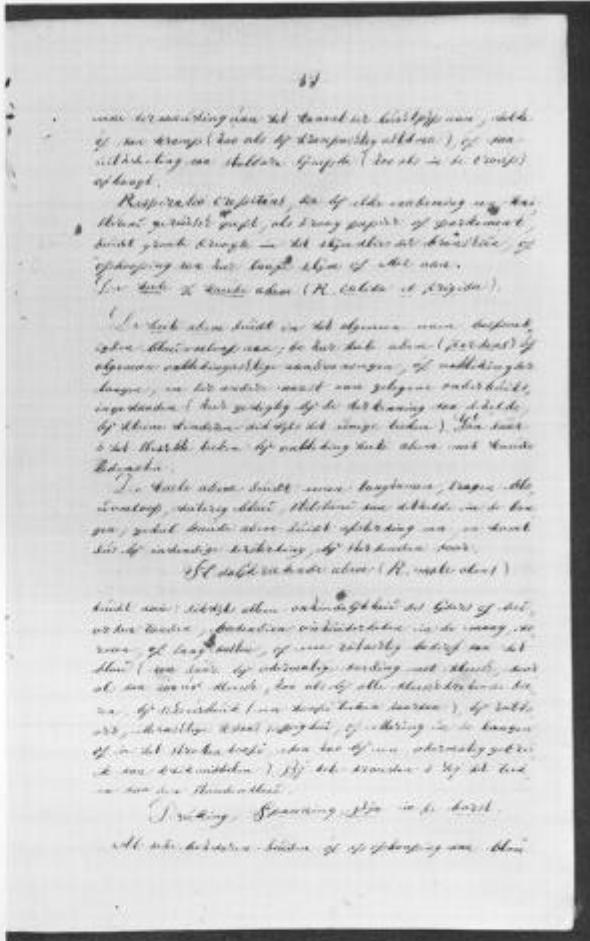
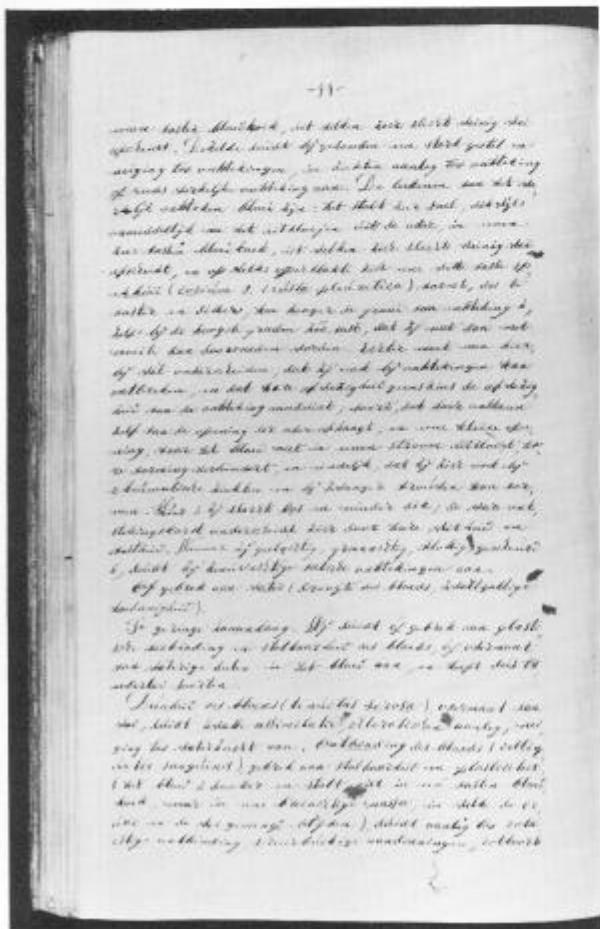




〔四〕伝周興筆『続千載和歌集』

② 伝細川幽齋筆「詠歌之大概」





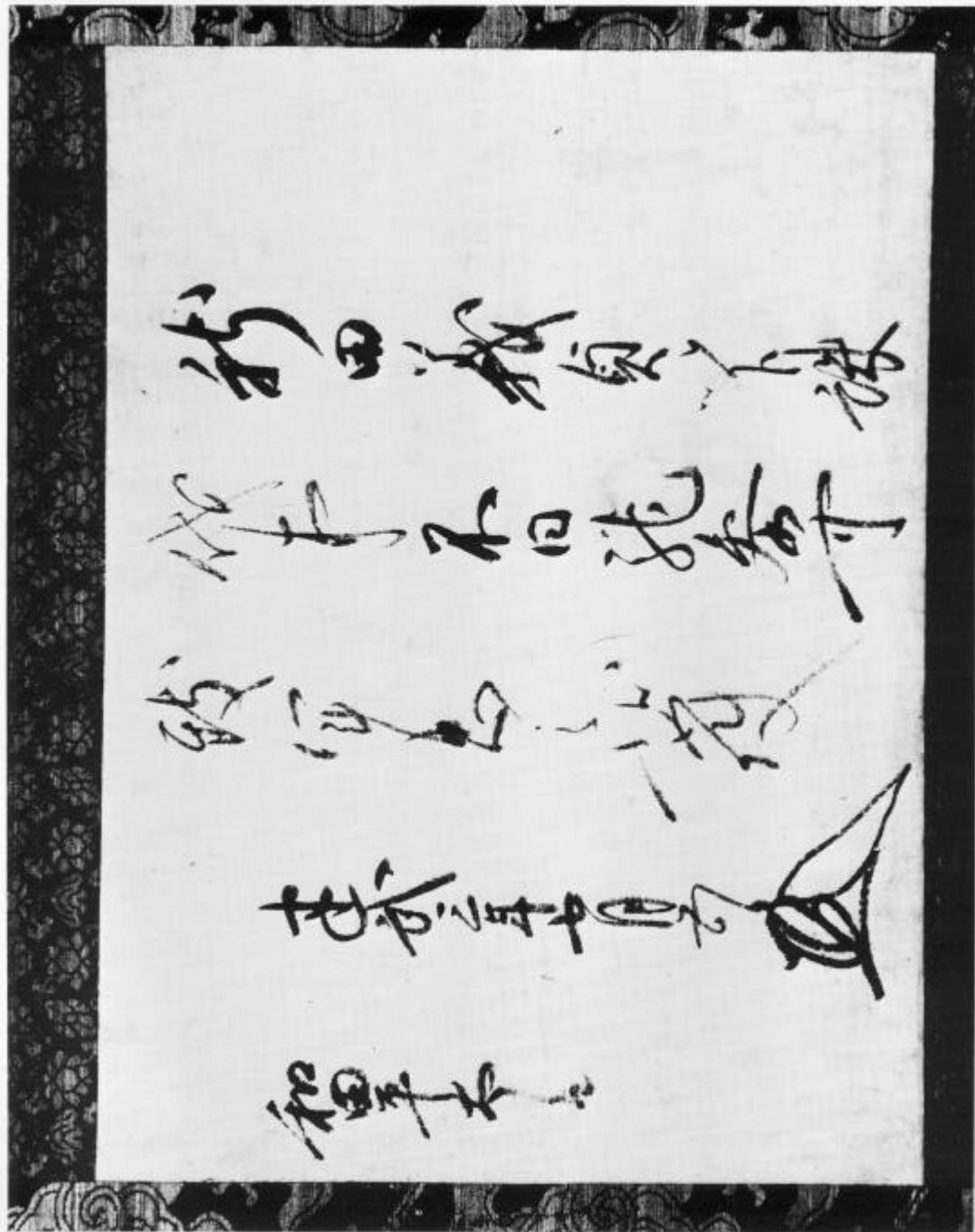
In het begin van den 4<sup>de</sup> jaarg  
van Napel, werd ik op het verhoor van  
deze geestlichen Her. Dr. de Genoote  
vraagd, welke mijne te  
schrijven, om in hys behoeft te  
doorkien; daarna schijnen die taak  
in juncy van den 16<sup>en</sup> jaarg voortgezet  
en thans voltoord, in hyn hand.

April, 6<sup>de</sup> jaarg van Napel.

te Okaka

J. m. T. K. S. te Raga.

v. H. S. S. S.

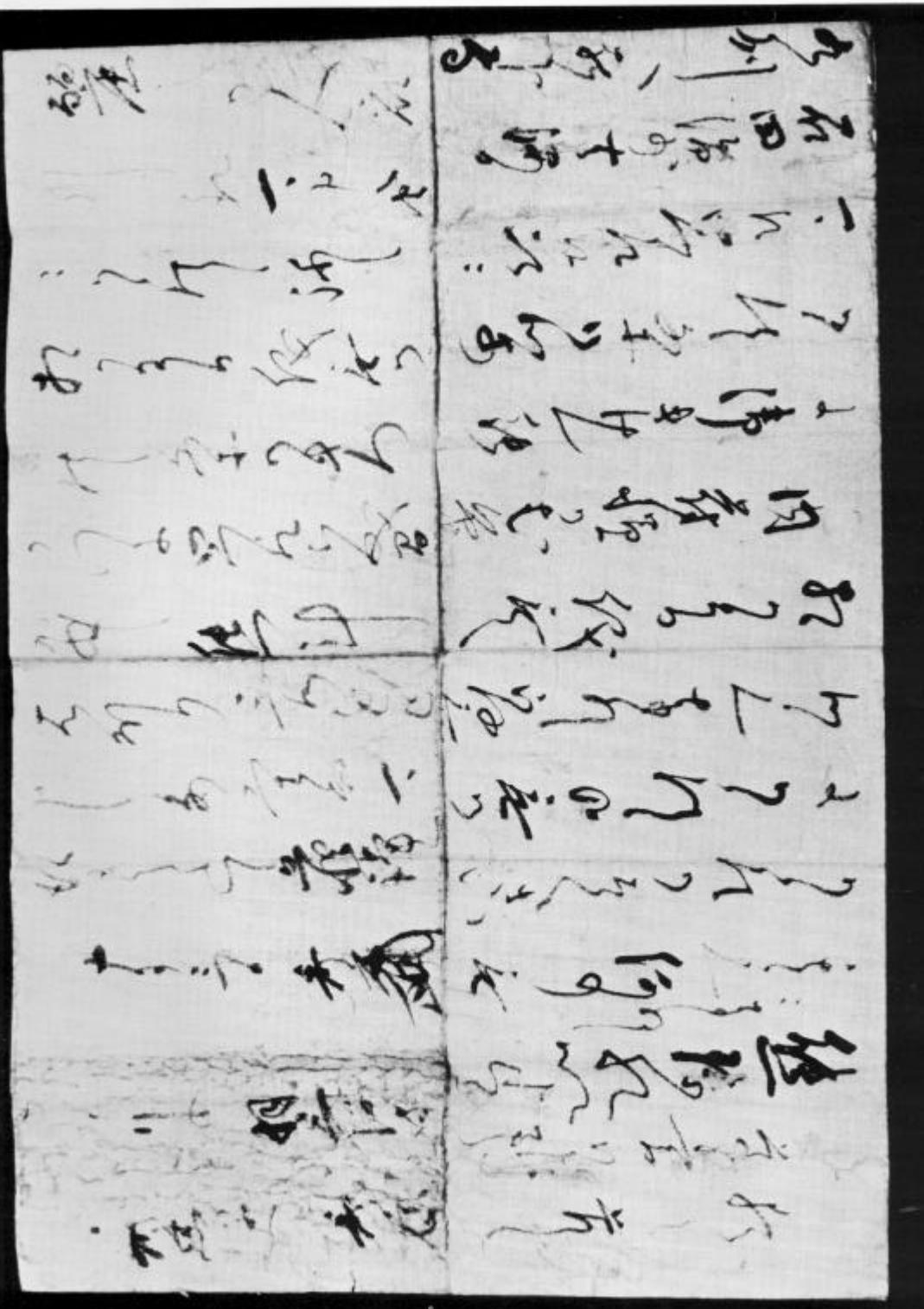


(2) 足利尊氏在判領教書

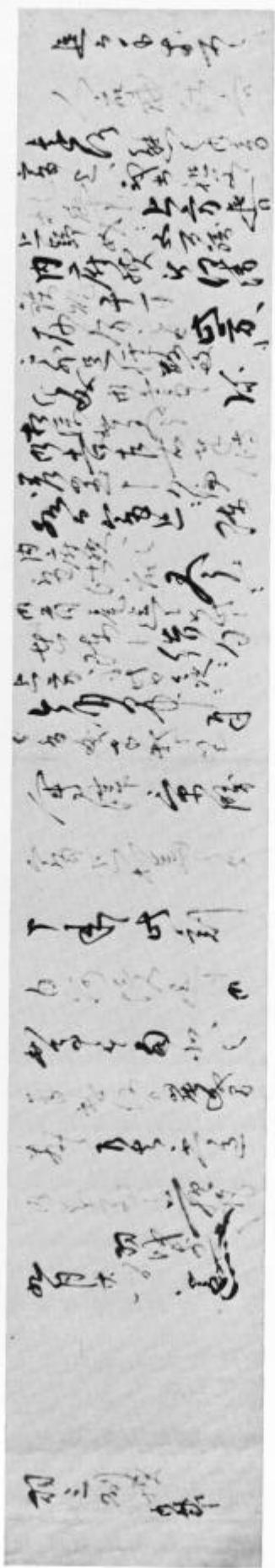




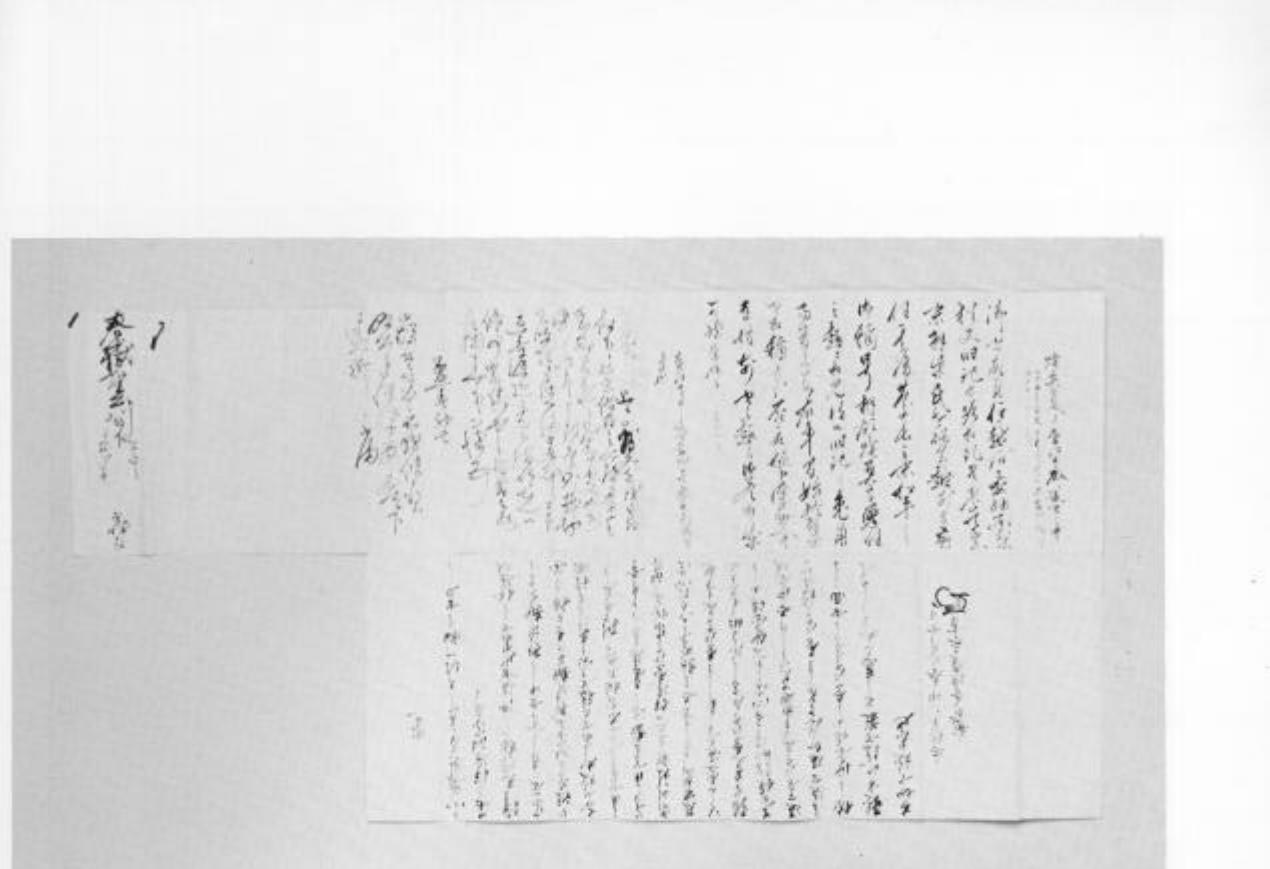
◎ 大乘院門跡尋蕙筆 「越前國相越記」



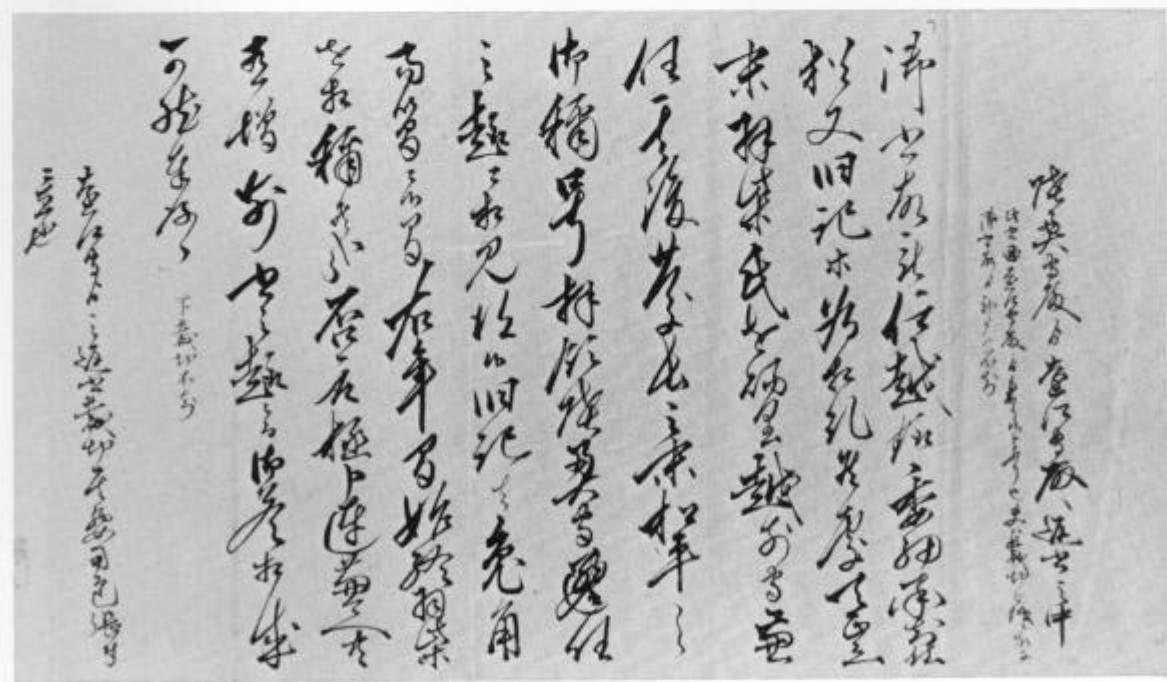
◎德川秀忠宛 結城秀康書狀



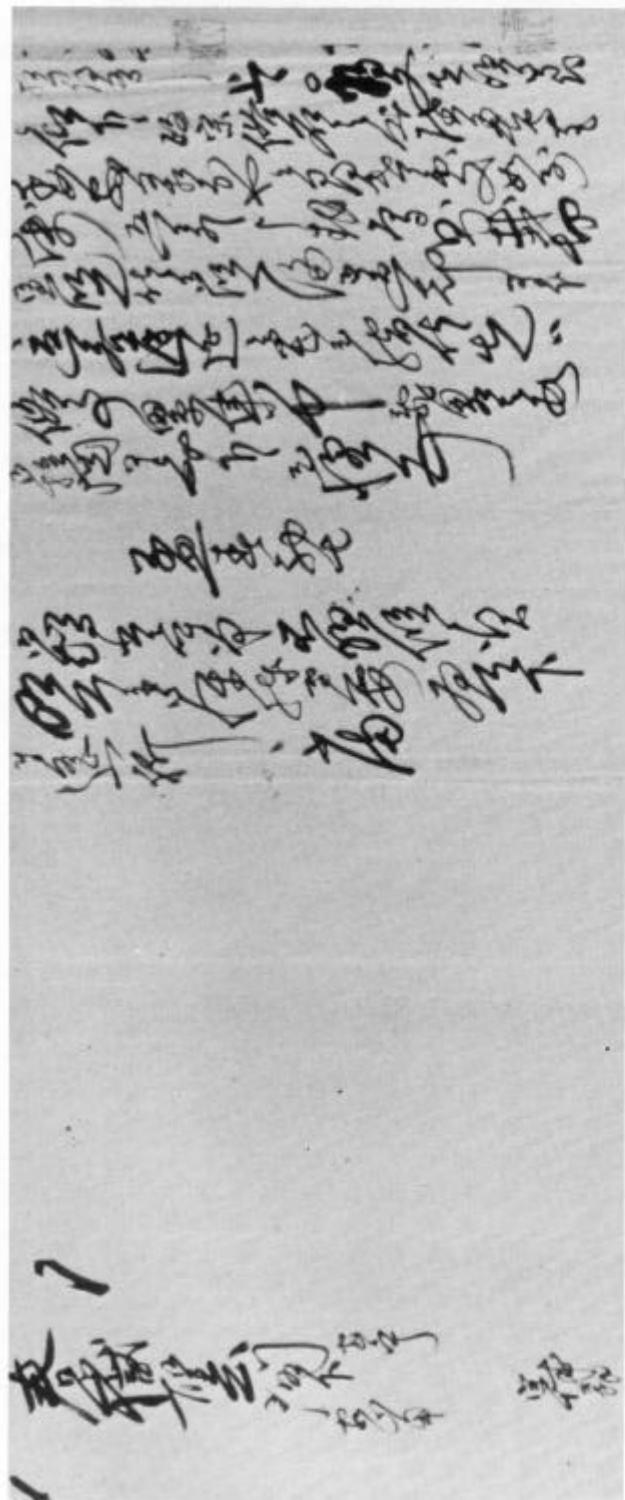
◎ 結城秀康宛 伊達政宗書狀



⑫ 松平春嶽・伊達宗城筆 伊達政宗書狀付属由緒書付類



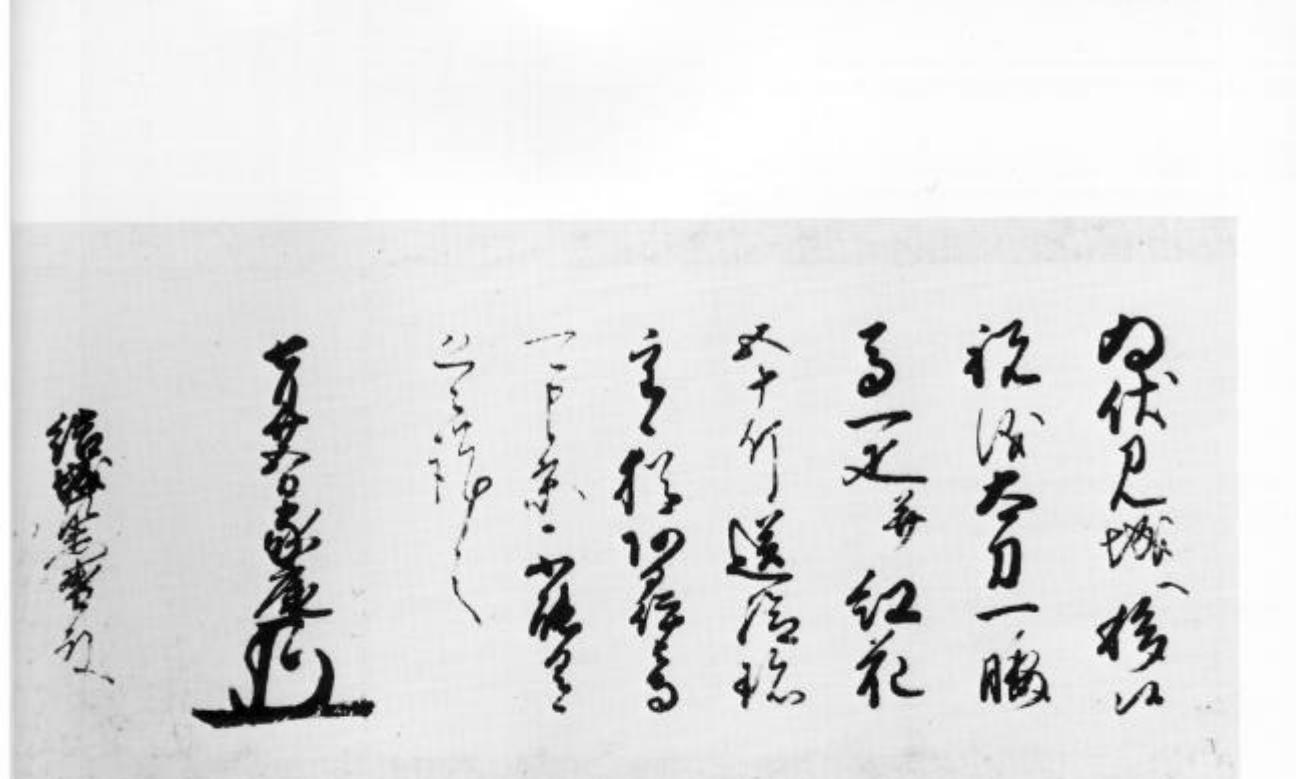
⑬ 同 部分



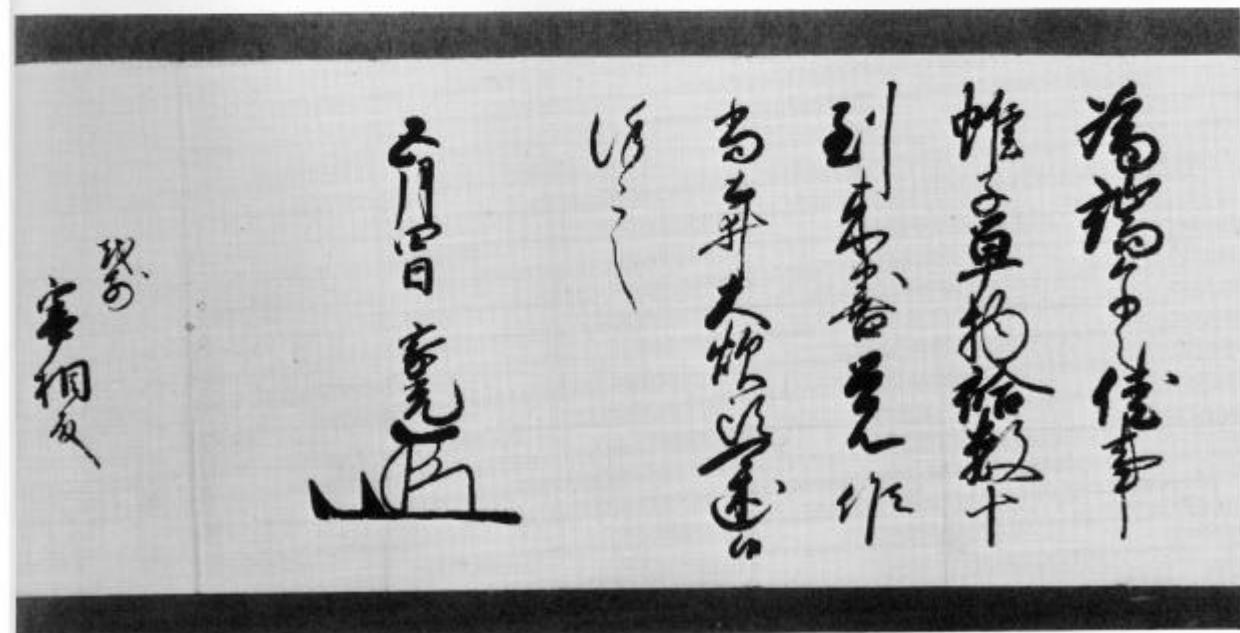
④ 同 部分



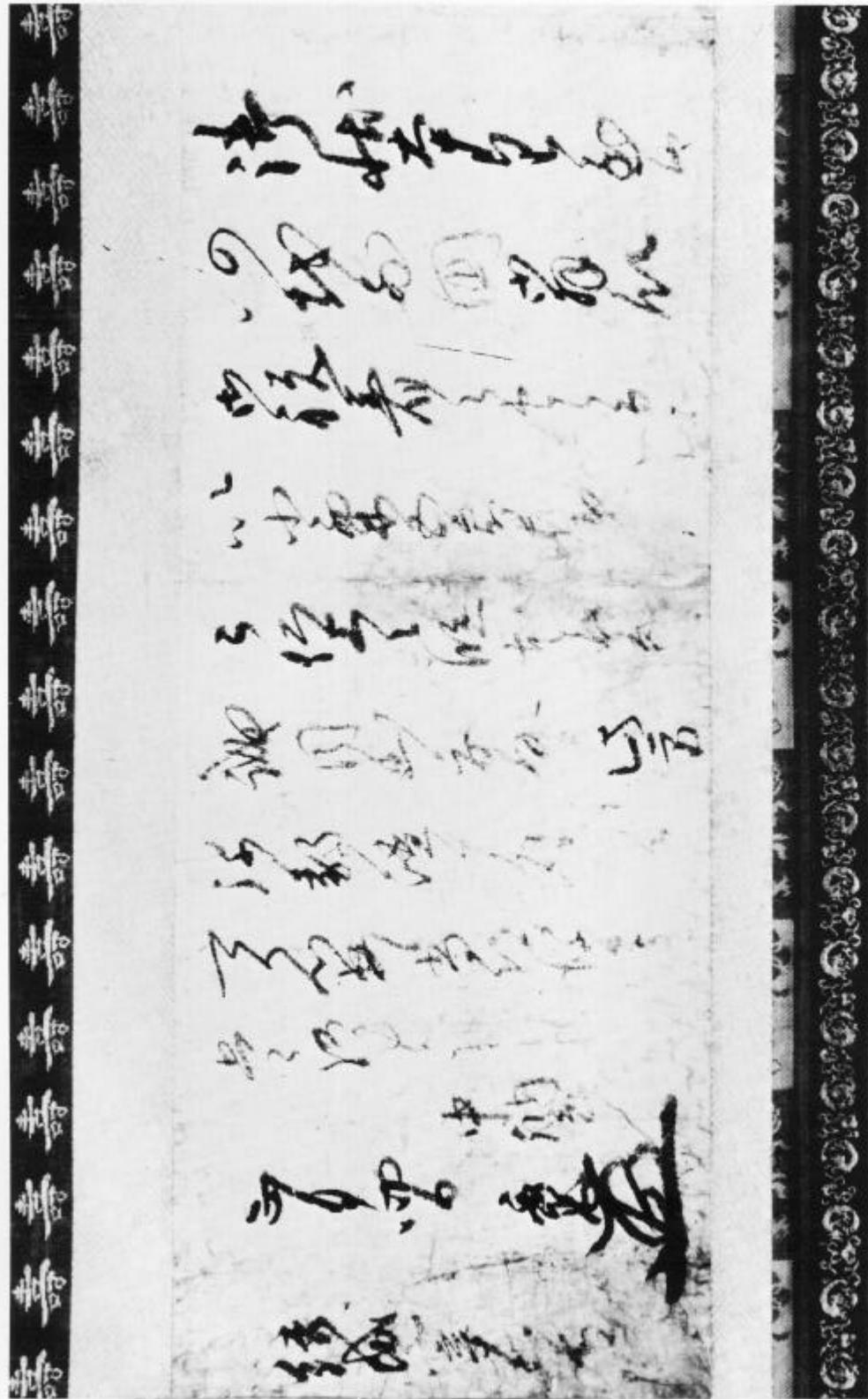
④ 同 部分



⑫ 結城晴朝宛 德川家康書状



⑬ 松平忠昌宛 德川家光内書



德川秀忠書狀



洪武朝

二七九

八拾五通計

古今度量上所用之器物相改度  
上因用被革下而制也其儀

奉行依舊給督覈達六件

卷之三

延喜二年十月十一日

秋光集

卷之三

今立於內  
人拾遺

名媛詩歸 卷之三

卷之三

卷之三

清江先生集

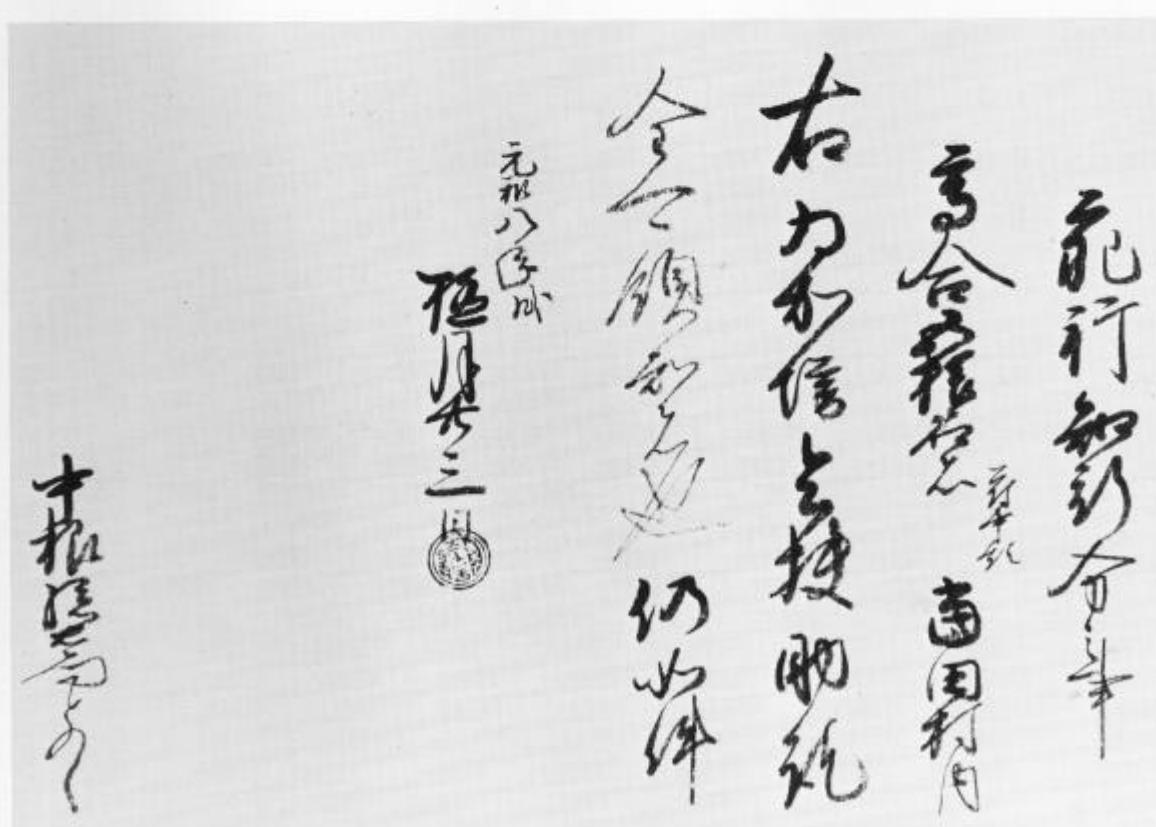
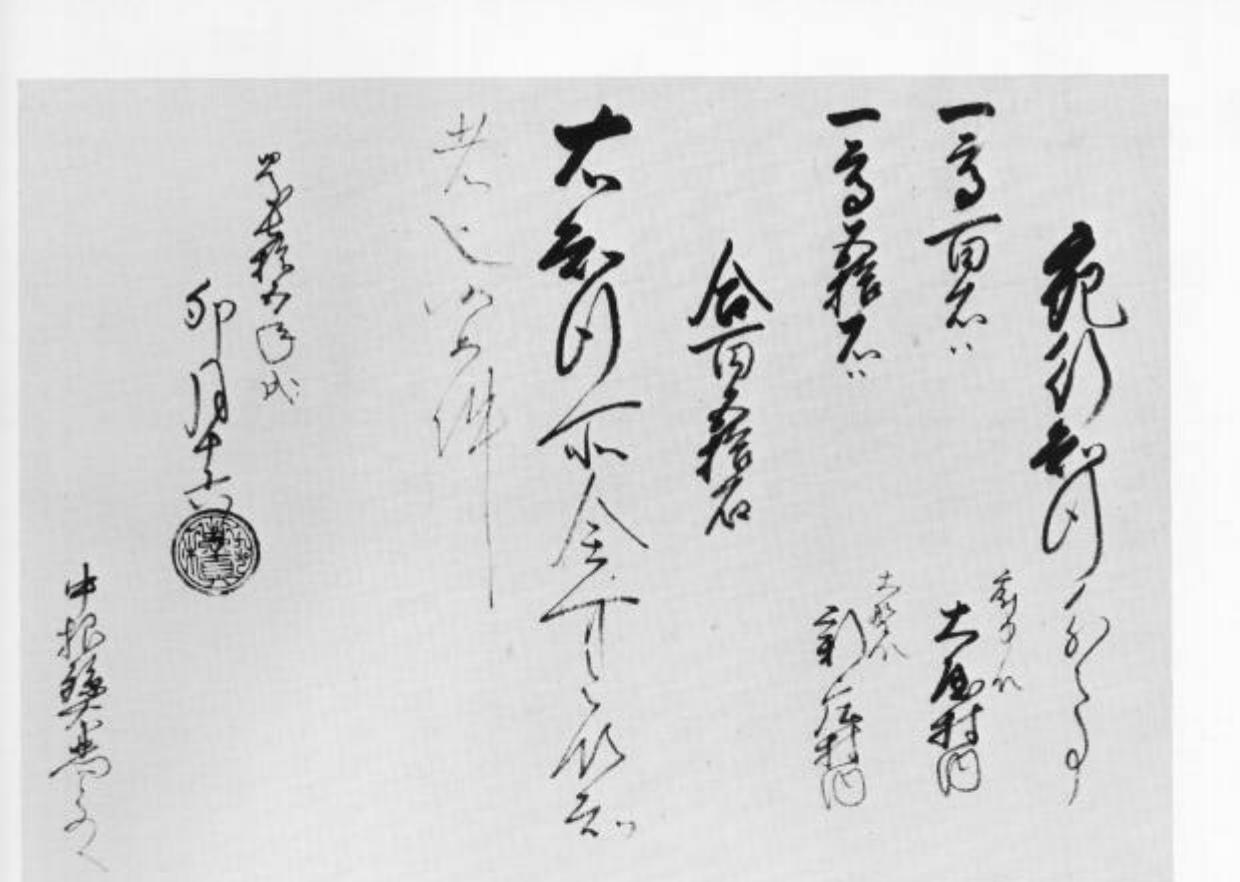
卷一百一十五

外

二千七百直拾石八斗洋六谷二ヶ

卷之三

⑩ 福井十一代藩主松平重昌宛 領知目録



⑩ 中根孫右衛門尉宛 松平忠直宛行狀

解

說

## 解説

### 一、絵画

①重要文化財 阿弥陀二十五菩薩来迎図

絹本著色 一二〇・九×六二・九

福井市 安養寺寄託 一帧

阿弥陀如來が二十五菩薩を従えた来迎図である。正面坐形の阿弥陀如來が上品下生の印相をとり、右下に蓮台を持つた觀音菩薩、左下に幢幡（玉幡）を持つた勢至菩薩が、それぞれ侍立している。さらに、阿弥陀如來のまわりを聖衆が、種々の樂器を持ち、慈容温顔悠々のさまで樂を奏して雲上に乗っている。

本図のように、菩薩が二十五体、正確に描かれている例は、現存するものの中では比較的少なく、その数が一定しないものが多い。勢至菩薩が玉幡を持つているが、これは、「二十

五菩薩和讃」の合掌相と合致しないので、「和讃」成立以前の作と考えられることや、全体にふつくらとした様式から、鎌倉時代初期頃の作と推定される。

なお、阿弥陀如來頭部から上の部分は、後代（時代不詳）に至つて補修が加えられている。

②重要文化財 朝倉敏景・義景画像

絹本著色 約八一・五×四四（義六九・五×三八・一）二幅

福井市 心月寺寄託

「朝倉敏景画像」

朝倉敏景（孝景）は、正長元年（一四一八）四月十九日に

生まれ、文明十三年（一四八一）七月二十六日五十四歳で歿した。幼名小太郎、孝景、政景と名乗り、孫右衛門尉、弾正左衛門尉を称し、法号を一乘寺殿英林宗雄大居士という。文明三年（一四七二）斯波氏の衰えに乘じて越前守護職を獲得し、本拠をそれまでの黒丸城から一乗谷に移した。応仁の乱に際しての活躍も著名である。典型的な戦国大名として名高い。画像の敏景は、有髪僧形（法体像）で禪宗の袈裟をかけ、上疊に右を向き接坐している。

画像は、打込の密な素絹に描かれ、表装裂地は、室町から桃山時代の特徴がよく現れている花鳥模様縫の豪華なものがある。この裂地は、もと義景像にのみ使用されていたものであるが、恐らく当時の小袖等の裂地を使用したものであろう。

なお、製作年代は、室町時代中期頃の作と思われる。  
「朝倉義景画像」

一乗谷朝倉氏最後の城主（五代）朝倉義景の画像である。義景は、天文二年（一五三三）九月に生まれ、幼名孫次郎、初名を延景といつたが、天文二十一年（一五五二）將軍足利義輝の一字を賜つて、義景と改め、左衛門督を称した。天正元年（一五七三）織田信長との決戦に敗れ、平泉寺衆徒の応援を求めたが果たさず、一族景鏡の謀反にあつて、ついに同年八月二十日、自害し四十一歳の生涯をとじた。

画像の義景は、敏景と同様、有髪僧形（法体像）で、上疊に接坐している。

画像は、縦吹寄せ横等間隔の素絹であるが、敏景画像に比べ、打込みが粗い。上部の画贊は、もと一乗谷にあった朝倉

氏の菩提寺心月寺第九世觀溪純察和尚によるものである。

③阿弥陀三尊來迎図

絹本著色 一三四×六一・五

一幅

金津町 笹岡三郎氏寄託

中央に上品下生の印相をとつた乗雲の立像阿弥陀如来が、その右に天冠台に弥陀立像の化仏をつけ、腰を前にかがめ、両手蓮台を捧げた立像觀音菩薩、左に宝瓶をつけ、觀音同様身を前にかがめ、胸前で合掌している立像勢至菩薩を随えた、阿弥陀三尊來迎図である。阿弥陀如來の頭部の螺髮・觀音・勢至の髮は、人毛と思われるものを使用している。また本図と同形のもので觀音・勢至とも跪坐（ひざまづいてすわる）のかたちをとつたものもある。

当弥陀三尊來迎図の製作年代及び作者は不詳であるが、鎌倉期より室町初期に用いられた打込の粗絹が用いられ、また鎌倉期に隆盛した切金技法と室町期以降の特色である泥書が併用され、更に全体に型式化されている点などから製作は、室町初期と推定される。

「普賢菩薩」

文殊菩薩とならんと、釈迦如來の脇侍として知られる。獨尊としても描かれ、文殊菩薩同様その説くところによつて形式が異なる。一般には、二臂の菩薩像で、合掌して白象に乗るものが多い。

普賢菩薩は、法華の行者に現前（目前に現われ出る）する菩薩とされ、また女人救済の菩薩としても信仰をあつめた。

当普賢菩薩は、宝冠・瓔珞・鉄等で身を装飾し、梵篋をのせた蓮華を持ち、蓮台の上に坐し、雲上の白象に乗っている。右側に展示した文殊菩薩図像と同時期の宅磨派の手になるものと考えられる。また二幅対になつているが、恐らく釈迦如來の脇侍として描かれたもので、もとは釈迦如來図像と共に三幅でまつられたものであろう。

維摩問疾の文殊菩薩、四人の侍者を従えた渡海文殊、あるいは、伽藍中の食堂の主尊としてまつられる老相の比丘の相などにあらわされ、その説くところにより、形式も多少異なる。

④文殊菩薩・普賢菩薩図像

絹本著色 一〇三・六×四一・二

大野市 明石清一氏寄託  
双幅

「文殊菩薩図像」

文殊菩薩は、古くから普賢菩薩と共に、釈迦如來の両脇侍の一尊と考えられ、智慧第一の菩薩と説かれるため、菩薩部の中で、觀音・普賢菩薩に迫る盛んな信仰を得てきた。

宅磨派は、平安時代末期の宅磨為遠を祖とする絵仏師の一派である。その画風は、一般的にいって、従来の仏画の伝統的な画風を打破り、外来の新しい様式を取り入れた進歩的な要素が濃い。鎌倉初期より室町時代初期に隆盛したが、その後次第に衰微の傾向をたどった。

(5) 狩野探幽筆 寒江独釣図

絹本墨画 三八×九〇

福井市春嶽公記念文庫寄託

「狩野探幽」

慶長七年（一六〇二）狩野孝信の長子として生まれる。名は守信・探幽齋・白蓮子・筆峰大居士と号し、宮内卿法印を称す。鍛治橋狩野家祖、はじめ狩野興以に学び、更に和漢諸家の画法を学んで、狩野家の画法に新技术を導入し、狩野家中興の祖と仰がれた。

慶長十七年（一六一二）徳川家康に謁し、同十九年には二代將軍秀忠の座前で、海棠（中国原産のイバラ科落葉灌木）

下の猫を描き、祖父永徳の再生なりと激賞されたという。寛永三年（一六二六）後水尾天皇が二條城に行幸の際、御座間の高壁画を制作、同十三年「東照宮縁起」を描いて、法眼に叙せられ、宮内卿の称を許された。同十九年には皇居紫宸殿賢聖障子を、寛文二年（一六六二）には後水尾天皇の御肖像を描いて、筆峰大居士の印を賜つた。

このように、探幽の足跡は、江戸狩野諸家中で、最も重きをおき、江戸期画壇中の地位をゆるぎないものとしたが、延宝二年（一六七四）十月七日、七十三歳で歿した。

(6) 阿川淇園筆 孔雀の図

絹本着色 一二五・五×六〇・九

川崎市 山田卓爾氏寄贈

一幅

この絵が描かれた宝暦五年（一七五五）頃、京都では福井藩儒清田僧叟が詠じた「遊僊詩」が、非常な評判となり、広く愛吟されていた。淇園が友人僧叟のため、その「遊僊詩」の内容を絵に表し、僧叟に贈呈したのが、この「孔雀の図」である。

題贊は、淇園の弟咸章である。

この絵が描かれた宝暦五年（一七五五）頃、京都では福井藩儒清田僧叟が詠じた「遊僊詩」が、非常な評判となり、広く愛吟されていた。淇園が友人僧叟のため、その「遊僊詩」の内容を絵に表し、僧叟に贈呈したのが、この「孔雀の図」である。

(7) 谷 文晁筆 叢竹の図屏風

紙本（金地）墨画 一五一×三三三一

福井市春嶽公記念文庫寄託

「谷 文晁」

谷文晁は、宝暦二三年（一七六三）御三卿の一田安家の臣谷麓谷の子として生まれた。名は正安、通称文五郎。文晁はその字で、文朝・師陵・一如居士・無二庵・画学齋・蝶齋などと号した。幼少より絵をよくし、はじめ狩野派の画法を学び、さらに清人の画風や南画々法を修業した。文晁の画風は、北画を主体にして南画を折衷し、西洋画の遠近法を取り入れた

作品もあり、江戸南画に新技法を導入して一家を成したもので、当時江戸第一の大家と称せられた。田安家の絵師となり、法眼に叙せられ、弟子に立原杏所・高久靄崖・渡辺華山などがある。天保二年（一八四二）七八歳で歿した。

⑧谷 文晁筆 青綠山水図

絹本著色 一一五×四八・五

双幅

福井市春嶽公記念文庫寄託

文政八年（一八二五）冬の作品である。谷家は代々徳川御三卿の一田安家の御抱絵師を勤めていた。田安家に生まれた松平春嶽は、越前松平家を相続するまで一年間を田安邸で成長したが、その間に屋敷を出入りする谷文晁と交流があり、その隨筆『雨窓閑話稿』に、「文晁と酒」「文晁の偽物」等、直接文晁から聞いた話を主体に、四項目にわたって逸話を記述している。そうした関係から、春嶽はこのような文晁の傑作を愛蔵し、鑑賞したのである。

⑨渡辺華山筆 墨竹の図

絹本墨画 一二二×二一七

一幅

福井市春嶽公記念文庫寄託

松平春嶽の愛蔵品で、軸裏に春嶽の筆で「墨竹 華山筆 春嶽愛玩」と記されている。

「渡辺華山」

寛政五年（一七九三）三河国（愛知県）田原藩士渡辺定通の子として生まれる。幼名虎之助のち登。華山・寓絵堂・全樂堂などと号した。はじめ儒者を志したが、貧困のため絵で

生計を立てんとし、金子金陵に入門した。優れた画才があつたため進境著しく、ついに谷文晁の直弟子となつて、画壇にその名を知られるに至つた。その後佐藤一齋等に入門して儒学を学びなおし、田原藩の納戸役・番頭・側用人と昇進して、天保三年（一八三二）家老となり、藩の重責を荷い、海防をも担当した。このため洋学へも関心を持ち、蘭学者高野長英などと交友、「慎機論」を著わした。

しかし、これが幕府の嫌疑をうけて禁固された。そのためその累が藩主に及ぶことを恐れ、天保二年（一八四二）四十九歳で自刃した。

⑩有坂北馬筆 江戸浅草寺境内図屏風

絹本著色 五〇×二四一・八

六曲一隻

越葵文庫蔵

「有坂北馬（葛飾北馬）」

明和八年（一七七一）～弘化元年（一八四四）。江戸の浮世絵師。俗姓は五郎八といい、他に蹄齋・駿々齋・秋園などと号した。葛飾北齋の門人で、化政年間（一八〇四～一八二九）に活躍し、美人風俗画を得意として、狂歌本などの挿絵を手がけた。師北齋の作風を受けつつ、柔かみのある独自の画法を樹立し、版画作品より、肉筆画が多く伝えられている。子の源兵衛も、二代目北馬を襲名した。

⑪柴田是真筆 牧童の図

絹本著色 四〇×五五・六

一幅

福井市春嶽公記念文庫寄託

昭和二三年六月、初代春嶽公記念文庫主松平慶民が、宮内府長官退任に際し、宮中御文庫に於いて、梨子地和歌浦蒔絵文台・料紙箱・硯箱（本書⑯）とともに、両陛下から拝領の品である。

柴田是真は、幕末から明治の代表的漆芸家。江戸両国の宮彫師柴田市五郎の子で、今哉沈流亭・対柳居などと号した。一歳の時古満寛哉について蒔絵を学び、一歳で鈴木南嶺に絵を学んだ。のち岡本豊彦にも入門して研鑽を重ね、遂に蒔絵と漆絵に獨得の作風を打ち立てた。頼山陽や香川景樹とも交遊があり、多くの門人を育て世に送った。明治二三年帝室技芸員となり、同一四年八五歳で歿した。

⑬ 柴田是真筆 西洋風景画

油彩 四六・三一×一六六

福井市春嶽公記念文庫蔵

一額

「五代将軍徳川慶喜の多芸多才ぶりを示す、珍しい油絵である。外国雑誌の挿絵などを参考に描いたものであろうか。

春嶽筆の左記英文額裏書によれば、明治三年春の作である。  
「It is the picture, which Sir Keiki Tocugawa sent by picturing himself, at last spring of third year of Meiji.」

⑭ 島田雪谷筆 桜花群禽の図

紙本著色 一七一・五×九六

一幅

福井市春嶽公記念文庫蔵

「島田雪谷」

島田雪谷は福井藩士、文政二年（一八一八）に生まれる。

⑮ 島田墨仙筆 松樹下高士の図

絹本著色 一三一×五〇

越葵文庫蔵

⑯ 島田墨仙筆 加藤清正の図  
絹本著色 四四・三一×五七・六

本館蔵 一幅

「島田墨仙」

「島田墨仙」  
慶應三年（一八六七）十月九日、福井藩士島田雪谷の二男として生まれ、幼名を豊作といい、のち豊と改めた。少年期より非凡な画才を發揮し、はじめ父雪谷に学び、明治二十九年（一八九六）上京して橋本雅邦に入門、のち川崎千虎について学んだ。

明治三十六年に開催された第五回内国勧業博覧会展に出品した「大石主税刺鼠図」で認められ、その後帝展に關係して、その委員となつた。昭和十八年「山鹿素行先生」で帝国芸術院賞をうけた。ことに歴史人物画をよくし、描く人物の精神面をも表出する重厚な筆致や、作品全体にあふれる気品の高

さをたかく評価されている。

昭和十八年七月九日、七十七歳で歿した。

川崎市 馬来田善孝氏寄贈

「馬来田愛岳」

明治二十八年、福井市の足羽神社宮司家に生まれる。福井

商業学校卒業の後、書画を志して上京し、画を小室翠雲に、  
絹本墨画 一一〇・五×四七  
福井市春嶽公記念文庫蔵 一幅

「江川坦庵」

伊豆韭山の人、名を英龍、通称を太郎左衛門といった。享和元年（一八〇一）に生まれ、伊豆・相模など五ヶ国の天領の代官を勤め、民政の改革と海防の充実に尽力した。高島秋帆に砲術を学び、西洋流兵学を唱えて江戸で門人を教え、韭山に反射炉を構築するなどして活躍した。のち勘定吟味役・海防掛などを歴任、安政二年（一八五五）歿した。

各派の画法を吸收消化し、時には伝統的な大和絵風の装飾を加味するなど、独自の画風を創始し、雅趣に富んだ筆致と幽玄の画境は、高く評価されている。最近作としては、靖国神社斎館の新築にあたつて揮毫した、書院襖絵が著名である。  
現在神奈川県川崎市に在住。八十八歳。

⑯小室翠雲筆 花鳥画下絵

紙本著色 一八五×八七

川崎市 馬来田善孝氏寄贈 一幅

⑰趙子昂筆 柳に野馬の図

元代（十三世紀末） 絹本著色 五〇・八×七六 一幅

福井市春嶽公記念文庫寄託

「趙子昂」

明治三年（一八七二）～昭和二十年（一九四五）。大正・昭和初期を代表する南画家。福井の生んだ南画界の重鎮馬来田愛岳は、その門下である。

⑯馬来田愛岳筆 秋山の図 画題「天高氣清」

紙本著色 一二七・七×四一・一

一幅

一三世紀末元代の美術界で復古主義の指導者として活躍した。通称孟頫、松雪道人・鷗波・水昌宮道人などと号した。宋の太祖の子孫であったのに、元に降つてその高官となつたことから、出處進退をめぐつて批難を受けた。しかし、書画とともに天賦の才能を發揮し、ことに馬の絵で有名である。

⑯馬来田愛岳筆 月に芙蓉の図 画題「清賞」

絹本著色 一一四×四一

一幅

(21) 仇 英筆 瀑布眺望の図

明代 絹本著色 一三六×六七

一幅

(22) 爆竹調馬の図

江戸時代中期 絹本著色 縦四二・四

福井市春嶽公記念文庫寄託

一卷

越葵文庫蔵

「仇 英」  
仇英は北宋画の名手周東村の門人で、字は実父、十洲と号した。明代随一の宮廷画家として知られ、ことに歴史風俗画に新しい方面を開拓した。美人画といえども仇英が連想されるほど、美人画に一つの型を創始し、わが国の画壇にも大きな感化を及ぼしている。春嶽並びに羅晴村（石湖）筆の由緒書が付属している。

(22) 聖駕南巡図の巻軸

乾隆十五年（五〇清代） 絹本著色 縦四一・五 一巻

越葵文庫蔵

清の皇帝高宗（乾隆帝）が、乾隆十五年（一七五〇） 国内南部を巡幸した様子を描いたもので、清代宮廷画家の筆によるものと思われる。清の高宗は、準噶爾・回部・金川・台湾・

緬甸・安南等南方の諸国を平定し、四庫全書館を開いて『一統志』等を編纂させるなど、文徳・武功ともに清の諸帝中、最も名君の誉高い人物であった。この絵巻は、もと福井十四代藩主斉承とその夫人松栄院の愛蔵品で、のち、松平春嶽の所蔵するところとなつた。春嶽は、祖父母に当る先々代藩主夫妻の遺品として、この絵巻を秘蔵し、慶應元年（一八六五）七月自ら巻末に由緒を付記して子孫に伝えた。

(24) 狩野了章（種信）筆 樹下群禽図屏風

紙本著色 一六六・五×三五五

福井市 宮下巳代治氏寄贈

「狩野了章」

福井藩絵師。狩野元昭の四男として生まれ、初め元昭のち種信と改め、了章と号した。兄元英竹雲の病死により、元英の養子となつて家を継ぐことを藩に願い出たが、六代藩主松平綱昌の病氣により、藩領は半減し、養子の願出は許可されなかつた。このため浪人した了章は関東に行き、一時諏訪家、松平左兵衛督信平に仕えたが、幸運なく、再び浪人し、市中に出でて画をかいて生計をたてる一方狩野法眼永叔へ入門

名行事「馬威し」の情景を描いたものである。筆者は不詳であるが、四條派の画法を学び実際にこの行事を見聞した絵師の手になると思われ、人々の表情や動きが見事に表現されており、非凡な筆力をうかがわせる。

馬威しは、毎年正月十五日黒紋付に櫻懸といった定式の服装の青年藩士が、愛馬に鞭をいれ街路を疾走し、これを町・農家の若者が鉦・太鼓を打鳴らしつつ攻めふさぎ、勇壮な競合を展開したもので、藩士の馬術練磨、乗馬の軍馬としての鍛錬を目的としたばかりでなく、士庶の融和をもはかつた一大行事であつた。

して画技を探めた。元禄七年（一六九四）七代藩主、松平吉品により、再び福井藩に召抱えられ、これにより狩野家は再び栄え、了章を中興の祖とする。元文四年（一七三九）七十歳で歿した。

㉕福井藩十二ケ月年中行事絵巻

紙本著色 二五・五×二八六・四

一卷

福井市春嶽公記念文庫蔵

江戸時代福井城下の月毎の代表的行事や風物を、軽快な筆致で描いたもので、そのほとんどの行事が廃絶した今日となつては、きわめて貴重な資料である。筆者は不詳だが、

「松平文庫」に叢する「越前国名蹟考」原本の挿絵と構図・筆致とも酷似したものが含まれていることから、福井藩居合の師範家で狂画得意とした高畠夢蝶の筆かと推定される。もし筆者が夢蝶とすれば、文化・文政期の作であろう。

(1) 「正月十四日桜門前馬威しの図」

福井城下では、毎年正月を迎えると各町毎に趣向をこらした左義長を立て、高々と飾り付けた。正月十五日夜明前、これに火を放つて燃やし、一年の無病息災を祈つたのである。しかも毎年この左義長の祭事には、不離一体のものとして、勇壮な「馬威し」が挙行され、天下に例のない正月行事を繰広げた。これは、尚武の氣風旺盛な福井藩独特のもので、正月一四日紅白縮緬のたすきなどで装つた若武者が、愛馬に鞭をいれて桜御門より城外へ乗出し、左義長の飾り立てられた本町・京町・呉服町を疾走し、再び城内に

馳せ帰るのであるが、この日に限り町人は、武士の疾駆を自由に妨害することを許された。鞭手となつた町民は、旗や鳴物から爆竹まで打鳴して馬を驚かし、中には正面から馬首に組付き、名だたる驛馬を立往生させる豪の者もいて、余程の名馬と馬術練達の武士でなくては、駆けきることは困難であったという。

(2) 「二月廿日三保嶋祭礼の図」

三保嶋とは、三国町安島の雄島のこと、この島に鎮座する大湊神社が、三保大明神とも号されたため、この島名が生じた。大湊神社は航海・漁業の守護神として崇敬されてきた式内の古社で、昔異国の軍船が攻め寄せた時、この社の神様が異船を退治したとの伝説があり、古来異国の鬼神を退散させる弓矢神としても、信仰をあつめて来た。福井藩十二ケ月年中行事絵巻に、城下から遠く離れた大湊神社の祭礼図が收められているのは不思議であるが、当時福井城下でこの社に対する信仰がきわめて篤く、多くの参詣者が雄島を訪れたことをもの語つてゐるのであろう。

(3) 「九十九橋桃花の図」

江戸時代、福井城下の足羽川南岸一帯は、一面の桃林であつた。開花期を迎えると、足羽山の緑を背景として、あたかも薄紅の霞がたなびくごとくで、しかも北岸より天下の名橋九十九橋を見やると、ゆるやかに弧を描いた半木半石の大橋が、その薄紅の霞の中に消え行くようで、武陵桃源へといざなう夢の懸橋のようにさえ思えたという。「日本山海名物図会」などに紹介され、古くから天下に名高い九十九橋は、天正三年（一五七五）北ノ庄（福井の旧称）

城主となつた柴田勝家が架設したのにはじまる。全長八八間のうち、南部四一間を石橋とした珍しい方式は、明治二年まで存続した。

(4) 「四月足羽川筏流しの図」

筏流しは、燃料用の薪を福井城下に供給するため考案された妙策である。城下を貫流する足羽川上流の山家の人々は、四・五月と九月の二度にわけて、圍炉裏やかまど用の粗朶を刈り出し、連日筏に組んで下流に流した。城下では、城の橋から九十九橋へかけての南岸一帯でこれを待ち受け、河原に引上げて乾燥し、土庶へ売りさばいたのである。「越前国名蹟考」の編者井上翼章は、その有様を「下民の艱苦を見て楽しむべきにはあらざれ共、一興とすべし」と述べているが、風流人の目には、まだ冷い川水につかって作業する人々の働き振りが、一幅の絵となり歌となる興趣深い行事に映つたのであろう。

(5) 「五月菖蒲打の図」

端午の節句（五月五日）の日、福井城下では菖蒲打と称して、女性には少々迷惑な風習が行われた。普通菖蒲打といえば、子供達が平たく編んだ菖蒲の葉で地面をたたき合ひ、早く切れたのを負けとした遊戯である。ところが福井のそれは、こん棒のように太く束ねた菖蒲の葉を「祝の菖蒲」と名付け、通行中の女性の尻を打つて回つたのである。「歳時謹録」にはこの風を「古き士風と見ゆ」と記しているから、主に武家の男児に許されたものであつたらしい。この日、一五歳以下の嫡男のある大身の武家は、伝來の兜や太刀・槍など武具類を飾り立て、定紋を染めぬいた大幟

を高々と風になびかせた。武将出陣の様子を模して、わが子の立身出世を祝福したのである。

(6) 「六月祇園祭りの図」

江戸時代、福井城下の祭礼として最も盛んだつたのは、六月七日から一四日にかけての祇園祭であつた。福井の祇園祭は、松本と木田の両牛頭天王社の祭礼で、五代藩主松平昌親が延宝三年（一六七五）家臣に命じて京都の祇園祭の故実を調査させ、それを参考に祭典の振興をはかり、一〇代藩主宗矩が折からの厳しい節儉政治に沈滞し萎縮した人心を奮い立たせる目的もあつて、にぎにぎしい祭礼を奨励し、寛延元年（一七四八）六月、世に「大祇園」と称した一大盛典を挙行するなど、歴代藩主の崇敬と手厚い保護を受けたものであつた。

(7) 「七月盆踊りの図」

七月の福井城下は、孟蘭盆を中心とする半月間、連日連夜の盆踊りで、非常なにぎわいを見せた。その起源は藩創立の頃までさかのぼるらしく、古くはかたびようし・石川踊が、その後、越後あたりから伝えられたハツチク踊が、最も流行したという。四代藩主松平光通時代の定書には、勝見馬場・松本樹形・浜町河原など城下一六ヶ所に、「七月をどり」警衛のため、足軽五十三人を半月以上にわたり派遣するよう定めてあり、その盛んな様子が察せられる。

(8) 「八月鮎梁落の図」

福井藩では、毎年晚秋より翌春にかけて、加茂山・山奥二地域の水田に水を堰入れ、大きな人工の池を作り、そこ

に飛来する鴨や雁を特殊な投網でからめ取る「坂鳥」とか「坂鳥打」と称する狩猟法が盛んであった。こうした鴨だめの池は、各所に設けられたが、特に加茂山・山奥の両獵場は、藩直営の坂鳥場として維持され、藩士の利用に供された。

(10) 「十月護摩堂紅葉の図」

城下足羽山東南麓にあつた護摩堂付近は、薦かずらのからむ大岩壁で、紅葉の名所として名高く、その季節には多くの参詣者で賑いを見せた。

(11) 「十一月献上寒鱈早駆の図」

福井藩主から将軍への恒例の献上品の一つに、「御寒鱈」と称する寒中の生鱈があつた。いかに寒中と言え、生の魚をくさらぬように江戸まで急送することは至難であったから、運送に当る人足は寒中下帯だけの裸体となつて、かけ声も勇ましく、肩から肩へと荷を引継ぎながら、瞬時も停止することなく二日三夜で江戸まで駆け通したという。御寒鱈献上の人足達が、威勢よく福井を出発する様子は、城下の歳晩を色取る行事として、福井の人々には欠くべからざるものであつた。

(12) 「十二月舟橋雪景の図」

福井城下を抜け北進した北陸道が、九頭龍川を渡る所に、天正年間交通路整備の一策として、柴田勝家が架設した舟橋があつた。江戸期の記録によると、この橋は川幅百五間のところに四十八隻の小舟を並べ、その上に長さ三間、幅一尺五寸、厚さ四寸の敷板を渡したものであつたという。小舟や敷板等の修復維持は、越前海岸の浦々や福井藩・丸

岡藩が分担して当り、官道上の橋らしい管理がなされていた。舟橋の景観は、北陸道往還の人々が必ず目にしたもので、四季折々河岸の変化に応じ、さまざまな趣を見せたが、ことにその雪景色は、またとない風情があつて、旅人の心を感めた。

②6 佐々木長淳筆 橋本景岳肖像画並びに松平春嶽筆「橋本左内小伝」の幅

紙本墨書 (幅) 一二三・五×五六(肖) 二二・三×二〇・四 一幅

福井市春嶽公記念文庫蔵

橋本景岳歿後十六年を経た明治八年に、橋本家からの依頼により、絵心のあつた佐々木長淳が記憶をもとに描いた肖像画と、同年五月二一日付の春嶽筆「橋本左内小伝」とを一幅に仕立てたものである。長淳は通称権六、天保元年(一八三〇)福井に生まれ、藩の御製造局頭取に任じ、大小銃砲・火薬・洋式船の製造等に従事した。慶應三年(一八六七)四月、兵器をはじめ各種機械類調査の命を帯びて米国に派遣され、維新後は工部省に出仕して活躍した。橋本景岳とは親戚であつた上に年令も近く、ともに蘭学を研鑽し、親しく交わつた間柄であつた。

また、松平春嶽の「橋本左内小伝」は、景岳の人となりを最もよく知る人の手になる点で、他のいかなる伝記も及ばない価値を有している。

②7 横井小楠銅版肖像画

紙本銅版画 二二・二×二二・一

一葉

福井市春嶽公記念文庫蔵

「蒔田雲處」

福井市春嶽公記念文庫蔵

横井小楠の肩衣姿の写真をもとに、嫡男伊勢時雄が製版させ、松平春嶽に贈つたもの。肖像周囲に、春嶽の筆で「横井小楠先生<sub>平四郎</sub>肖像 明治廿二年二月廿三日 先生嫡男伊勢時雄所贈ノモノナリ。源慶永識」とある。

㉙越智通兄（河野菱渚）筆 橘曙覧肖像画

絹本着色 六一×三六

一幅

東京都 井手孟雄氏寄託

福井の人、書画・詩作にすぐれ漢学者としても令名があつた。はじめ越前で代官を勤めたが、中傷するものがあつて職を辞し、京・大阪・江戸を転住した。晩年福井城下の足羽山に住み、病で右手の自由を失い左手のみで墨竹を描いたことで知られる。慶応元年（一八六五）五四歳で歿した。

慶応四年（一八六八）正月、橘曙覧が丹生郡本保村（現武生市本保町）河野荘洲（本保の豪農で漢学者として著名）の屋敷を訪問した際、居合わせた河野菱渚が写生した曙覧晩年の肖像である。曙覧の遺族の間では、「春嶽公から拝領した白紬の袴を着て、コタツに入っているところを写してもらつた」と家伝されている。曙覧もこの絵の出来栄えを喜び、自ら「雲ならで通はぬ峯の岩かげに神世のにほひ吐く草の花」と贊歌を書加えている。落款の「越智通兄」とは菱渚のことである。通兄はその実名である。

「河野菱渚」

弘化元年（一八四四）丹生郡吉野村本保に生まれた。名は通兄、通称は條左衛門、菱渚・半湖などと号した。南宋画を父通香に学び、明治二十三年京都画学校の教授となる。明治三十三年歿。

㉚蒔田雲處筆 畿竹の図

紙本墨書き 一三五×六三

一幅

## 二、書 蹤

「公卿・將軍・諸侯」

「至誠如神」の書

⑩有栖川宮熾仁親王筆  
絹本墨書 一三一×四一・五

一幅

福井市春嶽公記念文庫蔵

「有栖川宮熾仁親王」

有栖川宮第九世。幼名歎宮。嘉永元年（一八四八）、仁孝天皇の猶子、翌年親王となる。禁門の変後、国事御用掛を罷免、謹慎を命ぜられたが、王政復古と共に總裁職に就任、東征大総督として江戸城を攻撃のち兵部卿、福岡県知事、元老院議官、同院議長を歴任。また西南戦争では征討總督として西郷隆盛を討ち、陸軍大将となる。帝国憲法制定に協力し、歐米巡遊後は參謀總長をつとめた。

⑪徳川綱吉筆 「誠 敬」の書

絹本墨書 四五×八二

福井市 水野真男氏寄託

福井市春嶽公記念文庫蔵

⑫徳川慶喜筆 「鬼神泣壯烈」の書

絹本墨書 一一四×三四

福井市 加藤二二氏寄託

福井市春嶽公記念文庫蔵

⑬徳川慶喜が、壮烈な最期をとげた橋本景岳を追想し、維新後に景岳の実弟橋本綱常に書き与えたもの。

⑩二條実美筆 「庭前幽花時發披覽云々」の詩  
絹本墨書 一四三・五×五〇

一幅

福井市春嶽公記念文庫蔵

明治十八年二月の書。「二條実美公真蹟 春嶽愛玩」と、  
松平春嶽の軸裏書がある。

⑭松平春嶽筆 「敏 德」の書  
絹本墨書 一二九・五×五七

一幅

福井市春嶽公記念文庫蔵

嘉永六年（一八五三）二月二十四日、松平春嶽二六歳の書で

ある。「敏德」とは、敏達の徳、さとく事理に通達した徳を意味し、當時春嶽が理想とするところを揮毫したものである。春嶽の書には珍しく、激しい氣魄にあふれているが、それは血氣盛んな青年期の書というばかりでなく、時代の状勢が春嶽の精神を奮起させたからである。嘉永六年二月末といえど、米使ペリーの率いる黒船が浦賀へ来航する直前で、当時まだ強硬な鎖国攘夷論者であった春嶽は、他藩にさきがけ

月五八歳で歿した。

「 鷹

有 功

おほそらをわたるくもにもあきのこゑありとみへしはかりのひとつら

」

自藩の軍備軍制を洋式に改革統一し、越前海岸の要所に砲台を築くなど、積極的に海防の増強を推進していた。この書は、國家の危機を眼前にして、国防の必要を痛感し、激しく気力の高まる中で、一気に書上げたものであろう。

③松平春嶽筆 「我無才略我無奇云々」 の詩

絹本墨書 一一五・五×三四・三

一幅

福井市春嶽公記念文庫蔵  
松平春嶽壮年期の書として、最も有名なものである。その詩句が、春嶽の人柄を伝えて余すところなく、座右の銘とする人も多い。

我に才略無く我に奇無し。常に衆言を聴きて宜しき所に従ふ。人事渾て天道の妙の如し。風雷晴雨豫め期し難し。

右偶作 春嶽

④松平春嶽筆 手形並びに和歌贊の幅

紙本墨書 二一×四四

一幅

東京都 中根隆氏寄託

将軍繼嗣問題を中心とする内政外交策をめぐる政争に敗れた松平春嶽は、安政五年（一八五八）七月、隠居急度慎の处分を受けて江戸靈岸嶋邸に謹慎幽居の生活を送ることとなり、春嶽の手足となつて活動した橋本景岳も、翌年十月七日斬刑に処せられた。こうした時態に、春嶽の帷帳の臣中根雪江は、責任を感じて春嶽の側近を離れ、國元福井へ帰らんとした。福井へ発程の前日（安政六年十月十日）、暇乞いに出向いた雪江に対し、春嶽が机上の手沢品とともに書き与えたのが、こ

の手形と和歌の幅である。

朝夕にこれをなかめてわか前に居るか如くに汝し思へよ

⑤松平定信筆 「古歌手鏡」 の折本

四〇・五×一八・五

一帖

福井市春嶽公記念文庫蔵

四季の草花を美しく配した色紙一枚、短冊九枚を折本仕立に表装したもので、それぞれに松平定信自筆の古歌が記されている。定信の甥にあたる松平春嶽の実父田安齊匡が、衝立にして愛藏していたのを、その娘で柳河藩主立花寛鑑夫人純姫に贈り、さらに弘化二年（一八四五）冬に至り、純姫の実弟である春嶽（時に一八歳）が譲り受け、折本に仕立て直して保存したものである。

折本の表紙には、「樂翁源公真蹟」との題簽があり、春嶽の家臣の筆で左の箱書が付されている。

此御色紙短冊は、そのかみ田安一位の君の御需によって、樂翁少将の君古歌とも書せ給ひしを、御衝立に押させ給ひたるか、其後純姫の君の御方に譲り伝へさせ給ひけるを、こたひねもころに乞受給ひて、かくは物せしめ給ふになむ

弘化二きのとの巳とし十二月八日

⑥徳川齊昭筆 「有恥而生不如無恥而死」 の書

絹本墨書 一二三×三二・五

一幅

福井市春嶽公記念文庫寄託

④0 山内容堂筆 「品川竹枝并引」の詩

絹本墨書 三四・五×八〇

一幅

福井市春嶽公記念文庫蔵

久三年末許され、元治元年幕府の召に応じて上洛し開国論を力説したので、七月十一日三条木屋町で刺客におそわれ斬殺された。夫人は勝海舟の妹順子である。

○

〔諸士・志士〕

④1 高山正之（彦九郎）筆 「風の音に云々」ほかの和歌

紙本墨書 二四×三三

一幅

福井市春嶽公記念文庫蔵

寛政の三奇人に数えられる勤王家高山正之の遺墨である。軸裏に春嶽の筆で「高山彦九郎真筆 春岳玩賞」とあるが、春嶽は他の資料についても、このように丹念に所蔵の旨を注記していて、いかにも春嶽らしい几帳面さをうかがわせる。しかも、資料によつて「春嶽玩賞」あるいは愛玩・愛藏・雅玩・清玩などの語を使つていて興味深い。

② 佐久間象山筆 「秋田青巳遠云々」の詩

紙本墨書 二九×五三

一幅

福井市春嶽公記念文庫蔵

④2 梅田雲浜筆 「野人載酒来云々」の詩

紙本墨書 一〇六・五×五八・五

一幅

「梅田雲浜」

幕末の志士。崎門学派の儒者。若狭小浜藩士。文化十二年（一八一五）に生まれた。通称源次郎・雲浜・湖南・東鳴と号す。

嘉永五年（一八五二）国事建議のことで幕府の忌憚にふれて追放され、浪人となる。尊王攘夷論を唱え大義名分を鼓吹、在京志士を指導した。将軍継嗣問題では、慶喜の擁立に尽力。青連院宮尊融親王の知遇をうけ、幕府改造の意見書を出し、「戊午の密勅」降下の因を作つた。安政の大獄に際し、第一に捕えられ、安政六年（一八五九）病にかかり獄死した。

〔佐久間象山〕

信濃松代藩の藩士、名は国忠、のち啓（ひらき）、大星と改め、字は子明といつた。号は晩年象山を用いる。

幼にして漢学を修め、のち軍事兵学を修めた。藩主真田幸貫が老中となり、海防事務に当ることとなつたため、象山もその研究に當り「海防八策」を建言した。さらに江川太郎左衛門の門に入つて西洋の砲術等を学んだ。安政元年、吉田松陰の海外密航失敗に連座して伝馬町の獄につながれたが、文

④3 梅田雲浜筆 「野人載酒来云々」の詩

紙本墨書 福井市 谷口さを氏寄贈

一幅

「梅田雲浜」

幕末の志士。崎門学派の儒者。若狭小浜藩士。文化十二年（一八一五）に生まれた。通称源次郎・雲浜・湖南・東鳴と号す。

④4 横井小楠筆 「試看天地間事云々」の書

紙本墨書 一三一×二八・八

一幅

福井市 土田耕司氏寄託

〔横井小楠〕

文化六年（一八〇九）～明治二年（一八七〇）。熊本藩士。

通称平四郎、号小楠・沼山。熊本藩校時習館に学んで、その研究に當り「海防八策」を建言した。さらに江川太郎左衛門の門に入つて西洋の砲術等を学んだ。安政元年、吉田松陰の海外密航失敗に連座して伝馬町の獄につながれたが、文後藩政改革に參画したが失敗した。また諸国を遊学して吉田

松陰・橋本景岳等と会談した。

安政五年（一八五八）松平春嶽に招かれて福井藩の賓客となる。開国通商・殖産興業による富國強兵策を主張、橋本景岳なき後の藩政改革を指導した。文久二年（一八六三）春嶽が政事總裁職につくや、その幕政改革に協力して活躍したが、翌三年福井藩内部の政変で失脚し帰国した。明治元年（一八六八）維新政府に召されて上京、微士参与として出仕したが、翌二年耶蘇教化共和論者であるとの理由で暗殺された。

④5 橋本景岳筆 「雪中松柏愈青々云々」の詩  
紙本墨書 一一一×三一・五

一幅

福井市春嶽公記念文庫蔵

雪中の松柏愈青々、綱常を扶植するは此の行に在り。天下久しく龜勝の潔無し、人間何ぞ独り伯夷のみ清からん。  
義高くして便ち覚る生の捨つるに堪ふるを、礼重くして  
方に知る死の甚だ軽きを。南八男子終に屈せず、皇天上  
帝眼分明。

この詩は、幕末の志士が座右に備えて、己が心を磨くために学んだ浅見絅斎の『靖獻遺言』卷之六、謝枋得の編中に、その遺言として掲げられているもので、安政五年十月、景岳が大獄問題に連坐して、滝勘藏預けの幽囚生活に移つた時、同じ運命下の自分の心境を示そうと書いたものと推察される。詩の出所、意義からいつても極めて深刻なものである。

④6 橋本景岳筆 藤田東湖「回天詩史」の幅  
紙本墨書 一六・五×八六・五

一幅

福井市 熊谷太三郎氏寄託

福井藩医半井仲庵が、藤田東湖から贈与された「道理心肝を貫き云々」の十九大字の語の出所などについて景岳に質問したのに対し、景岳が東湖の「回天詩史」の一節を特に書いて仲庵に与えたもの。もと、半井家に秘蔵されていた一幅である。

④7 勝 海舟筆 「戊辰晚春東台懷詠」の詩  
紙本墨書 一三三×五七

福井市 水野真男氏寄託

一幅

〔学者・文人〕

④8 契冲筆 和歌短冊折本  
紙本墨書 三七×九

一幅

福井市春嶽公記念文庫蔵

古雅な趣のある契冲の打雲短冊五十枚を、表裏に貼込んである。箱蓋の表裏に、松平春嶽の筆で、左の由緒書がある。

「契冲自詠」「予未た隱居前於越前商人より献呈之物也。有名ナル契冲之五十枚之真蹟也。永世子孫珍藏すべシ。明治十一年八月廿二日 正二位松平慶永(印)」

「契冲」

寛永十六年（一六三九）～元禄十四年（一七〇一）。江戸初期の国学者で、父下河辺元全は、摂津尼ヶ崎松平家の家臣であつた。父が浪人してから不遇が続き、十一才の時摂津今里の妙法寺で出家、高野山に上つて真言宗の仏学を修め、四十才で妙法寺の住職となり、五十一才（元禄三年）の時、円珠

庵に隠居し、入寂するまでもつぱら国学の研究に没頭した。

天和三年（一六八三）徳川光圀の依頼により『万葉集』の注釈を行い、大部の名著『万葉代匠記』を完成した。

④賀茂真淵筆 古今歌集の文

紙本墨書 三五×四八

一幅

⑤鈴木重胤筆 長歌の幅

紙本墨書 一三二×六一

一幅

福井市春嶽公記念文庫寄託

松平春嶽の生家田安の始祖宗武は、はじめ荷田在満に国学を学び、のち賀茂真淵を厚遇してその指導を受け、ついに万葉調の歌人として名をなすに至った。そうした関係で、春嶽の愛蔵品中には、田安家伝來の賀茂真淵の筆蹟が含まれている。軸裏に、春嶽の筆で「加茂真淵翁真蹟 春嶽愛玩」と書き込みがある。

⑥頼 山陽筆 「旌旗凋不挙云々」の詩

絹本墨書 一三八×五五

一幅

東京都 新田陽子氏寄託

山陽は少年時代から詩文の才に秀で、国史に大きな関心を寄せていた。そのため古来、わが国人々に深い感銘を与えて來た歴史上の事件に題材を得てすぐれた漢詩を作り、巧みな書法で多くの逸品を残した。十九歳で元寇を詠じた「蒙古來」など人々に愛吟されたものが多いが、これもその一つで、建武の親政に失敗して、足利尊氏の兵を撃退しつつ雪深い越前に入国した新田義貞の胸中を偲んで詠じたものである。

旌旗凋不挙 良岳日将レ沈  
蹉跎復京志 蕪條趨レ越心

鑾輿南北折 鐵馬雪霜深  
仰止英雄恨 茫々一整襟  
為元禄兄錄舊製 賴襄

⑦鈴木重胤筆 長歌の幅

紙本墨書 一三二×六一

一幅

福井市春嶽公記念文庫寄託

鈴木重胤は、文化九年（一八一二）淡路国津名郡仁井村の庄屋重威の子として生まれる。はじめ樅廻舎、のち巖樅本と号した。幼くして才識あり、江戸に出て国学を学び、諸国を遊歴して学風をひろめた。平田篤胤に書信をもつて教えを受け、深く心酔して『祝詞講義』『日本書紀伝』を著わしたが、その学説につき平田家に咎められ破門された。しかし、重胤の名は篤胤と並び称されるに至った。文久三年（一八六三）五二歳の時、奸吏と通じ正義を害せんとしたと疑われ、江戸本所小梅の宅で暗殺された。

熱心に国学を学び、深い造詣を有した松平春嶽は、早くより重胤との関係があつたよう、福井市春嶽公記念文庫には、四十二枚からなる重胤自筆の和歌懐紙など、春嶽が愛蔵した重胤の遺墨が数多く伝えられている。

⑧橋 曙覧筆 「おめぐみの云々」の和歌

紙本墨書 一二三×五一

一幅

福井市春嶽公記念文庫蔵

慶応元年（一八六五）二月二十六日、自宅に松平春嶽を迎えた橋曙覧は、「賤夫も生るしるしの有て今日君来ましけり

伏屋の中に」と、その感激を詠じた。その後春嶽は、曙覽を城に招いて古典や歌道について進講させようとしたが、曙覽は「花めきてしばし見ゆるもすゞな園田伏庵に咲けばなりけり」と歌つてこれを辞退した。春嶽も、「すゞな園田ぶせの庵にさく花をしひてはをらじさもあらばあれ」と返して、それ以上強要することがなかつた。

この和歌幅は、春嶽との右のやりとりのあと、曙覽が詠じて献上したもので、次の詞書を添えて、曙覽の歌集「君来草」に収められている。

かく聞えあげ、れば、かしこくもきこしめしわけさせ給ひ、仰せのむねゆるさせ給ひけるうへに、すゞな園田ぶせの庵にさく花をしひてはをらじさもあらばあれといふ御誇あそばし給ひたりけり、ゆほひかなる御心ばせのかたじけなき言に出べうもあらねど、さりとてむなしくやはとてたてまつれる

⑤3 橋 曙覽

曙覽筆 「咏瀧」ほかの和歌  
紙本墨書 一〇九・五×六〇・五

三幅

⑤4 橋 曙覽

（尚事）筆 「とりのあとつくかたもなし云々」の和歌短冊  
紙本墨書 三四・五×五・五

東京都 一点

「橋 曙覽」

文化九年（一八一二）福井城下石場町（つくるも一丁目）の紙商正玄五郎右衛門の長男として生まれた。幼名は五三郎、はじめ尚事、のち曙覽と改めた。正玄家は朝倉氏時代からの

旧家として知られた木田橋七屋敷の一つである。少年時代は府中（武生）の母の家で養育され、日蓮宗妙泰寺明導に就き仏教を学び、のち京都へ遊学して児玉三郎から漢字を学んだ。しかし、我国の古典の研究に志して家を異母弟宣に譲り、足羽山に隠棲（黄金舎）し、飛驒高山の国学者田中大秀に入門して大いに得るところがあつた。三十七歳の時、三ツ橋（照手三丁目）に移り、以後この家を藁屋と号した。曙覽の歌人としての業績は、ほとんどの藁屋でなされ、のち松平春嶽によつて志農夫廬舎と改められた。清貧の中で国学と作歌に精進し、近世末期の国学の精神に燃えて、独自の歌風を樹立したが、慶応四年（一八六八）八月、五十七歳で歿した。

⑤5 太田垣蓮月筆 和歌短冊の折本

紙本墨書 三九×一九

一帖

⑤6 太田垣蓮月筆 和歌賛月にきりきりすの図

紙本淡彩 一〇七・六×三〇・八

一幅

福井市春嶽公記念文庫蔵

「太田垣蓮月」

寛政三年（一七九一）伊賀上野の城主藤堂某の子として生まれ、知恩院に仕えた太田垣光古の養女となり成長した。美貌聰明で幼少から和歌をよくし、武技にも長じたが、子供や夫と早く死別するなど、家庭的に恵まれなかつた。そのため、剃髪して尼となり、千種有功に入門して本格的に和歌を学び、堂上風の氣品と、桂園風の清新とを兼ねそなえた名歌を数多くこした。また自詠の和歌を彫った陶器を焼き、世に「蓮

月焼」と称して、その雅高優美なるを称賛され、珍重されて  
いる。明治八年八十五歳で歿した。

⑤7 松平春嶽所蔵 「和歌御手鑑」

紙本墨書 四七×三六

一帖

福井市春嶽公記念文庫寄託  
松平春嶽所蔵の短冊一七三枚を折本に仕立てたもので、筆  
者は公家・大名等の貴頭、著名な幕臣・諸藩士、学者・文人  
など九〇余名に及んでいる。春嶽の広範な交友を知る上でも  
興味深い。本書では、紙数の関係から一八枚をえらび収載し  
た。

⑤8 張瑞図筆 「留客江村暮云々・西峯挿天起云々」の詩

絹本墨書 一六九×五二・五

双幅

福井市春嶽公記念文庫寄託

張瑞図は、明代十六世紀後期の著名な書家で、画もまた得意とした。字は長公、号は二水・白毫庵道者、建極殿大学士をつとめた。書家としては、現代の書道界にも大きな影響を及ぼしている。それぞれ軸裏に松平春嶽の筆で「張瑞図之幅  
留客江村 春嶽藏」「張瑞図之幅 西峯挿天 春嶽藏」とあり、箱側面に「加州前田家ヨリ御到来」とあるから、何かの折、加賀前田家より春嶽へ贈呈されたものと思われる。

「留客江村暮開尊対浦沙 池上心孤月 樹抄落残霞」  
地僻惟宜竹 秋高未有花 琴書堪晤語 随意宿山家  
「西峯挿天起 絶頂寺門開 雪裡僧住 山中無客來」落  
花乎溝席 積草偏香台 我欲聞清梵 焚香坐不回」

⑤9 西脇吳石筆 「蘭亭帖」一枚折屏風

紙本墨書 一七三・三×一七三・六

東京都 西脇雲石氏寄託 一隻

「西脇吳石」

明治十二年（一八七九）三月八日、福井県勝山町で生まれた。名は静、吳石は、その号である。成器小学校より福井師範学校に入り、卒業の翌年、習字の文検に合格し、福井高等女学校教諭となり、のち東京商科大学に出講、以後文化書道会を主宰して、書道の普及発展に努めた。幕末の書家巻菱湖を継ぐ村田海石を師とし、更に日下部鳴鶴について書論を学び、漢詩にも秀れていた。昭和四十二年（一九六七）十一月、勲四等に叙せられ、瑞宝章を賜わる。

昭和四十五年（一九七〇）十一月、九十二歳で歿し、更に従五位を追贈せられた。

### 三、什器類

〔各種調度品〕

⑥0 梨子地和歌浦蒔繪文台・料紙箱・硯箱

三四・五×六〇×一一 (文台)

三具

福井市春嶽公記念文庫寄託

昭和二十三年六月五日、宮内府長官を退任した初代春嶽公記念文庫主松平慶民が、同年六月十日、柴田是真筆「牧童図」と共に、両陛下より賜った御品。

文台は、古くより本や短冊をのせる台であつたから、この名が生じた。この上で文字を書いたりするものではなかつたから、形も次第に小さくなり、もつばら詩歌の会などに用いられた。室町時代になると、硯箱と一組にして同じ図柄が施されるようになり、床の飾り物ともなつた。さらに江戸時代になつて、本品のように文台・硯箱・料紙箱の三つで一組の調度として扱う風が生じたのである。

⑥1 葵紋散菊花唐草模様蒔繪重箱

二六・七×一九・七×四二・五

一具

越葵文庫蔵

⑥2 梨子地藤棚四季草花模様蒔繪提重

二五×四〇×四三

一具

福井市春嶽公記念文庫寄託

提重は花見など行楽時の飲食器で、重箱・酒器・小皿等が一箱に収納され、携帯可能に工夫されている。本品是比较的小振りで、藤棚模様を中心に四季の草花が上品に蒔繪されて

いる。

⑥3 古満巨柳・狩野栄川合作 瀑布眺望図蒔繪桑製小簾笥

二九×四五・五×四二

一具

福井市春嶽公記念文庫寄託

木目を生かした木地のままの桑材を使用し銀金具を打った全体として渋い感じの小簾笥であるが、中段右手の鍵付きの開戸を開けた時だけ、きわめて豪華な金沃懸地の蒔繪が目にに入る。しかも、普通の状態では目につかないその内側の蒔繪が、江戸中期第一の名手と評判された古満巨柳と家治将軍の寵遇を受けた栄川院狩野典信の合作であるから、当時第一級の贅沢を尽した品ということが出来る。巨柳や栄川の活躍期からいつて、一橋家出身の一二代藩主重富が将軍家から拝領の品かとも推定される。

古満巨柳は、安永・天明（一七七二～八九）ごろの人。木村七右衛門といい、幕府御抱の蒔繪師五代古満久伯の門人となつて、古満の姓を許された。巨柳齋と号し、当代の蒔繪師中第一の名手といわれ、余暇に機巧人形なども手懸けた。また狩野栄川は、名を典信といい、木挽町狩野派栄川古信の子。將軍徳川家治に厚遇され旗本に列した。寛政二年（一七九〇）六二歳で歿す。

⑥4 堆朱小簾笥並びに田安齊匡遺品類

三六・五×三〇×一四・三

一〇点

福井市春嶽公記念文庫寄託

松平春嶽が、実父田安齊匡の形見の品として愛蔵したもの

である。簾筒内には、齊匡遺愛の品十四点が収納されているが、ここにはその内から十点ほどを示した。遺品中、写真下段右側の銅製器具は、いわゆる万歩計であり、歩数を積算して最長十二里までの歩行距離が計測出来る仕組みになつてゐる。

⑥5) 菊紋散牡丹唐草模様蒔絵香道具

福井市春嶽公記念文庫寄託

一具

⑥6) 明珍吉久作 鉄製龍・海老の置物

全長（龍）四五・五（海老）一七

三点

越葵文庫蔵

「明珍吉久」

古来甲冑師として名高い明珍家は、平安時代末から鎌倉時代初期に活躍した増田宗介が初代である。宗介は十二世紀中頃、近衛天皇からその作品が玉のよう明るく輝き、見事な珍品であるとして「明珍」の姓を賜わつたと伝えられる。その後この明珍家の一族は、室町時代中期の全盛期から明治に至るまで、全国に広がつて多くの名工を生んだ。但し、江戸時代に入つて甲冑の需要が減ると、刀や鐔、各種調度品類などをも製作するようになる。

福井の明珍吉久は通称小左衛門といい、明珍一派の一支流である。代々小左衛門吉久を名乗り福井藩に仕え、藩主の命で甲冑・鐔をはじめ種々の鉄製品を作つた。殊に二代目吉久は、今日も松平家に蔵する魚鱗足をはじめ、英國の博物館に収藏する鷲の置物、松平家より明治天皇に献上された龍の

置物等、傑作が多く著名である。また六代目吉久（文化六年〇九）は、誕小左衛門と人々に嘲られたが、鐔を彫つては当代隨一と賞讃された名工であつた。

⑥7) 梨子地菊水模様蒔絵「源氏物語」書箱

三八・五×二七・五×二三

越葵文庫蔵

一箱

梨子地肌の随所に、九曜紋のかたちに金粉を抜いた箇所があることから、熊本細川家より松平春嶽の許に嫁した勇姫の輿入道具の一つと思われる。

⑥8) 躍鯉蒔絵引出付き硯箱

一五・一×一四・二×二六・八

福井市春嶽公記念文庫蔵

一具

橋本景岳が、松平春嶽より拝領の品である。將軍繼嗣問題・對外條約問題をめぐる井伊直弼との政争に敗れた春嶽は、安政五年（一八五八）七月五日、水戸の徳川齊昭・尾張の徳川慶恕等と共に幕謹を蒙り、隠居急度慎という嚴罰に処せられた。主君が大名としては切腹に次ぐほどの嚴謹を蒙りながら、その帷帳に参じた輔翼の臣として生きながらえるべきではないと考えた中根雪江や橋本景岳は、即日自刃を決意し、密かに申し合わせた。しかし、その気配を覺つた春嶽は、二人に「蒙嚴科候は覺悟之處、今更不驚駭」是迄の忠誠貫（白月）候は感服万々、家臣の蒙罪候に不及は、國家の幸甚に候、我における所喜、尚弥任重候間、後來の所申談義も可有レ之、愕然の余り卒尔の義有レ之候ては、我を見捨候也」との

一書を与えて慰諭したので、二人は感激して自刃を思い止まり、主君の雪冤と再起のため決死の努力を誓い合つた。春嶽はさらに雪江・景岳や平本平学・石原甚十郎等左右の近臣に、常用の品を与えて忠勤を慰労したが、その時景岳の拝領したのがこの硯箱であつた。

硯箱中には、春嶽が使用していた当時のままに、筆墨・便箋等が收められ、春嶽心尽しの小判二枚が「橋本江」と表書した包紙と共に、手付かずで保存されている。

なお、景岳がこの硯箱を拝領した感懷を詠じた次の詩が知られている。

〔安政五年七月〕  
戊午初秋五日、吾が春嶽公故ありて致仕の命を蒙る。  
是の日、公、物を親臣五人に賜ひ、以て之を芳奨す。  
而して臣紀も亦た与る。感恩の余り一絶を賦して以  
て謝し奉る。

龍門より墜落して龍に成らず。僅に藻間に伏して喚喚を  
試む。

この意蚤に明主に逢ふて悟る。賜恩の躍鯉心の懼きを慰  
む。

⑥9 黒蠟色塗地秋草虫模様蒔繪袖机・針箱

三〇・五×八二三×三四・四机一二・三×一三×一五・四針  
二具

福井市春嶽公記念文庫寄託

初代春嶽公記念文庫主松平慶民夫人幸子の奥入道具。

⑦0 沼田一雅作 三島釉「象香炉」

全高一八 一具

⑦2 白地小葵文冬の御引直衣  
着丈二三〇・桁一九六

茅ヶ崎市 沼田喜代子氏寄贈

「沼田一雅」

彫刻家。明治六年（一八七三）福井の木田新町で生まれ、幼名を勇次郎という。

明治二十四年（一八九二）彫刻修業のため上京し、竹内久

一に師事し木彫を学ぶ。明治二十九年（一八九六）東京美術学校助教授となる。明治三十八年に大彫刻家ロダンに師事し、フランス政府から芸術章（アカデミー・ド・オフィシェー）を昭和三年（一九二八）フランス勲章（レジヨン・ド・ヌール）を贈られ、昭和二十九年（一九五四）日本芸術院恩賜賞を受ける。作品「正木直彦氏陶像」が有名である。

昭和二十九年（一九五四）八十二歳で歿した。

〔衣裳・装身具類〕

⑦1 金製細鑄耳飾

全長一五 一対  
本館蔵

古墳時代中期。福井市天神山古墳出土。長い鎖部を持つ垂飾式の耳飾。最下部が三翼形となつてゐるが、この形態は県下で初めての出土である。すべて純金製で、高度な細工技術を駆使しており、当地方と大陸・朝鮮半島との交流を考える上でも、きわめて重要な意味をもつてゐる。

一領

福井市春嶽公記念文庫蔵

(74) 青菊<sup>スカイ</sup>菊<sup>ヒマラヤ</sup>色<sup>カク</sup>頭紋<sup>カク</sup>紗<sup>シ</sup>狩衣<sup>ケイ</sup>（堂上夏の料）

越葵文庫蔵  
一領

明治五年八月二十五日、松平春嶽が明治天皇より拝領の御衣である。引直衣は、平安時代公家男子の平常着であり社交服でもあった直衣が、次第に公服化してきたため、天皇専用の御衣として作り出されたものである。通常の直衣は、裾が膝とくるぶしの中間くらいの所で着用するが、これは写真のように裾を長く後に引いて御着用になるので、引直衣と呼ばれた。大徳寺藏の後醍醐天皇御影、泉涌寺藏の孝明天皇御影などが、引直衣の御姿である。本品は、白<sup>ナガ</sup>固地綾<sup>カジラ</sup>の冬の御料で、紋様は小葵文、文の中に星があるのは、天皇の御料のみである。

なお、春嶽の筆で左の箱書がある。

「天皇 冬御引直衣

一領

明治五年壬申秋八月二十五日参朝之節恩賜、従<sup>三</sup>徳大寺宮内卿<sup>一</sup>授付、  
正二位松平慶永謹記

(73) 黄地花鳥文狩衣<sup>カツラギ</sup>（堂上冬の料）

一領

越葵文庫蔵

(75) 武家風指貫<sup>サムライ</sup>

越葵文庫蔵  
一領

礼装として用いられるようになつてから狩衣は、地質に綾・固織物・平絹、または紗（頭文と透文がある）を用い、夏は单で冬は裏をつけた。色は一定しないが、織文のあるのは、堂上以上の家格の者に許された。江戸時代には、模様のないものを布衣といい、模様のあるものをのみ狩衣と称して、礼服とした。

指貫は、狩衣や直衣の時、着用する袴である。地の材質、紋様の有無などにより、公卿・殿上人・地下の使用の区別がある。普通、裾に組緒などが通されていて、着用の際その緒を引きしほり、上部をふくらませるのが特徴である。武家の用いたものは、裾の長い裂を上方に引上げ、腰紐の裏の輪に通して結んだ。

(76) 直衣・狩衣着用時の装身具類

福井市春嶽公記念文庫蔵

(1) 緞錦紙入・煙草入・煙管筒

二組

古くは下級官人の常服で、次第に公卿の略服ともなり、鎌倉時代以降は武家が礼服として用いるようになつたため、一層華麗な姿となつた。表地の材質、裏地の有無、袖括<sup>カフタ</sup>の形式等により、堂上（殿上人）。四位五位の内、昇殿を許された者）と、それ以下の地下の家格の者が用いる区別があつた。

慶応四年（一八六八・明治元）五月から翌明治二年正月にかけて、明治天皇より春嶽へ下賜された品々である。緞錦は、多数の色縞糸を小さな杼と職人の爪の先でかきよせながら、下絵どおりに一部分ずつ織上げてゆく、手間のかかる高級な織物である。ことに竹に雀模様のものは、金

糸を主体とした「金綴錦」と呼ばれるもので、今日もそのまばゆさを失っていない。

この種の紙入れは三徳などとも称し、宮中への通常参殿の折などに使用した略式のもので、嚴儀の際、正式には「帖紙」と呼ばれるものを懷中した。煙草入と煙管筒は、利久形と呼ばれた形式のもので、女性用としても流行した。江戸時代中期以降、煙草入と煙管筒を連結した腰さげ形が盛んとなり、近年まで使用する人を見かけたが、高位の人人が正装したり、そうしたものを腰にぶらさげる訳にもゆかぬ女性は、このような懷中形を愛用したのである。

## (2) 末広・夏扇類

慶應三年（一八六七）八月より明治三年四月にかけて、明治天皇より春嶽が持領の扇類である。両親骨が外方に曲った末広（中啓）と、親骨が真直ぐな夏扇とに大別できる。

日本で平安時代から創案された紙扇は、室町時代に明へ輸出され、かの地で唐扇に発展した。この唐扇の影響をうけて、わが国の紙張り扇の様式は大きな発達を見せ、やがて親骨を外方にそらした末広が考案されると、重要な儀式以外は重々しい桧扇にかえて、軽やかな紙張りの末広が使用されるようになつた。江戸時代に入つて、服飾が一段と制度化されると、衣冠・直衣・狩衣などの際、略儀に末広を冬の持物として、また夏期にはしづめ折の夏扇を使用することが一般的となつた。

⑦ 鉄群青色平紬地花菱亀甲文飛鶴に松竹梅模様繡腰巻

江戸時代後期

一領

福井市春嶽公記念文庫蔵

春嶽夫人勇姫着用の腰巻である。腰巻は上級武家の婦人が、盛夏の礼装として着用したもので、袖を通さず腰から下にまとう特殊な着装をした。戦乱に明暮れた室町末期の宮中の女官達は、衣料の不足から服制を色々に簡略化し、絆袴を省略して、小袖の上にもう一領の小袖を帯をせず羽織るようになつた。これが打掛である。しかし、この打掛けも夏の盛りには着るに耐えず、肩からはずして腰に巻きつけるようになり、高位の武家の女性も、これをまねるようになつたのが、腰巻姿の発祥であるとされる。有名な浅井長政夫人像、すな

わち小谷の方の肖像画が、中世末期の腰巻姿の好例である。  
江戸時代末、勇姫の頃には、白麻地に縦縫模様を施した帷子を着て、提帶を背後で両輪に結び、その結びあまりの両端に板目紙の芯を入れて棒状にし、それを腰の左右に水平に突出して、腰巻の袖を通してある。

⑧ 薄萌黃色縮緬地御所車に草花流水模様繡小袖

江戸時代後期  
一領

福井市春嶽公記念文庫蔵

⑨ 白縮緬地紗綾形文藤桜牡丹模様繡小袖

江戸時代後期

一領

⑩ ともに、松平春嶽夫人勇姫着用の小袖である。江戸時代の女子の服制では、四月一日より五月四日まで袷、五月五日より八月晦日まで单、九月一日より九月八日までは袷、それより二月晦日までは綿入の小袖を着用することになつていた。ここに示した二領の小袖は、春秋の袷である。

〔その他の重器類〕

⑧伝瀬戸二代藤次郎基通作 茶壺 銘「初花」

室町時代中期 口径一一二・高三四・七 一口

越葵文庫蔵

元和元年（一六一五）五月、福井二代藩主松平忠直は、藩兵一万五千を率いて大阪夏の陣に参戦、重立つた敵の首四七〇余級をとり、大阪城内へ一番に突入するなど、諸侯中第一の戦功をあげた。その功を賞した徳川家康が、恩賞として忠直に贈ったのが、この茶壺である。ひびわれを修補したあとがあるのは、帰陣後忠直がこの恩賞では決死の奮戦をした群臣に報いようなしとして、投捨て破損したためであると伝えられる。古来、越前松平家第一の重宝として名高い。

(1) 茶壺 銘「初花」（瀬戸鉄釉貼花文四耳壺）

「初花」との銘は、姿や釉色が端整優美で、天下の春にさきがけする初香の名花のようであるとして、名付けられたものという。外箱の蓋裏に「花藤四郎御壺」とあり、瀬戸の二代藤次郎基通（真中古）の作として伝来したものであることが知られる。肩から胴にかけての花模様は、型抜きで貼付け、竈で芯を刻んだ貼花文である。

一点

⑨大呂寸茶壺（黄緑褐蛇掻釉四耳壺）  
明代 口径一二・六 高三九・八 一口

越葵文庫蔵

近世初頭の桃山時代は、かずかずの茶陶による多彩な饗宴のくりひろげられた時代である。「ルソン壺」は、この桃山時代を中心に海外から舶載された陶製器で、肩に四耳を付し、高さ一尺程のものが多い。厳密には、当時の貿易船がルソン（フィリピン）を経て来航したため、ルソン製と誤られたもので、実は南方シナの産と推定されている。

忠直  
卿ナリ  
大坂夏御陣御戦功ニ付、従三東照宮御手自西巖院殿御拝領之處、群臣ノ功勞ニ賞与スベキモノ無レ之  
とて、此御壺ヲ御玄関ノ前へ御拋却相成、後修補して  
当家の第一の重宝トナルナリ。

明治六年六月

十五代孫  
正一位松平慶永（花押）

(3) 堀 正法筆 御茶入日記

本茶壺は、二重の箱で厳重に保護されているが、桐溜塗の内箱蓋裏に貼られた茶入日記である。筆者の堀正法は、春嶽の時代、福井藩から拾人扶持を給された宇治茶師である。従つて、「文中の「巳」五月吉日」は、弘化二年（一八四五）または安政四年（一八五七）の五月と推定される。

宇治茶師は、葉茶や抹茶の生産を業とし、特別の伝統と社会的地位を誇っていた。幕府や諸大名から禄を給され、その御用のみをつとめ、自家の製茶を一般に販売することは決してなかつた。堀家は、禁裏御所御用または幕府御用のために定められた御物茶師一家の中に属する名門茶師であつた。

存したのである。

徳川将軍家から福井藩主が拝領の品で、『松屋名物集』『柳嘗御道具寄帳』等に、大名物として記録されている。大呂寸茶壺とは、大ぶりなルソン（ルスン）壺の意”

⑧伝太田道灌所用 琵琶 銘「千鳥」

室町時代中期 全長六八

一点

越葵文庫蔵

福井藩老太田安房守から福井初代藩主結城秀康に献上されたものと伝えられる。福井藩士太田安房守家は、太田道灌七代の子孫資武の時、秀康に召出され、三千石を給されたのに始まる。のち知行六千石まで累進したが、福井藩領が半減した所謂「貞享の大法」に際し、浪人となつた。

⑨御拝領御大切之御細工物

三十点

福井市春嶽公記念文庫蔵

天保九年（一八三八）一一月二三日、一一歳で福井一六代藩主に就任した松平春嶽は、江戸城田安門内の生家田安邸から常盤橋の福井藩邸へ引移つた。幼くして両親の許を離れ、この日より見知らぬ家臣達にかこまれて暮らすこととなつたのである。引移りの朝、春嶽は初めて江戸城大奥へ登り、家齊・家慶新旧将軍に拝謁して就封の御礼を申し述べた。春嶽の伯父・従兄弟にあたる両将軍は、幼くして他家の養子となる一族の少年が、よほどかわいかつたものとみえて、挨拶に出た春嶽に御祝として「恒次」の太刀・松鶴鹿図蒔繪印籠などの品を贈つたが、特に春嶽の年令を考えて与えたのが、こ

の銀細工を中心とする極小玩具類であつた。

総数七六点からなり、銀のほか金・赤銅・象牙・水晶・珊瑚等を用い、一つ一つ和紙にくるんで、四段重ねの木箱に収められている。箱蓋中央には「御拝領御大切之御細工物」とあり、その周囲に成人後の春嶽の筆で、「天保九年戊戌十一月二十三日慶永当家へ引移り、其日朝登城従二平川口一家齊公家慶公謁見、御手自拝領、大奥より預り、慶永手記」と由緒が書付けてある。

どれをとつても、その精細な技術に驚嘆のほかないが、一流の技倆を持つ職人が、将軍家の注文を受けて、一つ一つ心を込めて作りあげたものであろう。

⑩オルゴール付き枕時計

一四・七×一二・三×八・五 一基

福井市春嶽公記念文庫蔵

嘉永元年（一八四八）四月、一二代家慶将軍から、松平春嶽が拝領した品である。家慶将軍は春嶽と従兄弟どうしで、春嶽を幼い弟のように処遇したから、こうした珍しい賜物が数多く伝えられている。

枕時計という名称のとおり、将軍が就寝時枕許に置いたもので、紫檀製の外枠と、一本針の和時計やその機械部分は、すべて国産である。時計下部には舶載のシリンドラー式オルゴールが組込まれていて、和時計と連動し今日でも美しい音色をかなで、曲目は「茉莉花」という支那の古い民謡である。シリンドラー式のオルゴールは、嘉永年間にオランダから輸入され、その後しばらくしてから国産品が登場したという。こ

のオルゴールも、舶来品に相違ないが、嘉永元年四月の拝領ということになると、日本の職人が和時計と連動する精巧な仕掛けを作ったのは、それより前で、従つて輸入された時期も定説の嘉永年間をさかのぼることとなり、恐らくこの型式のものとしては、日本で最古の部類に属するオルゴールと言うことが出来る。蘭人が将軍にオルゴールを献上するのに、耳なれぬ西洋の音階ではなく、同じ東洋の曲目が組込まれたものを選んで持参したものであろう。

なお、旧藩士で維新後松平家の家令をつとめ、のち初代福井市長となつた鈴木準道が、左の箱書を付している。

「家慶卿御拝領御枕時計

嘉永元年戊申四月二十八日、慶永公江都より御国許に御発駕に付、神田橋御邸浅姫君様へ御暇乞に被<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>入、夫より直ちに御発駕に相成り、神田橋御門外迄御立の処、俄に浅姫君様御用にて御呼戻に付、御立ち帰之処、家慶卿御思召に御拝領之旨浅姫君様より御伝に相成る御秘蔵器也。

奉命鈴木準道謹書

⑤松平春嶽手廻諸道具類

二〇点

福井市春嶽公記念文庫蔵

福井市春嶽公記念文庫には、松平春嶽が日常馴れ親しんだ手廻りの品々二〇〇余点が、当時のままに保存されている。それらは、春嶽の性格や趣味を反映して、きらびやかさを抑えた、渋い雰囲気のものが多いが、ここには「蛇長石」をはじめとする薬入れ類、春嶽夫人勇姫・実母青松院などの肖像

写真を収めた舶来黒皮張り写真入れ類、清人姚江沈より贈られた蓮模様犀角盃、十四代藩主松平齊承長女菊姫の遺品である銀製矢立、文房具類、舶来科学器機類などを収載した。

⑥弘前藩主津軽承昭夫人所用 桜花模様染付絵道具 一式

福井市春嶽公記念文庫寄託 弘前藩主津軽承昭夫人尹子の遺品として、津軽家から春嶽に贈られたもの。津軽尹子は近衛忠熙六女、また津軽承昭は熊本藩主細川齊護の四男で、春嶽夫人勇姫の実弟にあたる。

⑦島 雪齋作 松平春嶽所用品類 九点

福井市春嶽公記念文庫蔵

「島 雪齋」

文政三年（一八二〇）越前三國湊の大工清治郎の子として生まれた。幼名又吉、雪齋と号し、後年法橋を授けられた。一歳の時父と死別したが、彫刻に志を立て、三国の志摩乗時に入学して修業、自宅で彫刻業を開いて後も、加賀大野の弁吉や長崎の篆刻師石齋について学ぶなど、その修練を怠らなかつた。そのため、またたく間に名工の評判を得、春嶽に見出されて御手許御用職人に取り立てられ、春嶽に従つて江戸や京都に赴き、作品を皇室や將軍に献上し、貴顧の知遇を得た。維新後、オーストリアのウイーン万国博覧会へ野馬の置物を出品し、一等賞に選ばれるなど、その実力を海外でも發揮したが、明治一二年六〇歳で病歿した。

(1)柿本人麻呂座像

高一二一

柿本人麻呂は、古くより歌聖と仰がれ、平安時代以降は、人麻呂の像を祭つての宗教的行事が挙行されるに至った。国学や歌道に造詣の深かつた春嶽も、御抱職人雪齋に命じてこの像を彫らせ、歌聖と敬仰して奉祭していたものと思われる。

(2) 百老竹置物 高二六・五

(3) 橘曙覽和歌彫付竹製鳩杖 長一二一九

鳩は餅をついぱむ時、決してむせばぬ鳥であると考えられたことから、古来老人の杖の頭に鳩を彫付けることが行われた。本品は、春嶽のため御手許御用職人の島雪齋が製した鳩の杖で、橘曙覽の男山の和歌が刻まれている。

(4) 筆架類

三点

上・中は黒檀製で蓮形及び靈芝形、下は水牛角製で觀音形をしている。雪齋は本来社寺建築裝飾物など、大型のものを懸けていたが、一方では根付のよくな織細緻な彫技を要求される小物類の製作を得意とした。春嶽は、そうした精緻な技を駆使した雪齋の作品を愛好し、文具をはじめ各種の日常手沢品中に、雪齋の手になる小物類が多く含まれている。

(5) 紫檀・竹製矢立 長一九・五 (紫檀)  
(6) 伽羅製白衣觀音形線香立 高五・五

⑧男女人体模型 (キュンストレーキ)

十九世紀中葉 高(男)一七一(女)一四五

二体

福井市医師会寄託  
キュンストレーキとは、オランダ語で紙製人体模型のこと

である。男体は万延元年（一八六〇）福井藩が当時の金八百両で、長崎の蘭館医を通してフランスより購入し、女体は明治二年（一八六九）に購入した。現在同種のものは、金沢と長崎の兩大学に残っているのみである。当時の医学学生は解剖学を習うのに刑屍を使つたものであるが、それも藩の厳重な許可を要し入手困難であつたので、やむなくこのような模型を使つていた。両体とも極めて精巧に出来ており、血管・神経・筋肉・臓器等にラテン語・フランス語で原名が付されている。男体は一部腐蝕しているものの、ほぼ旧体のままであり、女体は一見新しく見えるが、これは昭和初期塗装修復されたからである。

⑨四老公肖像写真(衝立)

（衝立）三六・五×五〇・五 （写真）一〇×七・二 一基

福井市春嶽公記念文庫蔵

かねて英明の譽高かつた徳川慶喜は、慶応二年（一八六〇）一二月、一五代将軍に就任するや、天下の耳目を一新するような幕政改革を次々と断行し、その非凡な才能を發揮した。慶喜の強力な幕政刷新を目的とした倒幕派雄藩は、大いに警戒心を深め、とくに薩摩の小松帶刀・西郷隆盛・大久保利通らは、岩倉具視と連繋し、當時政界に強い影響を及ぼし得る、松平春嶽・山内容堂・伊達宗城・島津久光の四人（いずれも隠居などの立場にあり、老公と称された）を、朝命をもつて京都に集め、時局打開策を協議せしめて主導権を掌握し、幕府の新体制を圧迫せんとはかつた。

こうして、慶應三年五月朝命を拝して京都に会同した四侯

は、数回の会議を開き、政局について協議したが、相互に立場の相違があるなどして、一致の決論を見出すことは困難で、めざましい成果をあげることは出来なかつた。

その間の五月一四日、將軍慶喜は上京した四侯を慰労するため、二條城に招いて饗應し、写真師横田彦兵衛を召して、記念のため四人を撮影させたのが、この写真であり、写真師が彩色を施している。

後日、四葉の写真を拝領した春嶽は、それを紫檀製の小衝立に仕立てさせ、自ら裏書や四侯の略歴を付記して後世に伝えた。四侯の肖像を比較すると、それぞれ史上に伝えられる通りの人柄がよく表れていて、興味のつきないものがある。

⑩笠原白翁所用 木製堆朱暗箱形写真機

江戸時代末期 三三一×一〇一×一四  
一台

東京都 新田陽子氏寄託

わが国種痘史上の先覚者として著名な蘭方医笠原白翁が、幕末期より所持したガラス乾板使用暗箱式の写真機である。

笠原家の伝によれば、文久三年（一八六三）白翁が美濃の写真師より買受け、福井城下浜町（今の中川三丁目付近）で希望者の撮影に応じたものという。わが国當業写真師の開祖下岡蓮杖が、横浜で最初の写真館を開業したのが文久二年のことであつたから、白翁の写真術習得も極めてはやい時期に属することが知られる。

四、武具・馬具  
⑪紅糸緘脇当

室町時代中期 全巾二五  
一台

東京都 新田陽子氏寄託

脇当は、甲冑着用の際、脇の下を防備するため用いる小具足（鎧・腹巻などの下に着る小道具）の一つである。

新田家に、新田義貞ゆかりの脇当として伝来したこの品は、

金物の手法や緋糸、各部の形状などから見て、室町中期、応仁の頃（一四六七～六八）をさほど下らぬものと考えられる。牛皮をもつて三山形を作り、その表に金銅板をかぶせた冠板（上部の金属板）は、魚子地（魚の卵の粒を並べたような地肌）に牡丹の彫りが施され、小札は牛皮に黒漆、色はあせて

いるが紅糸緘であり、往時のはなやかな意匠が偲ばれる。

今日、現存する脇当のほとんどが江戸時代のものであるだけに、研究者の間では脇当中最古の、しかも最も優れた遺品として注目されている。

⑫桐崩紋銀象眼骨牌札脛具足

福井市春嶽公記念文庫蔵  
一領

松平春嶽所用の具足で、桐の崩紋を布目象眼した長方形の鉄札（骨牌札）を鎖で繋ぎ、場合によつては胴と草摺部分を折畳み可能にしてある。写真では内部を窺うことが出来ないが、この具足を着装するには、まず上半身を限無く覆う細密な鎖帷子を着込み、胸から腹を覆う分厚い鉄板の脇当をつけ、その上からこの脇具足をまとうようになつていて、主要部は幕末に輸入された高性能の小銃弾でも、絶対に貫通しないよ

う、三重の防禦が施されており、春嶽の気風を偲ぶに足る実戦即応・実用本位の優品である。

93 葵葉模様顯紋紗夏用陣羽織

越葵文庫蔵  
二領

陣羽織は、武将や上級武士が、陣中で具足（よろい）や小具足の上に着用したもので、室町時代中期以降、用いられるようになつた。古くは袖付であつたが、次第に袖無しとなり、安土桃山時代には派手な世相とあいまつて、名ある武将がそれ／＼趣向をこらし、非常に華麗で斬新なデザインが工夫され、武装の一種として不可欠のものとなつた。

本品は、いすれも福井藩主所用のもので、背に銀製の葵紋や蒔絵の蜻蛉を大きくあしらつてゐる。

94 白糸緘陣羽織

一領

福井市春嶽公記念文庫蔵

松平春嶽所用の珍しい形式の陣羽織である。通常陣羽織は、布製袖無型のものが一般的であるが、これはむしろ陣羽織型のよろいと称してよい。牛皮を黒漆で厚く塗り固めた大型の小札を、白糸で緘したてたもので、これのみでも刀槍の攻撃には十分堪えられる。首のまわりが立衿<sup>たてえり</sup>なのは、陣羽織の特徴であるが、表地を白羅紗としたこの衿の中には、甲冑の立衿と同様に亀甲型の鉄片が縫込まれていて、頸部の防禦も配慮されている。漆黒の小札と純白の糸を主体としているだけに、わずかに裾部に配した赤糸や裏地に用いた真紅のビロードが、誠によく映え、春嶽の遺品としては珍しく華麗である。

95 葵紋散雲形模様錦具足下袴

越葵文庫蔵  
一領

福井藩祖結城秀康所用と伝えられる甲冑着装時の袴である。葵紋の形態が古式で、その伝来の古さをもの語つてゐる。

96 太刀銘「恒次」 長七〇・九

福井市春嶽公記念文庫蔵  
一口

天保九年（一八三八）一一歳にして福井藩を相続した松平春嶽が、同年一月二三日初めて江戸城に登り、前將軍家齊・將軍家慶に就封の挨拶をした際、新旧將軍から拝領した太刀である。恒次は鎌倉時代初頭（一二世紀初）、備中青江派の名工である。わずかに摺上げてあるが、品格の高い健全な刀姿は、現存する恒次の作刀中、最高の傑作と評価されている。

97 太刀銘「康光」 長七四・一

福井市春嶽公記念文庫蔵  
一口

もと、夭折した四代藩主齊承の長子於義丸（超倫院）の所用で、のち松平春嶽の佩刀となつた。康光は室町初期（一四世紀末）備前長船の刀工。表裏に棒槌と添槌を彫り、全体に細目の優美な刀姿である。

98 刀 無銘 伝来国光 長六三

福井市春嶽公記念文庫蔵  
一口

松平春嶽常用の佩刀の一つで、次に掲げる信国の脇差と大小をなす。刀身の表裏に棒槌を彫り、摺上げてある。来源は鎌倉時代末期（一二世紀末）を代表する京鍛冶で、本刀は無

銘であるが、古來その一派の国光の作刀と鑑せられている。

最近の研究では、来派の名工の作に相違ないが、むしろ国光より古い代の作かと考えられている。

もと一四代藩主齊承の佩刀でもあつた。

⑨脇 差 銘「信 国」 長三八・五 福井市春嶽公記念文庫寄託 一口

前掲来国光と大小をなす松平春嶽常用の脇差である。信国は吉野時代中葉（一四世紀中頃）山城国の名工で、刀身は鶴の首造り、表裏に不動明王を示す梵字と難刀櫛が彫られている。もと一四代藩主齊承の佩刀であつた。

⑩脇 差 銘(表)「南蛮鉄於武州江戸」(裏)「越前康継」 福井市春嶽公記念文庫蔵 一口 長三三・六

福井市春嶽公記念文庫蔵

新刀隨一の大業物として著名な初代越前康継の優品である。

初代康継は、通称下坂市左衛門、近江国坂田郡下坂村の人。

慶長五年（一六〇〇）福井藩祖結城秀康の御抱鍛治となり、

越前に住して作刀した。慶長一・二年頃、徳川家康に召出され、江戸でも作刀、家康から「康」の字を賜わり、名を康継と改めた。また、刀の中子に葵紋を切ることを許され、以後江戸と越前を往復しつつ両地で鍛造に従事した。元和七年（一六二二）歿。

本脇差はもと尾張徳川家の藏品。昭和九年七月一七日、初代春嶽公記念文庫主松平慶民が式部長官拝命の際、実弟に当る徳川義親（尾張家当主）より祝として贈られた。

⑪短 刀 銘「国 光」 長一四・五 福井市春嶽公記念文庫蔵 一口

福井一三代藩主松平治好が、將軍家齊から拝領の短刀である。国光は新藤五の称で知られ、短刀の名人として著名である。鎌倉末期（一四世紀初頭）の相模國を代表する刀工。細

直刃の品格高い刀姿で、表に護摩箸、裏に腰櫛がある。

⑫刀 無銘 長八二・五 芦屋市 横井和子氏寄託 一口

文久元年（一八六二）四月、江戸に上つて靈岸鳴邸幽居中の松平春嶽に進講した横井小楠が、江戸を去るに当つて春嶽より拝領した刀。鞘上に、小楠の筆で左の由緒が記されている。

中納言秀康卿越前御入部之年、御家老永見右衛門尉に壹万石之御加増御礼として代々相伝之刀を奉獻す。宰相忠昌卿之御差料と成り御代々御相伝、文久元年八月十五日 春嶽老公由来を述べ給て、御手から給りしもの也。

小楠謹識

⑬鯉鱗包鞘大小拵付蛇皮包・石地塗青貝梵字入替鞘 一具 福井市春嶽公記念文庫蔵

松平春嶽常用の大小拵で、もとは十四代藩主松平齊承の佩刀。服装やその日の気分により、三組の鞘を差し替えることが出来た。従つて、写真の三種の拵に付属する柄・锷・割笄などは、すべて同一のものを差し替え撮影したものである。

(1)鯉鱗包鞘大小拵

大鯉の鱗一枚一枚貼付け、金泥をまぶした上から、透

明漆で仕上げをした珍しい外装である。柄は白鮫、目釘は金で、大は赤胴色絵の独鉄、小は赤胴洲浜の目貫を、黒の柄糸で巻いてある。鞘上の帶止（逆角）は四分一製の葵紋彫り、栗形・鎧は同じく四分一製薄模様である。

(2) 蛇皮包替鞘

熱帯産の錦蛇の皮を巻いた替鞘である。鯉口・栗形・鎧等は、四分一製石目模様。四分一は、わが国独特の合金で、銅三・銀一を混じたもの。表面に暗褐色の被膜を生じ、美しい光沢をもつ。臍銀などとも称する。

(3) 石地塗青貝梵字入替鞘

古くより青貝梵字入と称されているが、篆書の一種と考えた方がよいようである。安政五年（一八五八）二月、春嶽の請に応じ、大垣戸田家の菩提寺全昌寺から転じて、福井藩祖結城秀康の菩提寺であつた福井の孝顯寺の住持となつた鴻雪爪は、春嶽のこの大小摺に関し、次のような回想を口述している。

公は最初篤胤の書を読み、仏法を嫌ふて居られましたが、追々私の説を容れ、国事をも談ずるに至りまして、或る日公が寺へ参られ、佩刀の鞘に仏語を書きたるものを見せられましたから、私が「以文飾レ武真成好。英断如レ刀開国人」という詩を賦して答へたことなどあり（以下略）

（『史談会速記録』三五輯）

⑩ 雑 刀 銘「長曾弥興正作之」「元禄二年一月吉日」 一振

越葵文庫蔵

長曾根興正は、江戸期を代表する刀工長曾根興里入道虎徹の門人で、のちその養子となつた著名工である。

⑪ 片鎌槍 銘「廣 正」 刀長二六・七

越葵文庫蔵  
松平春嶽夫人勇姫所用。栗田口近江守忠綱は、江戸初期、摂津国の著名工。

⑫ 片鎌槍 銘「廣 正」 刀長二六・七

越葵文庫蔵

広正は、室町時代中期（一五世紀中葉）の相模国の名工で、本槍は三代藩主忠昌が、大阪夏の陣において自ら敵三人を突破せる武功をたてたものとして名高い。

元和元年（一六一五）五月、大阪夏の陣の際、藩主松平忠直の弟として一七歳で参戦した忠昌（当時姉ヶ崎一万石城主）のち福井三代藩主）は、越前勢の先頭をきつて敵陣へ突撃し、この槍をふるつて抜群の勇猛ぶりを發揮した。しかし、大阪城桜の門から城中一番乗りの後、忠昌に一騎討ちを挑んだ念立左太夫は、大阪方屈指の大兵強力の剣豪で、忠昌はもと十文字形であったこの槍の片方の鎌を打ち折られ、念立に組伏せられるほどの苦戦に陥った。その時、忠昌に随従していた吉田五左衛門は、念立を背後から組みとめ、忠昌に自分と共に敵を刺貫くよう願つたから、忠昌はようやく念立の首級をあげることが出来た。

五左衛門の決死の忠義心に感激した忠昌は、その場で五左

衛門に念立の類当を与えて後日の証拠とし、のち忠昌の馬の口取という軽輩であつた五左衛門を、二百石取りの士分に取立てた。

念立との激戦の間に、一方の鎌を欠損し、片鎌となつたこの槍は、藩主自ら乱戦の中に勇戦したことを示す名譽の標識として、以来修補されることなく、越前藩主の供立行列の際は、必ずかざし歩くことが通例となつた。

⑩ 鎔銅勝字銃筒 長五五・八

一挺

丸岡町 原寛治氏寄贈

銃身の後部に長い柄をつけ、差し火で点火して発砲する手銃である。伝来は不詳であるが、「万曆癸未(天正十一年一五七〇年八月)」「勝字」「匠豊年」等の銘があり、文禄・慶長の朝鮮の役(文禄元年九二〇年—慶長二年九八〇年)に、明・鮮軍が使用したものと思われる。

朝鮮の役当时、明・鮮軍は、まだ大口径の大砲の製造が、技術的に困難であったため、もっぱらこうした手銃を主力火器として用いていた。当時の日本や明の文献に「勝字」「雙穴」「三丸」「百子銃」等の名で見えるのが、それである。しかし、照準具・銃床(銃身を装着する木製の部分)・引金もない原始的な銃であつたため、日本軍使用の長銃身で、照準具・引金・銃床などを具えた精巧な火縄銃と比較すると、射程距離・命中率・貫通力など、いずれもはるかに劣り、苦戦をいられた。

⑪ 先込雷管式エンフィールド銃

一挺

越葵文庫蔵

撃鉄で発火薬の雷管を爆発させ、発射する方式の雷管式銃は、フランス士官ミニエが開発したもので、イギリスでも一八五三年(嘉永六年)以降、その改良型が軍の制式小銃として採用された。これをエンフィールド銃という。

この銃は、英國ブリストル製のエンフィールド銃で、一般兵卒の使用した量産銃と違い、吟味した仕上げとなつている。福井藩では、安政四年(一八五七)以降、佐々木長淳を製造局頭取に任命して本格的な洋式銃製造を開始し、明治までに数千挺を生産して他藩の注文にも応じ、すぐれた命中精度を誇つたが、これは、福井藩がそうした銃器製造の見本として輸入した高級銃の内の1挺と思われる。

⑫ 菊花蝶文様蒔絵鞍・同鐙

一組

越葵文庫蔵

「宝徳二年(一四五〇)乾月十六日 貞仲」の銘があり、室町中期伊勢国(の鞍師の作である。菊の花や蝶をあしらつた豪華な蒔絵は、江戸時代中期のものと考えられる。

⑬ 葵紋付昇龍文様蒔絵鞍

一点

越葵文庫蔵

「万治二年(一六五九)八月作」の銘があり、その製作年月よりいつて、四代藩主松平光通の所用と考えられる。

⑭ 鉄製銀野馬模様象眼鏡

一对

(12) 鉄製銀波涛に雁模様象眼鏡

一対

越葵文庫蔵

鏡は、古く舌が短い（沓込部分が短い）壺鏡や袋鏡が用いられたが、鎌倉時代以降、より実用に適した舌の長い舌長鏡が開発され、一般的となつた。

この鏡は、加賀（石川県）の鍛師によつて製作された加賀象眼鐵製のもので、見事な銀象眼（部分的に銅）が施されている。加賀の象眼は、藩主の振興策もあつて、江戸初期すでにわが国有数の技術と生産を誇つていた。技法的には「平象眼」を主とし、ことにこうした鐵鏡にすぐれた作品が多く、加賀藩主から幕府や諸侯への贈答進物用品の第一級品として珍重された。

(13) 洋式軍装馬具

一组

福井市春嶽公記念文庫蔵

幕末の仏公使ロッシュが、十五代将軍徳川慶喜に献上したフランス製馬具である。

慶應三年（一八六七）八月四日、松平春嶽は徳川慶喜から「兵庫開港につき尽力を感謝す」として、純金鎖付懐中時計とともにこの馬具を拝領した。

当時フランスは、英國の対日政策に対抗して、幕府援助策を推進していたが、この馬具は、そうしたフランスと幕府の関係を示すものとしても興味深い。

五、記録・古文書

(14) 新田家文書

東京都 新田陽子氏寄託

新田氏の一族新田岩松家に伝來した古史料である。新田岩松家は、新田義貞六代の祖義兼より分かれた家で、その十代目満純は義貞の曾孫と伝えられる。義貞をはじめとする新田氏宗家衰亡後、十二代家純が足利義教（室町幕府六代將軍）より、新田氏の直流と認められ、「新田」を号することを許された。

江戸時代には、幕府より上野国（群馬）新田郷において百石を給され、明治維新に際しては、二十五代俊純がいちはやく一族を率いて官軍に協力し、戊辰戦役に活躍した。そのため明治十七年に至り、男爵を授けられ華族に列せられた。

(1) 正木古文書（新田岩松家文書）

四卷

新田岩松家に伝來した鎌倉時代初頭より室町時代中期にかけての古文書を、年代順に貼込んである。室町時代後期、家臣正木某が預かつて戦乱を避け、江戸時代中期に至つたので、正木古文書の名が生じた。

内容は、新田氏一族の所領譲状を中心とし、新田氏の研究、特にその領地の開拓、歴代の所領相続の次第、一族間などにおける領土譲渡に関する法例等々を研究する上で、好個の史料集と言える。

なお、本史料は、江戸中期の写本であるが、原本が所在不明の今日、唯一の貴重史料である。

(2) 徳川家康折紙状

一通

天正十八年（一五九〇）七月二十三日付、新田治部大輔

守純宛。家康関東入国に際し、新田守純が呈した新田家再

興の願書に対する返書。

(3) 慈眼大師（天海）折紙状

一通

正月二十日付、新田治部大輔宛。

(4) 春日局折紙状

一通

九月七日付、岩松治部宛。

「新田岩松家と天海・春日局の関係」

江戸時代初期の新田岩松家当主守純は、自家の再興を願つて家康に嘆願したが居所地二十石を拝領したのみで志をとげなかつた。守純の子豊純も病弱のため、父の遺志を継げず、その子秀純の時、かつて守純と親交があり豊純の手習いの師であつた天海と、上野国新田郡徳川郷満徳寺に帰依していた春日局が新田氏の衰亡を惜しみ三代将軍家光にとりなし、ようやく四代将軍家綱の時、新たに新田郡田島郷に百石を加増された。ここに収載した天海・春日局の書状は、この間に秀純の父豊純にあてたもので、二人は困窮していた新田家に物心両面から援助を与えた。

一通

(5) 新井白石折紙状

四月十五日付、岩松満次郎宛。

「新田岩松家と新井白石の関係」

新井白石は、儒学者・政治家であると同時に著書『古史通』や『読史余論』で知られるように、史学者としても深い造詣を持っていた。ここに掲載した白石の書状は、のちに八代將軍吉宗から正木古文書の拝見を許された岩松富純に宛てたものである。鎌倉以来の名門である新田家と親交

(1) 金屋家文書  
「金屋家」

江南市 金屋慶治氏寄託

を結んだ白石は同家の旧記を調査し、「新田岩松家記事」と題する一書を著わしている。

金屋家は、同家の系図によれば、はじめ北の庄氏を称し、室町時代初頭より福井にあって朝倉氏に仕えていたという。

七代吉正（弥助）の時、金屋を名乗り、「鉄剣萬物諸商」業をはじめ、福井藩祖結城秀康の北の庄築城に協力、御用商人に取り立てられた。以後、代々福井藩の御用をつとめ、苗字帶刀を許され、福井城下のほか三国・鯖江などにも多く出店を持ち、のちには京都にも支店を営業するなど、豪商として全国に聞こえた。

四代藩主光通の時、当主七兵衛吉広は、わが国最初の福井藩寛文札の元締となり、足羽山の一画に別荘地を与えられていた。藩に多くの御用金を收め、上方の名商角倉と婚姻を結び、紀州家など、他国の大名へも貸付けを行うなど江戸中期頃全盛をきわめたが、のち次第に衰微した。

一〇点

(1) 福井藩々札

江戸時代、財政難のため金銀貨等の現金の不足に悩んだ各藩は、幕府の許可を得て藩内だけに流通する紙幣を発行した。これを藩札といい、ほとんどの藩が発行に踏切つた。福井藩では、寛文元年（一六六一）城下第一の豪商金屋氏を元締として、諸藩に先立ち、ここに収載した日本最初の藩札を発行し、明治維新まで次々と数十種類を流通させ

た。

(2) 金屋家十・十一・十二代当主肖像画

江戸時代前期～中期 絹本着色

三幅  
一通

(3) 福井四代藩主松平光通朱印状

寛文十二年（一六七二）三月日付、金屋七兵衛宛

一巻

(4) 足羽郡賀茂御立山之内被下置御朱印地の絵図  
寛文十二年（一六七二）三月日付、金屋七兵衛宛  
福井四代藩主松平光通の朱印状と、それに付属の絵図で  
ある。この時金屋家は、賀茂山（現在の足羽山の一部）の  
内に、百五十間（約二七〇m）四方の土地を拝領し、ここ  
に別荘を造営した。

⑯ 栗崎家文書

福井市 栗崎道夫氏寄託

「越前栗崎家」

わが国の外科医術は、応仁年間（一四六七～六八）以降  
各地に戦乱が相次ぐ中で、戦傷者の手当を専門とする金瘡  
外科として発達したが、室町時代の終り、鉄砲・キリスト  
教伝来と共に西洋の医術が移入され、それまでの金瘡外科  
よりはるかに優れた南蛮外科がその主流を占めるに至った。

南蛮外科は、金瘡医が用いた傷口の縫合や蒸留酒  
による瘡傷面の洗滌・消毒など、その優秀性が高く評価さ  
れて広まり、キリシタン禁令後も栗崎流・忠庵流などの諸  
流によつて命脈を保ちつつ、やがてオランダ外科の導入と  
ともに発展的解消をとげた。

中でも、南蛮帰りと称する栗崎道喜を祖とする栗崎家は、  
安土・桃山期から江戸の初期を代表する南蛮外科医として  
知られ、その子孫が長崎・江戸・熊本・越前・平戸などの

各地に学統を伸長し、幕府の医官や各藩の藩医として活躍  
した。

越前には、二代栗崎道喜正勝が、福井四代藩主松平光通  
に招かれてその医官となり、のち平戸に帰るにあたつて、  
高弟道察に娘を配して福井に留まらせ、これが越前栗崎家  
の祖となつた。従つて、越前では近世初期以来、わが国一  
級の南蛮外科が行われたのである。

(1) 栗崎道喜（二代）筆 「金瘡外科一流之事」秘伝書  
寛文六年（一六六六）三月付、寺野八兵衛宛

一巻

(2) 栗崎道喜（二代）筆 「金瘡師語録全書」

一冊

(3) 栗崎道喜（二代）筆 「南蛮流金瘡口伝目録」  
貞享四年（一六八七）三月付、栗崎道察宛

一巻

(4) 栗崎道喜（二代）筆 「家流金瘡秘伝書」  
右 同

一綴

(5) 「阿蘭陀口和書」

一綴

(6) 越前栗崎家伝來 南蛮流医具類

四点

⑰ 山口家文書

横須賀市 山口晴巳氏寄贈

東京都 石川絢子氏寄贈

「山口家」

江戸時代中期以後の福井城下を代表する商家。享保年中  
(一七一六～三五) 初代彦四郎が南条郡湯尾駅付近から出  
て、福井城下の米町に居を構え、米穀商を開業したのには  
じまる。安永・天明期(一七七一～八八)、三代小右衛門の  
頃に商売を大いに拡張し、安永八年(一七七九)五月には、

福井藩から御米問屋役を命ぜられ、年間一万俵を取扱うまでになつた。以後、幕末に至るまで、代々御米問屋役を勤めると共に、米町市場締役・御札所（藩札）元締役などを

歴任し、福井を代表する商家として活動した。

(1) 越前太守山口家御成之図

天保十五年（一八四四）十二月二十一日付

一幅

橋曙覽（尚事）贊 紙本着色

越葵文庫蔵  
一帖

(4) 「式部史生秋篠月清集」古写本

伝慶雲筆 安貞二年（一一二一八）五月一日の奥書がある。

越葵文庫蔵  
一帖

(10) 「源氏物語」古写本

「あさかほ」の巻 伝後伏見天皇（正応元年（一二〇〇）延元々年八八〇）御筆

越葵文庫蔵  
一帖

(20) 「源氏物語」古写本

「にほふ宮」「うす雲」の巻 伝一條為定（一條家祖為氏の曾孫。室町初期の人）筆

越葵文庫蔵  
二冊

(2) 山口家譜 紙本墨書き

二冊

初代彦四郎が、享保年間に福井城下米町に一家を創設して以降、文久二年（一八六二）十二月二十一日に至る間の山口家の家史である。幕末安政年間（一八五四～九）頃から編集・書継ぎと思われるが、江戸中期以後、新たに興隆した御用商人の史料として貴重である。

(3) 「上金銀・永上金銀・調達金銀・御用金銀・御講加入銀共覚」

一綴

天明六年（一七八六）～元治元年（一八六四） 山口家七代彦三郎記。

七代彦三郎記。

(2) 「続千載和歌集」古写本 伝周興筆

越葵文庫蔵  
一卷

(22) 「詠歌之大概」古写本

越葵文庫蔵  
一冊

伝細川幽齋筆。幽齋は名を藤孝、別号を玄旨と称し、足利十五代將軍義昭を奉じ活躍した安土桃山期の武人である。のち、豊臣秀吉・徳川家康の知遇を受け、丹後田辺城主となつ

た。忠興の父。和歌をよくし、家集に『衆妙集』があるほか、著書多数がある。

建武二年七月五日（花押）  
和田平太殿

⑫『扶氏経験遺訓』写本

東京都 笠原健雄氏寄贈  
四冊

十九世紀初頭のドイツを代表する名医フーフエランド（一七六四～一八三二）の著書で、フーフエランド五十年の医学経験をまとめたものである。各国語に訳され多くの版を重ねて、わが国にもオランダ語本が伝来したが、安政四年（一八五七）に緒方洪庵の訳本が出版されるまで、きわめて入手困難な貴重本であった。

本書は、大阪緒方洪庵の適塾生であつた山本清仲が、嘉永四年（一八五二）六月から同六年四月までかけて筆写したもので、清仲が笠原白翁の養子健蔵の依頼で写した旨の奥書きがある。しかし、実際には嘉永四年春頃、笠原白翁が適塾在学中の橋本景岳に依頼し、景岳の人選によつて、山本清仲が筆を起したものである。翻訳本に頼らず、自ら原書によつて研究しようとした、白翁の学問態度を、よくもの語るものである。

〔記録・古文書〕  
⑬足利尊氏在判御教書

越葵文庫蔵  
一通

新田義貞以下誅  
伐事不日馳參可  
レ致「軍忠」之状如レ件

建武二年（一二三三五）八月、北條時行征伐のため、勅許をまたずに鎌倉へ下つた足利尊氏は、乱鎮定後も建武中興政府の帰京命令を聞かず、新田義貞討伐を名目として、公然と後醍醐天皇に反旗をひるがえした。尊氏は、翌延元々年（建武三一二三）正月入京を果たしたが、間もなく新田義貞に破れ、一旦丹波・兵庫を経て九州筋へ逃れた。しかし、四月に至り軍容を直して東上を開始し、湊川の戦に楠木正成を破り、六月再び京都を占領した。

それより、比叡山に行幸した後醍醐天皇を守る新田義貞軍と、連日の激戦を交えることとなるが、この文書は丁度その時期、和泉国（大阪府）大鳥郡の武将和田氏に出兵をうながしたものである。なお、高野山文書や三宝院文書中には、これとほぼ同文で、尊氏が高野山衆徒や根来寺衆徒に対し、助勢を求める文書が收められている。

⑭大乗院門跡尋憲筆  
『越前国相越記』

一綴

鯖江市 山田竜治氏寄託

天正三年（一五七五）八月、興福寺大乗院門跡尋憲が、越前の一向一揆討伐中の織田信長に、寺領の回復を願うため、越前へ下向した際の旅日記である。天正三年八月二十一日から九月十一日に至る間が記録され、検討の余地はあるが、ほぼ尋憲の筆と推定して差しつかえないようである。

信長軍の凄惨な一揆狩りの様子や、戦火に荒廃した越前国

内の状況などが克明に記録されており、中世末期の史料として貴重な価値を有している。

⑫伊達政宗書状

一通

今明日中ニ自ニ  
御取成奉レ頼候。以上。  
会津正勝景勝

越葵文庫蔵

慶長五年（一六〇〇）九月廿八日付、結城秀康宛。

一通

最上出馬之由  
申来候。此刻  
白河境迄も御  
出馬候者、南北へ之

手遣伺も罷成間

敷候。乍レ去不レ可レ過二

御分別一候。恐惶謹言

羽越前

九月廿八日 正宗（花押）

羽越前

御報

鉄砲千丁

存分一之由、此方へも

其外足輕數多

被レ成二御書一候。弥

相添遣二御書一候。々々

御吉左右奉レ待候。

差置申候。勿論

然而最上ニ陣

内府様へ之

取仕衆二御書一候。々々

御首尾迄候。如レ此候。

在陣候。結句

上方へも此由、今次ニ

慶長五年（一六〇〇）、有名な関ヶ原の合戦がばつ発した時、のちの福井藩祖結城秀康や奥羽の猛将伊達政宗は、関東・東北に陣を張つて、石田三成と連繋する会津の上杉景勝と戦つていた。秀康や政宗の任務は、徳川家康率いる東軍が、後顧の憂なく西軍と激戦しうるよう、上杉軍を牽制し、その動きを封じておくことであつた。

しかし、関ヶ原の合戦（九月十五日）前後の伊達政宗の活動は、上杉軍に対して果敢な攻撃をしかけたり、縁類にあたる最上氏へ多数の援軍を送つて、上杉軍の最上領侵攻を撃退するなど、牽制の範囲を越えた目ざましいものであつた。

この書状は、上方における関ヶ原合戦の直後、慶長五年九月二十八日に発せられたもので、会津口の総大将結城秀康か

らの戦況問合せに対し、最上方面の状況や自軍の活動について報告している。

◎伊達政宗書状付属 松平春嶽筆 由緒書付類 二綴

右の伊達政宗書状には、「羽越前」と署名があり、宛名も「羽三州」とあるのみで、これだけでは伊達政宗から結城秀康へ差出したものかどうか、即断は困難である。安政元年（一八五四）、自家の重宝中にこの書状を発見した松平春嶽も、同じ疑問を抱き、早速伊達氏一族の親友伊達宗城（宇和島藩主）や、仙台藩主伊達慶邦に調査を依頼し、伊達政宗が一時期「羽柴越前守」を名乗った時期があったことを確認した。

これらの春嶽自筆の書付類は、政宗の書状を永久に保存するため、そうした調査結果を詳細に記録し、政宗の書状と同箱に収納して、後代の混乱を避ける措置を講じたものである。

⑯徳川家康書状

越葵文庫蔵  
一通

為伏見城へ移候

祝儀、太刀一腰

馬一疋<sup>井</sup>紅花

五十斤送給、珍

重候。猶阿部伊勢守

可レ申候條、不レ能<sup>レ</sup>具々一。

恐々謹言

七月廿五日 家康（花押）

宛名の「結城左衛門督」は、藩祖結城秀康の養父結城晴朝のことと思われる。

豊臣秀吉は、天正十九年（一五九二）以降伏見城構築の工事を起し、のちこの城を京都における豊臣氏の本拠と定めて、嗣子秀頼と共に五ヶ年を過し、慶長三年（一五九八）八月に歿した。翌年正月、秀頼は大阪城に移り、伏見城は徳川氏が預かることとなつた。

従つて、この書状は慶長四年伏見城を預かつた徳川家康に、結城晴朝が祝儀の品を贈つたことに対する礼状と思われる。

⑰徳川秀忠書状

越葵文庫蔵  
一通

御状本望至候

仍越前国御拝領

御祝着之由候旨

以小栗五郎右衛門

被仰上之段、尤存候。

誠目出度存候。此方

弥静謹御座候間

可御心安候。尚期<sup>二</sup>後音<sup>一</sup>候。

恐々謹言

中納言

正月四日 秀忠（花押）

結城宰相殿<sup>まいる</sup>

結城左衛門督殿

一代将軍秀忠が、実兄結城秀康に宛てた自筆書状である。

紙面の剥離が激しく、一部解読が困難であるが、慶長五年

(一六〇〇)十一月、越前国主に任せられた結城秀康が、大阪滞留中の父家康と秀忠に使者をたて、厚遇を謝したのに対

する、慶長六年正月四日付けの祝言の書状である。

なお、松平春嶽の自筆で「越前家第一之珍宝」との箱書がある。

⑬結城秀康書状

越葵文庫蔵  
一通

猶々思召之

尊書被レ下過分

態使札以申上候

奉レ存候

其元何事無ニ

御座御そくさい

に御座候哉。無御

心元奉レ存候。爰元

相かはる儀無レ之

越葵文庫蔵内府様御むひやう

に御きけん能

御座候条御心安

可レ被<sup>二度</sup>思召<sup>一</sup>候。次ニ

石田治少<sup>二度</sup>は晦日

九州へ罷下、高

麗之御人衆

引取可レ申之由

ニ御座候。弥々

相かわる儀無<sup>二</sup>御

座<sup>一</sup>候條、御きつ

かいに思召被<sup>一</sup>成間

敷候。態斗<sup>二</sup>

はほり三ツ進上  
申候。尚重<sup>而</sup>可

⑭領知目録

⑮徳川家光内書  
一通

越葵文庫蔵

一卷

越葵文庫蔵

一通

年不詳五月四日付、越前宰相(三代藩主松平忠昌)宛。

江戸時代、諸国の大名は領国の郡村を書上げて幕府へ提出し、これを各大名の領地として認める將軍の朱印状を授与されて、領国の經營にあたつた。その際、朱印状には領地郡村の詳細な目録が添えられたが、これが「領知目録」である。なお、將軍の代替には前將軍の朱印状を新將軍のそれと引換えて、更にその確認を受けることになつていたから、大名の手許には歴代將軍の朱印状原本が残らぬのが普通である。現在、越葵文庫には、福井藩主に宛てた正徳二年四月、享保二年八月、享保九年正月、延享三年十月、宝暦十一年十月、天明八年三月、天保十年三月、安政二年三月付けのものと、松岡藩主にあてた正徳二年四月、享保二年八月付けの計十卷の「領知目録」原本が保存されている。

レ得ニ貴意一候。恐惶謹言

十月三日 秀康（花押）

秀忠殿 羽二河守

秀康

下総（茨城）結城城主時代の秀康が、実弟徳川秀忠へ宛てた自筆書状である。

書中、「石田治少は、晦日九州へ罷下、高麗之御人衆引取可レ申之由」などと、朝鮮出兵の諸軍撤退のことに触れていたから、慶長三年（一五九八）十月の書状と思われる。関東の留守を守る秀忠に、上方の状況を知らせたものであろう。

⑬松平忠直宛行狀

福井市春嶽公記念文庫蔵

宛行知行分之事

一高百石ハ 府中領大屋村内  
一高五拾石ハ 大野領新庄村内  
合百五拾石

右知行所全可令領知  
者也仍如件

慶長拾五年戊

卯月十六日（黒印）

中根孫右衛門尉との  
中根孫右衛門尉との

宛行知行分之事

高合五拾石者府中領当田村内

右為加増令扶助訖  
全可領知者也仍如件

元和八年戊

極月廿三日（黒印）

福井藩士中根家に伝來した福井二代藩主松平忠直の宛行状で、中根孫右衛門尉は、中根家の初代貞経にあたる。貞経は、忠直の豊後国（大分県）配流に随従し、同地で歿した。忠直の宛行状は、この二通のほか現存するもの極めて稀である。

中根孫右衛門尉との

編集実務担当者

解説編  
学芸員

解説集  
五十四郎

デザイン  
主事　足西原伴  
主幹　立村直  
副事　喜代英之  
副幹　尚樹計  
平山本立尚樹計  
長谷川弦美月

主査

主幹

福井市立郷土歴史博物館

名品図録

編発行 昭和五十八年十月三日

集 福井市立郷土歴史博物館  
〒910 福井市足羽一丁目八番二六号

電話(0776)3512845

印刷 河和田屋印刷株式会社

明珍吉久作 鉄製龍の置物  
題字 山田誠一書



SELECTED TREASURED ANTIQUES  
FUKUI CITY MUSEUM OF HISTORY